至極最強

秋月あきら（ししゃもにゃん）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
至極最強

【Ｎコード】
Ｎ２９９９Ｉ

【作者名】
秋月あきら（ししゃもにゃん）

【あらすじ】
学園ラブコメっぽいもの。ずいぶんと前に書いたアドベンチャーゲームのシナリオです。なろう用に書き換えようと思ったのですが、途中から未編集です。刹那編に関しては動作の指示とかも書き込んだままで、選択肢もあたっりして、かなり読みづらいと思います。

明日香編（1）

もうすぐ夏休みだってのに、今日も雨かよ！

頼むから早く梅雨明けしてくれ、高校最後の夏休みが冷夏なんて俺は断じて認めんぞ！

今年の夏こそは可愛い女の子たちと、海行って、祭り行って、彼女と一緒に花火を見るんだ！！

そう、今年の夏は俺の夏！

夏が俺を呼んでいる……と言ってる自分が寒くなって来た……さっさと学校行くか。

明日香編（2）

雨の日の電車は込む。

朝のラッシュ＋αで湿度と気温によってオッサン臭全快だ。

拷問か罰ゲームとしか考えられんな。

オッサンのかほりで脳ミソがマジ死滅する。

ま、まさか！？

そのせいで俺の学力が低下しているのか！？

た、確かに、雨の日はユウウツでなんもヤル気がしない。

それがオッサン臭のせいだったとは……気づきもしなかった。

オッサン臭、恐るべし！

だが、俺がそんな困難にもめげず、学校に行かねばならんのだ。

なぜって、学校サボリ過ぎて出席日数が危ういらしいと、担任に脅されたからだ。

そんなわけで今日はいつもよりも早く家を出てしまった。

いつもと違う時間の違う車両に乗ると、乗ってる乗客も変わってくる。

俺は車内を見渡したが……なんのおもしろみもない。

見渡して損した。

俺はいつものようにドア近くでｉＰｏｄを聞くことにした。

軽快なリズムと激しいドラム音がいい感じだ。

――ぐあっ！？

オッサンに足踏まれた。

最悪だ。

ただでさえ雨の日っていうのはだな、制服は濡れるし、せっかくセットした髪はぐちゃぐちゃになるし、ズボンの裾に泥が跳ねるし……。

ううっ！！

オッサンの肘鉄が俺の腹にクリティカルヒット！！

だが、俺とてやられているばかりではないのだよ！

ちっちゃな仕返しとして、濡れた傘をオッサンのスーツに何気なく擦り付けてやった。

俺は拳を握って、ちっちゃな勝利感に浸った……。

ああ、ウィナー俺！

流れる景色がゆっくりになって来た。

学校がある駅までは１つだけ駅を通り越す。

いつも急行電車に乗るから通り越す駅なんだが、今日はその駅で電車が止まった。

ドアが開いた瞬間、俺は思わずはっとした。

……桜井明日香（さくらいあすか）。

同じ学校の同じクラスの小柄なボディに子悪魔チックなつり上がった目を持つ、超美少女の桜井が同じ電車に乗り込んできたじゃありませんかっ！？

自分でもなんでかわかんないけど、俺はすぐにｉＰｏｄの停止させた。

桜井がドアの前に立って、俺がその前に覆いかぶさるように立つ形になった。

俺は右手をドアについて桜井を庇うようにして、桜井の周りに空間を空けた。

これが俺にできる精一杯の思いやりさ……ふっ。

自分の周りに空間ができたことに気づいた桜井がふと顔を上げた。

桜井の視線と俺の視線が合う。

ぐあっ、睨んでるよ！

桜井は俺のことを下から上目遣いで睨んですぐに顔を下げた。

ど、どうしてだよ！？

空間を作ってあげたのは余計なお世話ってわけかよ！

ふっ……でもいいのさ、少しの瞬間だったが視線が合ったんだから……俺はそれだけで１日ハッピーデイさ。

でも、今の上目遣いは悩殺されちまうほど可愛かった。
あの桜井のガン飛ばしは心のメモリーにしまって置くぜ。

ん？

すんげえいい香りがしてくる。
あっ、桜井の香りじゃんか。
桜井の髪の毛からいい香りがしてくる。
オッサン臭とは天と地……いや、俺と蟻んこほどの差だ。
俺は桜井に気づかれないように大きく息を吸い込んだ。
ああ、匂いだけで今晩のオカズになりそうだ。
モーソーが頭をネバーエンディングに駆け巡る……。
いかんいかん、生唾をごっくんしてしまった。
ってまた桜井に睨まれた！！
生唾を呑む音が聞こえてしまったのか？
すぐに俺は顔を上げて中吊り広告を見ているフリをした。
ぐあっ！？
ちょうど視線をやったとこがオトナの雑誌の広告じゃんか！！
ヤバイ、桜井にエロ男だと思われてしまう。
って、すでに桜井は俺のこと見てないし！
まあ、とにかくよかった。

うわっ！

電車がガタンと揺れて、俺の身体と桜井の身体が密着してしまった。

桜井は俺の胸に頭を押し当てる形になって、桜井の髪に俺の吐息がかかる。

心臓が痛いほどドキドキしちまってる。
きっと、桜井に心臓の音が聞こえてるに違いない。
そう考えると余計に心臓がドキドキしてくる。
なんかすっげえ悪循環。

冷静になるんだ俺。

ひとりでテンパってどうする！？

だが、モーソーが頭を過ぎる……。

ヤバイ、下半身が……。

大丈夫だ、大丈夫だ、ってか何が大丈夫なんだ俺！？
明らかに混乱してるぞ！

いや、混乱してるって自覚があるんだから混乱してない！
いや、混乱してるのか！？

ガタンと再び車内が揺れた。

【明日香】「痛っ……」

桜井が獲物を殺る眼で俺を睨んだ。

うわっ、やっちまった。

ハンターを本気で怒らしちゃったよ。

桜井の足を踏んじまったよ、おい。

【渉(わたる)】「悪い、踏んじまった」

俺の謝罪なんてどうでもいいように桜井はすぐに下を向いた。

相変わらず無愛想な奴だな。

でも、そこが俺の心をくすぐるんだがな。

しばらくして電車が駅について停車した。

そしてドアが開かれた瞬間！

【渉】「痛ぇーっ！！」

桜井が俺の足を思いっきり踏んづけて人ごみの中に爆走していった。

仕返しか！？

仕返しなのか？

さっき俺が桜井の足を踏んづけた仕返しか……。

ドアが開いた瞬間に俺を足を踏んで逃げるなんて……すっげえ汚ねえ女！

俺は大声を出したことによって周りの注目を浴びてしまって、そ

の場を赤い顔をしながら逃げ出すように走った。

階段を登るところで階段を駆け上がる桜井の後ろ姿が見えた。

おおっ！！

階段を駆け上がる桜井のスカートがめくれ上がり、神々しいまでの光が！

白だっ！！

偶然にも桜井のパンチラを目撃してしまった。

ヤバイ、ケータイカメラで激写しなくては！

ってそんなことしたら駅員に連行されそうだからやめとこ。

だが、俺は今のパンチラを生涯忘れない！

俺の心のアルバムに大事にしまって、いつでも夜に取り出せるようにしておこう。

駅の改札口を抜けて駅の出入り口に着くと、桜井が空を眺めて突っ立っていた。

雨の勢いが増している。

あれっ？

桜井のやつ傘持ってないじゃんか。

いや、俺も今日は傘を持って家を出るべきか迷った。

家を出た時はそんな降ってなかったもんな。

でも、テレビで美人天気予報士のお姉さんが雨が強くなるって言ってたから、ちゃんと俺は傘を持って出たぞ。

……さて、これからどうするかが俺的に運命の分かれ道だな。

何気なく桜井に一緒に傘に入っていくように勧めるのが妥当な線だよな。

でもなぁ、あいつ俺のこと嫌いっぽいんだよな。

いつも俺に対して冷たいし、たまにしゃべれたかと思うと、俺を叩きのめすような暴言ばっかり言ってくるし。

まあ、桜井のやつは俺以外のやつにも冷めた態度で付き合ってるし、男嫌いっぽいし、仲のいい友達しか寄せ付けない感じするよな。

それにしても俺は特に嫌われてるような態度をいつも取られているような気がするのは気のせいだろうか？

って、こんなことを考えてないで、早く桜井に声を掛けねば！

【渉】「あのさ、桜井」

ぐわっ！

振り返りざまにいきなりガン飛ばされた。

【明日香】「なに？」

たった一言の言葉の奥底に敵意を感じるのは俺だけでしょうか？

【渉】「傘持ってねえの？」

【明日香】「止むと思ったから持ってきてない」
【渉】「一緒に入ってくか？」
【明日香】「ヤダ」

即答かよ！

【明日香】「男子と一緒に傘に入ったらみんなにからかわれるでしょ？」
【渉】「でもさ、俺が親切で言ってるんだから」
【明日香】「親切心があるなら傘だけ貸してよ。君がいつもみたいに遅刻しないから、雨　なんて降ってるんだから」
【渉】「はぁ？」
【明日香】「傘だけあたしに貸して、君は学校までダッシュすればいいんじゃないの？」
【渉】「はぁ？」

なに言っちゃってくれてるんだ、この小娘は！？

とか思ってる隙に桜井が俺の傘を取り上げて、傘を差して雨の道路を歩いて行ってしまった。

置いていかれた俺は一瞬放心状態に陥ったのち、我に返って大ショック！

【渉】「コンチキショー！！」

俺はそう魂から叫んで土砂降りの中に飛び出し、何事もなかったように傘を差して歩く桜井の横を青春涙を流しながら通り越した。

こんなもんさ俺のジンセーなんてさ……。

明日香編（3）

学校まで距離は近い。

俺は雨にも風にも負けない。

でも、びしょ濡れでパンツまで雨が染みてきた。

……さ、寒い。

なんだか、心も寒いぞ。

しかし、ここで天の声が！

【真央（まお）】「麻生（あそう）さん」

俺に声を掛けたくれた女神は同じクラスの結城真央（ゆうきまお）だった。

真央は小柄で桜井よりも小さいと思う……小学生と間違うくらいだな。

でも、本人に小さいとか言うと怒られるので禁句。

【真央】「麻生さん、傘持って来てないんですか？」

【渉】「これには深い事情があるんだが……」

【真央】「風邪引いちゃいますから、真央の傘に入ってください」

【渉】「あ、うん、サンキュ」

真央はいつもはテンション高めなんだが、なんだか今日は静かだな。

そう言えば、真央は男子が苦手とか聞いたことがあったような気

がするな。

じゃあ、なんで俺を傘に入れてくれたんだ？
そもそも、真央とはそんなにしゃべったことないしな。

ま、そんなことどーでもいいか。

誰かの視線を感じたような気がして横を見ると、真央が俺のこと見てた。
でも、すぐに真央は顔を下に向けてしまった。
やっぱり男子苦手なのか？

【渉】「あのさ」
【真央】「は、はい、なんですか！？」
【渉】「今、俺の顔ずっと見てたよね？」
【真央】「み、見てません！」
【渉】「そんなに強く否定しなくてもいいじゃん」
【真央】「見てません、麻生さんの顔なんて見てませんから！」
【渉】「だから、そんなにムキになって否定しなくてもさ」
【真央】「……」

真央は顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。
……この子のことはよくわかんないな。

こうやって真央のことをじっくり見ると結構可愛いなぁって思う。
クラスでも結構人気あるもんな。

顔を赤くしたままの真央がゆっくりと顔を上げて俺を見た。

【真央】「あ、あのぉ、真央と一緒に傘に入ってて迷惑じゃないで

すか？」
【渉】「別に……」
【真央】「やっぱり迷惑ですよね。
真央と一緒に傘なんて入ってたら、変な噂されて麻生さんが迷惑ですもんね。ああ～っ、ごめんなさい、ごめんなさい……」
【渉】「いやいや、別に迷惑じゃないって……」
【真央】「そんな気を遣ってくれなくていいです。わかってるんです。麻生さんは優しい方ですから、真央に気を遣ってくれてるんですよね。本当は一緒に傘なんて入りたくないんですよね。そうなんですよね、そうなんでしょ……ううっ」
【渉】「だからさ、どうして勝手にそんな想像するわけ！？　俺は別に迷惑だなんて一言も言ってないじゃんか？」
【真央】「いいんです、いいんです。真央が全部いけないんですから……」

なんつー爆走少女なんだ。
被害妄想っていうか、想像力豊かっていうか、やっぱり爆走みたいな……。

【渉】「別に真央ちゃんはなにも悪くないし、傘に入れてもらって感謝してるし」
【真央】「ああっ、今、真央のこと真央って読んでくれましたよね。嬉しいです、麻生さんに名前読んでもらったの初めてです。真央の名前なんて知らないと思ってました」
【渉】「いや、クラスの女の子の名前は全員チェック済み」
【真央】「じゃあ、真央の苗字も知ってるんですか？」
【渉】「結城でしょ？」
【真央】「そうです、感激です！　真央のフルネーム覚えてもらえるなんて感動しました」
【渉】「あ、そう、それはよかった」

だんだん真央のテンションが上がって来たように感じるのは俺だけか？
明らかに俺の目には真央がはしゃいでるように映るが……。

【真央】「ああっ！？　渉さん！」
【渉】「えっ？」

間抜けな声で返答したその時だった。

黒いリムジンが水溜りの泥水を飛ばしながら走り去って行った。
……言うまでもないが、俺にかかった。

【真央】「麻生さん大丈夫ですか！？」
【渉】「ああ、平気平気。もとからズブ濡れだったし……はっくしょん！」
【真央】「やっぱり、風邪引いちゃったんですね。すぐに学校に行って服を着替えて、身体を乾かさないと悪化しちゃいますよ」
【渉】「大丈夫だから……病院代はリムジンの持ち主に請求するから」
【真央】「あのリムジンって刹那（せつな）さんですよね？」
【渉】「聞くまでもないだろ、リムジン乗って学校登校して来る野郎は夕凪刹那（ゆうなぎせつな）しかいねえだろ」

刹那は俺のライバル的存在だ。
確かに奴は金持ちで美形で才色兼備の生徒会長だがな、言うまでもなく奴は変人だ。
あとで教室に行ったら刹那に文句言ってやる。

【彰人（あきと）】「よお、渉。今日は女の子と一緒に登校かよ」

【渉】「よっ、彰人」

俺に声を掛けて来たのはダチの彰人。

こいつとは腐れ縁って感じで、小3の時に引っ越してからの付き合いになるから、思春期の俺の恥ずかしい話を握ってやがる。

【彰人】「結城さんと同じ傘なんて入って学校なんか登校してたら、クラスの男たちに殺されるぞ」

【渉】「これには深い事情があるんだよ」

【真央】「やっぱり真央と一緒に傘に入ってたら麻生さんに迷惑でしたよね。ごめんなさい、ごめんなさい」

【渉】「だからさ、真央ちゃんはなんも悪くないから」

【彰人】「朝っぱら女の子を泣かすなんて酷い奴だなおまえは」

【渉】「なんだよ、俺って悪役かよ！」

【彰人】「ああ、おまえは人間のクズだからな」

【真央】「あんまり麻生さんのこと悪く言わないでください。真央が全部悪いんですから」

【渉】「だから、なんでそういう展開になるわけ？」

【彰人】「あ～あ、すっかり渉は悪役だな」

【渉】「そうやって悪態つくおまえが影の悪役だ」

【真央】「二人とも真央のせいでケンカしないでください……」

うわっ！

なんだか状況が意味もなくこんがらがってきちゃったよ。

しかも、真央がマジで目に涙を溜め始めたし。

やっぱ俺が悪いのか？

俺って悪役なのか？

俺が謝れば済むのかよ！

あーっ、俺が全部悪いのさ、俺なんてクソだよ。

【渉】「別に俺たちケンカしてるわけじゃないしさ」

【真央】「本当ですか？　真央のせいじゃないんですか？」

【渉】「真央ちゃんはなんにも悪くないから。命賭けてもいいよ」

【真央】「よかったですぅ」

【彰人】「渉、俺の傘に入ってけよ」

【渉】「そうだよ、なんでそれを早く言わなかったんだよ。これで問題全部解決だな、うん。じゃあ、そういうことだから、真央ちゃんここまでサンキュな」

【真央】「あ、はい……」

真央はなんだかうつむいてさっさと歩き去ってしまった。

やっぱりよくわからん子だな。

【彰人】「結城さんってさ……」

【渉】「途中で言葉止めんなよ」

【彰人】「おまえのこと好きなんじゃねえの？」

【渉】「はぁ～っ！？」

【彰人】「おまえが気づいてなかったら、おまえは鈍感のクソ男だな」

【渉】「そんなわけないだろ。真央ちゃんが俺のこと好きなわけないだろ。思い当たる節なんか……」

あるかもしれんぞ。

いや、そんなまっさか～っ。

【渉】「そんなわけねえよ、だって真央ちゃんって男嫌いだって言うし」

【彰人】「結城さんはおまえのこと好きだよ」
【渉】「だから、なんでそんなことわかるんだよ」
【彰人】「俺だからわかるんだよ」
【渉】「俺だからわかるって、おまえはいつからエスパーになったんだよ」
【彰人】「結構前からだな」
【渉】「そ、そうだったのか……おまえってエスパーだったのかよ、ぜんぜん気づかなかった……ってそんなわけねえだろ」
【彰人】「まあ、とにかく俺にはわかるんだよ。俺はおまえと違って鈍感じゃないからな」
【渉】「鈍感で悪かったな……あっ」
【彰人】「どうした？」

桜井が何食わぬ顔っていうか、俺のこと完全無視で通り過ぎて行った。

【彰人】「あれって桜井さんだな。でもよ、なんだか似合わない傘持ってるよな」
【渉】「俺の傘だよ、あれ」
【彰人】「ほぉ、だからおまえそんなにびしょびしょなのか」
【渉】「だから、いろいろあったんだよ」
【彰人】「学校行きながら聞かせろ」
【渉】「ああ、聞かせてやるよ」

俺は今朝の満員電車からの話を彰人に聞かせながら学校に向かった。

明日香編（4）

教室に入って俺は即座に刹那の野郎を探した。

……探すまでもなかった。

刹那目立ちすぎ。

机にテーブルクロスを敷いて、足組みしながら朝のティータイム&読書なんてしちゃったりくれちゃってるのは奴しかいない――夕凪刹那、貴様だっ！！

俺が思うに刹那ほど白い学ランの似合う奴はいない。

てゆーか、うちの学校ブレザーなのに、刹那だけ白い学ラン……真夏でも。

ここは一つガツンと言ってやりたいところだが、ここは一つ作り笑いでも浮かべて話しかけよう。

【渉】「おい刹那、話がある」

【刹那】「お早う渉クン」

ううっ、眩しい……刹那の白い歯が人口太陽と化して俺の目に直撃！

この刹那の必殺爽やか笑顔に何人の戦士たちが敗れていったことか……俺は無念でならない。

だから、俺は刹那に勝つ！！

【渉】「俺を見てなんか思いつかないか？」
【刹那】「むさ苦しい」
【渉】「違う」
【刹那】「性別オス」
【渉】「……違う」
【刹那】「ＩＱ猿以下」
【渉】「……違う！　俺の服に泥が跳ねてるだろうが！」
【刹那】「あ～っ雨の日に泥んこ遊び、おもしろそうだね。でも、どうせやるなら着替えを用意してなきゃね。うっかりさんだなァ、渉クンは」
【渉】「……おまえが女じゃなかったら、俺は速攻でおまえを殴り飛ばしてたぞ」
【刹那】「わァ、暴力反対」

今のセリフを抑揚のない感情ゼロの棒読みで言いやがった。
そーゆー言い方されるとよけいに腹が立つ。

俺は拳をぎゅっと握り締めて、モーソーの中で刹那にあ～んなことや、こ～んなことをしてやったぜ……ニヤリ。

ったく女子のクセして男子の制服着やがって……萌えるだろ！！

しまった、俺自身がよからぬモーソーをして話を本題からずらしてしまうところだった。

恐るべし刹那マジック！！

って俺が勝手にモーソーしただけか。

【渉】「え～と、だから俺が言いたいのはだな」

【刹那】「着替え忘れたから貸してくれ？」
【渉】「俺の話を最後まで聞け！　だから、つまり、おまえのリムジンに泥水を引っ掛けられたんだよ」
【刹那】「……へぇ、クリーニング代は出すよ」
【渉】「そうじゃないくって、ごめんの一言もないのかよ」

無表情な顔をワザと作った刹那が一言。

【刹那】「ごめん」

うわっ、信頼性＆信憑性ゼロ＋誠意もマイナス１００って感じだよ。

【渉】「だからさ――」

俺が刹那に話をしようとしていると、俺の肩を誰かが軽く叩いた。

【彰人】「生徒会長にまともな会話を求めるな。この方はパンピーとは会話の次元が違うんだよ。生徒会長と会話ができるのはカミサマだけだな」
【渉】「確かに……って言ってる間に刹那のアレがはじまったぞ」
【刹那】「ああ……時間が見える」

眼とつむり天井――いや、宇宙を見上げる刹那。
奴はカミサマと〈交信〉している……のだ？

刹那が〈交信〉をはじめると誰もが刹那の〈信託〉に注目する。

【刹那】「……1時限目に抜き打ちテストがあるよ」

この瞬間クラスがどよめき慌て出す。
刹那の〈信託〉は絶対で、刹那が1時限目に抜き打ちテストがあると言ったら、絶対に1時限目にテストが行われる。

【渉】「1時間目ってなんだっけか？」
【彰人】「数学だな」
【渉】「ゴリラの数学教室か……。つーかさ、あのゴリラって抜き打ちテストばっかりやるよな」
【彰人】「赤点取ると恐怖の補習授業が待ってるぞ」
【渉】「じゃあ、しょうがないから勉強でもすっか……」

と、その前にジャージに着替えて来ないとな。
俺はジャージを持って更衣室に行こうと廊下に出ようとした。

そこで運命的な出会いがっ！！

ちょうど桜井が友達Aと一緒に教室に入ろうとしているところで俺とすれ違ったのだ。

だが、しかし！！

シカト。

桜井は俺と視線を合わせることなく教室の中に入って行ってしまった。

今の俺の心境は告白する前からフラれた男の心情って感じだ。
青春してるよな俺って……。

桜井が教室に入った途端、優雅に読書なんぞしとった刹那が勢い

よく席から立ち上がった。
俗に言う刹那スイッチオンだ。
【刹那】「明日香マイラ～ヴ！」
【明日香】「うわっ！？」
身体を強張らせた桜井に、華麗なまでに鮮やかに床を蹴り上げた刹那が桜井に抱きついた。
……朝っぱらからよくやるよな。
伊達に刹那は男装しているわけじゃない。
刹那の野郎は美少女大好きなのだ。
【明日香】「ちょっと、離れて！」
【刹那】「なにを言うんだい？　ボクらは赤い糸という運命に結ばれているんだよ！」
【明日香】「ヴァカじゃないの！？」
【刹那】「明日香の前では、ボクはバカになってしまうのさ……あはは」
刹那は桜井の小柄な身体をぎゅっと抱きしめて、桜井の頬に自分の頬をスリスリしてやがる。
羨ましいが、男があんなこと桜井にやったら殺される。
股間蹴られてＫＯだな。
【明日香】「刹那の香水の匂いが付くから離れてってば」
【刹那】「もうボクは君のことを決して放さないよ」
【明日香】「雪乃（ゆきの）も見てないで助けてよぉ」

名前を呼ばれて桜井の友達Ａがにこやかな笑顔でしゃべりはじめた。

【雪乃】「ほらほら刹那さん、あんまりしつこい子は明日香に嫌われちゃうわよ」

【刹那】「……運命の悪戯か、愛の試練か、ボクらの仲はここにいる雪乃クンによって引き裂かれようとしている。ああ、ボクらはこんなに愛し合ってるっていうのに……」

【明日香】「愛し合ってなんかないってば！」

【刹那】「そんな照れることないんだよ。口ではそんなこと言っていても、ボクは君の本当の気持ちを知っているのだから……」

【雪乃】「刹那さんが明日香のこと好きなのはわかったら、ほら、もうすぐチャイム鳴っちゃうから席に着かないといけないでしょ？だから明日香のこと放してあげて、ね？」

【刹那】「……しかたないね。学校というルールの中にいる以上、ここのルールに従わねばならない。チャイムが鳴ったら席に着かなければならないからね」

よかった、刹那スイッチオフになったようだ。

スイッチオンの時の刹那は俺よりも恋愛モーソー爆発だからな。

つーか、そんなことよりもチャイム鳴る前にジャージに着替えて来ないとな。

俺が急いで更衣室に向かおうと後ろを振り返ろうとした時、俺の視線がなぜか桜井と合った。

しかもまた睨まれた！

ぐわっ！？

な、なぜに睨まれる？

今回ばかりはマジで意味不明だぞ。

桜井はすぐに俺から視線を外して何事もなかったように自分の席に着いた。

俺は意味不明のまま、モーソー駆け巡る頭を悶々とさせながら廊下を走って更衣室に向かった。

そして、心の中で叫ぶ。

意味わかんねえよ！！

明日香編（5）

1時間目の抜き打ちテストはマジで撃沈した。

テストが事前にあるってわかってても、公式を覚えるのが俺にできる精一杯の勉強法で、数学の場合は問題の中に出てくる数字がいくらでも変わるからな……。

まあ、とにかく俺は言い訳はしないぞ。

解答欄の半分埋まってねえ！！

ふっ、夏休みの補習を正々堂々と受けてやればいいんだろ！

と逆切れしてもはじまらんな。

せっかくやっと昼休みになったんだから弁当でも食うとするか。

さてと、彰人はどこにいるかなっと……いねえ！

いねえよ、彰人がいねえ！？

いつも一緒に弁当食ってるんだが、今日はどこにも見当たらねえな。

あいつどこ行ったんだ……まいっか。

雨の日は教室で弁当を食うんだが、今日は気晴らしにどっか行ってみるか。

○1．やっぱここは妥当に教室で食う――※1へ（明日香＆雪乃）

×2．雨の日は特に人が来ないと思われる屋上に通じる階段――※2へ（真央＆彰人）
×3．冒険心って大事だよなってことで当てもなく彷徨ってみる――※3へ（沙羅＆刹那）

明日香編（6・未編集）

教室で弁当を食うことにした俺は弁当箱を机の上にババーンと置いて、今日は独り寂しく昼食を食おうとした……。

ぐあっ！？

【渉】「箸がねえ！」

思わず声に出して叫んじまった。

クラス中の視線を集めちまって恥ずかしい。

本当はここで泣きながら廊下に飛び出したいところだが、そんなことことをしたら後でもっと恥ずかしいことになるからやめておこう。

よし、冷静になって考えるんだ俺。

超天才的な頭脳をフル回転させて考えろ、考えろ、考えろ……。

俺は超天才じゃねえ！！

しまった、迂闊だった。

俺は凡人だったんだ。

よし、凡人は凡人なりに考えろ、考えろ、考えろ……。

思いつかねえよ！！

購買に行って箸を恵んでもらうか……。

いや、あそこのオバサンはケチだから無理だ。

じゃあ、購買でなんか買って箸を手に入れるか？

いや、それは金がもったいない。

しかたない、最終手段を取るしかないな。

食わねえ！

昼食なんて食ってやるか！

一食くらい抜いても死にはしないのだ。

これぞグッドアイディア！

ぎゅるるるるぅ〜〜〜。

わおっ、俺の腹って正直。

くそぉ、腹が鳴りやがった。
腹が鳴るとよけいに腹が減るじゃねえか。
だが、俺は食わないと決めたんだ。
男はこれと決めたら絶対にそれを最後まで突き通すもんさ。
ぎゅるるるるぅ～～～。
……俺の腹のバカヤロー（泣）
【明日香】「これ使う？」
俺が顔を前に向けるとそこには女神様……じゃなかった、桜井が立っているではありませんか？
しかも、その手には割り箸を持っているじゃないですか？
もしや、それを俺にくれると言うのですか！？
【明日香】「使うの使わないの？」
【渉】「あ、いや、えっと」
なにテンパってんだ俺。
俺ってばしっかりしろよぉ。
【明日香】「使わないのね」
少し怒った顔をした桜井は俺に背中を向けて立ち去ろうとした。
このチャンスを逃しては末代までの根性なしだ。
【渉】「その箸くれよ」
俺が声を掛けると足を止めた桜井が数秒の間を置いて振り返った。
【明日香】「じゃあ、あげる」
【渉】「サンキュな桜井。つーか、おまえは箸なくて平気なのかよ？」
【明日香】「フォークで食べる」
桜井は言葉少なげに立ち去ろうとした。
だが、ここで逃がすわけにはいかない。
せっかくの桜井と話すチャンスなんだ！
【渉】「あのさ、なんで俺なんかに箸くれたの？」
【明日香】「別に……」
やっぱり桜井は言葉少なげに立ち去ろうとした。

やっぱ俺のこと嫌いなのか？
嫌いだから早く立ち去ろうとするのか？
いや、嫌いな奴に箸なんかくれるか？
もしかして俺のこと……なんてモーソーはやめておこう。
桜井が俺のこと好きなはずないもんな。
きっと俺のことが哀れすぎて箸をくれる気になったんだろう。
でも……。
俺はもう一度、桜井の背中に声を掛けることにした。
【渉】「桜井！」
【明日香】「まだなんかあるの？」
ぐあっ！？
振り返った桜井はいきなし不機嫌な顔でガン飛ばしてきたし。
やっぱ、ウザイって思われたかな。
俺としたことが恋愛パラメーターをわざわざマイナスにしちまった。
【明日香】「言いたいことあるなら早く言って」
【渉】「あのさ、一緒に飯食おうぜ」
【明日香】「あたしたちそんな関係じゃないでしょ？　ろくにしゃべったこともないのに」
ぐわっ！！　すんげえ冷たい言い方された。
痛恨の一撃を食らった気分だ。
確かに桜井と必要以上にしゃべったことないさ。
今日だって電車で一緒になったのにしゃべんなかったしさ。
どーせ、俺と桜井の関係なんてそんなもんさ……ケッ。
【渉】「冗談だから間に受けるなよ」
【明日香】「いいよ、別に」
……なんですとーっ！？
俺の中で桜井の言葉リピートオンしたが、確かに桜井は言ったよな？
【渉】「今なんて言った？」

【明日香】「麻生って耳悪いの？　一緒に食べてもいいって言ったんだけど」
ああ、神様仏様、桜井様……今の言葉はモーソーではないのですね。
生きててよかったって実感した。
つーか、これからも頑張って生きていこうって思った。
よし、ここはヤマシイ……じゃなかった、嬉しい気持ちを悟られないように普段ど～りに対応せねば。
【渉】「じゃあ一緒に食おうぜ」
【明日香】「あたしたちあっちで食べてるから、麻生が来て」
なんだか口調が冷たい。
わからん、わからんぞ。
一緒に食事してもいいって言いながら、口調が冷たいってどういうことだよ？
誰か説明してくれよ？
まあ、とにかく一緒に昼食をとるミッションに成功したわけだから、俺的には恋愛パラメーターが上がったように思えるのだが……？
なんだかんだで俺は桜井とランチタイムに成功！
だが、まだ二人っきりとは言えない。
そこには大きな障壁――桜井友人Ａが！？
【雪乃】「あら、麻生君、こんにちは」
【渉】「よっ、桜井友人Ａ」
しまった！？
ついうっかり頭の中の呼び名で呼んでしまった……いきなし印象マイナス。
【雪乃】「友人Ａ……もう１学期も終わるのに、私の名前を覚えてないのね」
緩やかで優しい口調なのに目が笑ってねえ！
マズイ、ターゲットを落とすにはその周辺からっていうのは基本だろ！

俺としたことが作戦ミスだ。
【渉】「えっと……冬田冬実……じゃなくって……」
ヤヴァイぞ、マジで名前わかんねぇ！
って横を見ると桜井が俺のこと呆れた顔して見てるし！
【明日香】「人の名前間違えるなんて……麻生ってサイテー」
【渉】「いや、冗談だ。俺はちゃんとこいつの名前を覚えてるぞ……」
覚えてねえよ！
【雪乃】「ちゃんと麻生君は私の名前が“神楽雪乃”だってことぐらい知ってるわよね」
神楽は俺のことをチラッと見てウィンクした。
もしかして神楽は俺のことをフォローしてくれたのか？
だったら、グッジョブ神楽！
【渉】「ああ、神楽の名前なんて知ってた知ってた。3年の始業式初日から知ってたぜ」
【明日香】「ふ～ん」
【渉】「その口調は疑ってるだろ。実は俺と神楽は桜井の知らないところで、大の仲良しさんだったりするんだぞ。なっ神楽？」
【雪乃】「ええ、明日香の知らないところで私と麻生は大の仲良しさんなのよ」
意外と神楽ノリがいいぞ！
【明日香】「ウソばっかり。どうして麻生なんかに話合わせるの？」
【雪乃】「あら、私と麻生君は大の仲良しさんよ。そうね麻生君は覚えてないみただけど……残念ね」
【明日香】「だから、作り話はいいよ。こんなヤツに構うことないんだから」
【雪乃】「別に作り話をしているつもりはないのよ。例えば、麻生君が野犬に襲われてズボン持ってかれちゃった事件とか……」
【渉】「……神楽雪乃……雪乃……ああっ！？」
封印されし俺の記憶が勝手にこじ開けられた。

【渉】「キサマ、神社の娘か！？」
【雪乃】「あら、やっと思い出した麻生君？」
【渉】「雪乃か雪乃か、キサマ猫被ってんじゃねえよ、おまえってそんなキャラじゃなかっただろおうが！」
【雪乃】「小さな頃の話よ」
【明日香】「……もしかして二人って知り合いだったの？」
なぜだか桜井の視線が痛い。
もしかして桜井は俺と雪乃の関係を誤解してるんじゃ？
俺と雪乃の関係は断じて桜井が思っているような関係じゃないぞ、って俺が勝手にモーソーしてるだけか。
【雪乃】「小学2年生まで麻生君とは仲良しさんだったのよ」
【渉】「つーか、同じ学校通ってるのに約2年と1学期間気づかなかったなんて……」
……いや、俺は何を恐れている？
雪乃と仲がよかった覚えがあるんだが……記憶が曖昧で……なにか重大なことを忘れているような？
まあいいか、桜井の親友が俺の知り合いだったってことで、俺と桜井の関係はグッと近づいた感じだ。
【渉】「まあ、とにかく三人仲良く昼食にしようぜ」
ランチでもしながら会話を弾ませることに俺はした。
桜井の昼食は手作り弁当じゃなくってコンビニ弁当だった。
【渉】「桜井って買い弁なんだ」
【明日香】「……別にいいじゃん、なんでも」
【渉】「桜井ってさ、なんでイチイチ突っかかるような口調で俺に話すわけ？　俺って桜井に嫌われてるのか？」
【明日香】「別に……」
【雪乃】「明日香は男子全員に冷たいから、麻生君が特別嫌われてるわけじゃないと思うわよ。ね、明日香？」
【明日香】「……こんな男あたし嫌い」
【渉】「はぁ！？」

もういい加減わけわかんねえ！
だったら、一緒に昼食ＯＫすんなよ。
【雪乃】「大丈夫だから麻生君。明日香はこの世にいる男全員が嫌いだから、特別麻生君が嫌いってわけじゃないのよ」
【渉】「でもさ、男が嫌いなら俺となんで食事なんてする気になったんだよ？」
【明日香】「気まぐれ」
【雪乃】「明日香は男全員が嫌いだけど、その中にもランキングが存在しているのよ。そうね、麻生君はそんなに嫌いじゃない位置にいるんじゃないかしら？」
それって喜ぶべきことなのか？
桜井ってホント意味わかんねえ女だよ。
最初は美少女だと思って気になってただけだけどさ、ずっと見てるうちにわけわかんねえ女だなぁって思って……いつの間にか桜井のこと考える時間が多くなって……。
夜も桜井のこと考えちまって……それで……あ～んなことやそ～んなことをモーソーの中で……。
【明日香】「麻生ってば変な顔してなに考えてんの？」
【渉】「いや、その、特になにも……」
【雪乃】「もしかして、えっちなこととか考えてたのかしら？」
グサッ！！
胸をナイフで直撃された。
しかも、雪乃は悪戯な笑みを静かに浮かべてやがる。
【明日香】「やっぱり男ってサイテー」
【渉】「うわっ、すんげえ誤解だって。雪乃が変なこと言うからだろ！」
【雪乃】「でも図星だったんでしょ？」
【渉】「図星だったけど……じゃなくって図星じゃないけど……とにかく誤解さてちまっただろ」
【雪乃】「渉は小さい頃からなんの成長もしてないのね」

【渉】「雪乃はなんか雰囲気が１８０度変わったよな」
【雪乃】「大人になったのよ」
ガキの頃の雪乃の記憶しかない俺から見ればホント大人になったよな。
雪乃は周りの奴らに比べても大人だよな。
ちっこい桜井と一緒にいたら特にそう見えるぜ。
って、いつの間にか桜井が不機嫌そうな顔してるし！？
どこで桜井の地雷を踏んだんだよ？
桜井が不機嫌になるきっかけがわかんねえよ。
あ、もしかして！？
桜井って会話に入れないとすぐに拗ねるタイプなのか？
【渉】「どうしたんだよ桜井？　機嫌悪そうな顔しちゃってさ？」
【明日香】「別に……いつもこんな顔だし」
【渉】「そんな顔してると可愛い顔が台無しだぜ？」
――しばらくの間があった。
そして、桜井は俺の顔を思いっきり睨んだのだ。
だから意味わかんねえって……。
この後、俺たち3人は適当な会話をしながら昼休みを過ごした。
戦歴を分析すると、俺と雪乃の会話を8としたら、桜井と直接言葉を交わしたのは2ってとこだな。
この数字が多いか少ないのかは、俺にはよくわからん。
まあ、とにかくいつもよりは話せたな。

明日香編（7・未編集）

５時間目の授業が眠くなるのは自然の摂理ってやつだ。
外は土砂降りでポカポカ陽気ってわけじゃないが、それでも食後は心地よい眠りの誘惑が……。
確か５時間目の授業は古典だったような気がする。
古典の授業なんて俺に寝てくれって言ってるようなもんだよな……。
教室のドアが開いて教師が入って……来た！？
あれっ、古典教師じゃなくってうちの担任の上條沙羅先生じゃんか？
【沙羅】「ハ～イ、エブリバディ！　昨日連絡したと思うけどぉ、５時間目はホームルームで６時間目はなしで下校だから」
聞いてねえよ！
これは俺がたまたま聞き逃しんじゃなくて、クラス全員が聞いてない。
うちの担任に言わせると、世界は彼女を中心に回ってる。
上條先生――嬢王様が言ったことに間違いはないから、嬢王様が昨日言ったって言うんだったら昨日言ったんだろうさ。
【沙羅】「今日のホームルームはみんなもわかってると思うけどぉ……」
わかんねえよ！
ホームルームがあること自体知らなかったのに、どうやってわかるんだよ。
【沙羅】「９月にある学園祭の出し物を決めなくちゃいけないんだけどぉ、出し物はアタシが決めて置いてあげたわぁん！」
勝手に決めんなよ！
ってクラスの大半は思っているが口には出さない。
だって相手は嬢王様だから……。

【沙羅】「今年はコスプレカフェが当たるわぁん！！」
これには教室がどっと沸いた。
俺は幸か不幸か3年連続で嬢王様クラスなんだが、1年目は嬢王様監督による映画で、2年目は美少女系のグッツ販売……。
【沙羅】「じゃあ、コスプレカフェを運営するにあたって、実行委員をくじ引きで決めるわよ」
なんだか全部嬢王様主導って感じだな。
そもそもうちのクラスにはクラス委員が存在せず、その代行を刹那が一人でやっているのだ――3年連続で。
嬢王様クラスには偶然か必然か必然か必然か、刹那が割り振られるのだ。
【刹那】「クジには5枚の当たりが入っているからね。あと、特別賞として最新型ノートパソコン引換券も入れて置いたよ」
意味わかんないから。
クラスの実行委員決めでノートパソコンが当たるなんて聞いたことねえよ。
【刹那】「クジはみんなで一斉に開けるから、引いてもすぐに開けちゃダメだよ」
そう言いながら刹那は四角い箱を持って、クラス中を歩き回ってみんなにクジを引かせた。
【刹那】「じゃあ、みんなクジを開いてみて」
すぐに誰かがノーパソが当たったって騒ぎやがった。
……チッ、何気に俺もノーパソ狙ってたんだけどな。
【真央】「あわぁっ！？　実行委員に選ばれちゃいましたぁ」
ノーパソ当たった奴よりもデカイ声だな……まあ、実行委員に選ばれてご愁傷様って感じだな。
【渉】「ぐわっ！！　俺もかよ！」
思わず叫んでしまった。
クジがいいのか悪いのか、俺も実行委員になっちまった。
【渉】「ったく、ついてねえ」

【彰人】「心配するな、俺も運命共同体になった」
【渉】「おまえも当たり引いちまったのかよ？」
【彰人】「ああ、クジにちゃんと『今日からキミも実行委員♪（当たり）』って書いてあった」
【渉】「俺のには『実行委員として誇り高く逝け！（当たり）』って書いてあったぞ」
もしかして当たりは全部、書いてあるセリフが違うのかよ？
なんか意味のないところに力入れてるくじ引きだな。
えっと、それで実行委員に選ばれたのは俺と彰人と真央と……あっ、雪乃が手をあげた。
【雪乃】「私も当たりくじ引いたみたいだわ」
これで４人か……確か５人だったよな。
ってことはあとひとり誰だ？
黒板に俺を含める実行委員４人の名前が書き出される。
【刹那】「あと一人名乗り出ていない者がこの教室内にいるはずなんだけどなぁ」
刹那は教室全体を見渡しながら、ある場所で視線を止めた。
【刹那】「あと一人いるはずなんだけどなぁ」
【沙羅】「名乗り出ないとアタシの権限で留年させるわよぉん！」
どういう権限だよ！
なぜかクラス中に殺伐とした空気が流れる。
そして、刹那がニヤリと笑ったその視線の先で、ひとりの女子生徒が無言のままゆっくりと手をあげた。
ああっ、桜井明日香！
な、ななな、なんと、桜井が実行委員に選ばれたのだ。
よっしゃ、俺ってクジ運最強！
これまで生きててよかった。
もう俺は思い残すことは……あるよ！
つーか、恋愛の極意その１は相手との共通点を増やすことだからな。

これで正当な理由で桜井と同じ時間を共有できるぜ……ふふふ。
俺がよからぬことを考えながら桜井を見てると、桜井が一瞬だけ俺を見た。
その表情は無表情で怒っているようにも見えたが、すぐに桜井は腕を枕にして顔を机の上に伏せてしまった。
実行委員がダルいのか？

そして、気が付けば放課後の教室に残っちゃってたりして……。
【真央】「あのぉ、やっぱりコスプレカフェは恥ずかしいから……」
【沙羅】「ダメよ、少なくとも女子全員にはコスプレしてもらうんだから」
【真央】「でもぉ……」
俺がコスプレさせれなきゃ好きにやれって感じだな。
【雪乃】「ところでコスプレなにのコスプレをするかは決まってるのかしら？」
【刹那】「当然実家が神社の雪乃クンは巫女のコスプレだね」
【渉】「じゃあ刹那はなんのコスするんだよ？」
【刹那】「ボクはコスプレなんてしないのさ。ボクは見る専門」
【真央】「刹那さんズルイですよぉ」
【彰人】「でも、真央ちゃんがコスしてお店に出たら、売り上げ上がると思うけどな。そう思うだろ渉？」
【渉】「ああ、ウチの女子はみんな可愛いからな……ってなに言わせるんだよ！」
【彰人】「自分から言ったんだろうが」
【真央】「真央のコスプレなんて見たい人いるんですかぁ。渉さんは真央のコスプレ見たいですか？」
なんでそんな答えづらい質問を俺にすんだよ。
嬉しそうに見たい（本音）とか言ったらただの変態じゃねえか。
【彰人】「渉は女子全員のコスが見たいんだよな？」
【渉】「見たくねえよ！」

【真央】「……見たくないんですか……麻生さんは……」
なんで涙声になってるんだよ。
真央を泣かせたのは俺なのかよ！？
【雪乃】「麻生君は口では見たくないって言ってるけど、彼はとっても変態さんだから、【真央】ちゃんのコスプレ姿を見たくて見たくて仕方がないのよ」
【真央】「本当ですか！」
うわっ、さっきまでのがウソみたいに真央が目をキラキラ輝かせてるし……。
そう言えば今朝……彰人が俺に……ま、いっか。
【沙羅】「さっきから明日香の発言がないみたいだけどぉ、ちゃんと会議に参加しないと宇宙で一番恥ずかしいコスプレさせるわよ」
【明日香】「……くだらない」
桜井の低く響く声が場の温度を一気に氷点下まで下げた。
くだらない話は中断され、静まり返った室内に嬢王様の声が響く。
【沙羅】「今の発言は聞こえなかったことにしてあげるから、もう一度正しい解答をしなさい」
【明日香】「だ～か～ら～、こんな話し合いくだらないって言ってるです」
なんだか雲行きが怪しいぞ。
不機嫌な顔してうつむく桜井を斜め上から嬢王様が見下す構図。
この小娘がって顔してる嬢王様と、オバサンに付き合ってるほどあたしはヒマじゃないのって感じの桜井。
今のは俺の想像だが……たぶん合ってるっぽい。
誰かこの場をフォローする奴はいないのか！？
……俺はヤダ。
ここで雪乃が何事もなかったように会話をはじめる。
【雪乃】「ところで上條先生、コスプレの衣装は何種類くらい用意しましょうか？」
【彰人】「俺が考えたのはナース・メイド・メイド・スクール水着・

チャイナ服……」
【渉】「スク水はヤバイだろ」
【彰人】「そんなこと言って見たいんだろ？」
【渉】「まあな」
【雪乃】「麻生くんは誰のスクール水着がお好みかしら？」
【刹那】「ああ、ボクは明日香ちゃんに裸エプロンをしてもらいたいなぁ～」
【真央】「は、裸エプロンですかぁ！？」
【明日香】「あたしは絶対コスプレなんてしませんから！」
みんなの苦労が水の泡。
【沙羅】「ふふふ……」
ヤバイ嬢王様がキレたっぽい。
【沙羅】「お～ほほほほほっ、アタシの逆らう気かしらぁん、この小娘ちゃんが！」
【明日香】「……」
桜井必殺ガン飛ばしＶＳ嬢王様必殺見下す視線
さあ、勝つのはどっちだ！？
ってそんなことを考えて盛り上げってどうすんだ俺は……どうにかせねば！
【渉】「まあまあ二人とも落ち着いて」
【沙羅】「渉は指くわえて黙って見てなさい！」
嬢王様の目が据わってる……俺にはこれ以上のことはなにもできない。
俺は権力に負けたのさ！
強いものに逆らって生きたら長生きできないのさ！
……ふっ。
【雪乃】「明日香ったら、すぐに機嫌を悪くするにはあなたの悪い癖よ」
【刹那】「沙羅先生もここはボクの顔に免じて穏便に。あとで高級菓子折りを届けさせますから」

【真央】「あわわ、ケンカはよくないですよ」
【雪乃】「もっと大人になりなさい、明日香」
雪乃の口調は怒っているわけでも叱っているわけでもない、ただ相手を見つめて言った静かな口調だった。
しばらく黙っていた桜井は雪乃を顔を睨みつけて大声で怒鳴った。
【明日香】「あたしは子供だもん！」
そして、桜井は走って教室を飛び出してしまった。
俺は唖然として桜井の背中を見ているだけだった。
なんだか今の桜井はとても感情的に俺の目には写った。
【彰人】「渉、桜井を追え。話し合いは俺たちで適当に進めておくからさ」
【刹那】「明日香ちゃんはボクが追うよ」
【渉】「俺が追うって」
【沙羅】「ふん、逃げ出した負け犬を追うことはないわよ」
【真央】「みんなで行きましょうよぉ」
【雪乃】「みんなで追うのはよくないわ。あの子は大人数で来られると絶対に意地張っちゃうから」
【刹那】「じゃあボクが代表で行くってことで決定だね」
こんないい場面で刹那を行かせてたまるか！
俺は刹那の両肩に手を置いて、輝く瞳で刹那を見つめた。
【渉】「いや、おまえは生徒会長としてこの場をまとめる義務がある。この仕事は世界中でおまえしかできないんだ。俺は刹那のことを信用してるぜ」
【刹那】「……渉クン。わかった、ここはボクに任せて行きたまえ！」
……単純なヤツ。
【彰人】「さっさと行けよ、見失うぞ」
【渉】「おう」
さてと、桜井を追って教室を出た俺だが、ここで考えるべきこと

はただひとつ！
桜井どこ行った？
単純に考えて下駄箱が妥当だな。
てなわけで俺は下駄箱に猛ダッシュした。
そして、案の定、桜井は下駄箱にいた。
しかも、俺の足音に気づいてこっちを振り返って、お得意のガン飛ばし。
【明日香】「あたしのこと追ってきたの？」
【渉】「別に」
【明日香】「雪乃に頼まれて来たんでしょ……ほっといてくれればいいのに」
【渉】「別に雪乃に頼まれて来たわけじゃねえよ」
【明日香】「じゃあ、ほっといてよ」
【渉】「ほっとけねえよ。おまえの持ってる傘俺んだし」
【明日香】「はぁ？」
【渉】「おまえが今持ってる傘って俺が貸したやつだろ。借りたままパクる気だったのかよ、そういうの借りパクって言うんだぞ」
【明日香】「だったら今返す」
桜井に差し出された傘を俺は受け取らなかった。
【渉】「返したらおまえどうやって帰るんだよ？」
【明日香】「濡れて帰るからいい」
【渉】「その傘おまえに貸しといてやるよ」
【明日香】「そんなことしたら麻生が濡れるじゃん」
【渉】「俺は別にいいよ、行きも濡れたんだしさ」
【明日香】「じゃあ、借りる」
桜井はさよならも言わないで俺に背を向けて雨の中に消えて行こうとした。
しまった、桜井を呼び戻しに来たんだった。
桜井のことを呼び止めねば！
と俺が思って桜井に声をかけようとしたが、それよりも早く桜井

が振り返って俺を見つめた。
その表情は相変わらず機嫌悪そうな無愛想な顔だったが、桜井の口から言葉はいつもと違った。
【明日香】「いっしょに入ってく？」
【渉】「はぁ？」
【明日香】「いっしょに帰れば麻生が濡れなくて済むじゃん？」
【渉】「でもさ……」
【明日香】「じゃあ、濡れて帰れば」
冷たく言い放った桜井は俺に背を向けて歩き出してしまった。
【渉】「待てよ、俺のこと入れてけよ！」
【明日香】「……最初ッからそう言えばいいのに」
振り返った桜井の表情はいつもと違った。
一瞬だけだったが、俺には桜井が微笑ったように見えたのだ。
見間違えの可能性は大いにあるが……つーか、俺のモーソーかも。
そんなわけで俺はどういうわけか桜井と一緒に帰ることになってしまった……ひとつ傘の下で！
これが夢なら絶対覚めるな！
夢じゃないなら一生続け！
今だかつて雨の日にこんな気分爽快な日があっただろうか……いや、ない！
俺のジンセーも捨てたもんじゃないな。
同じ傘の下にいるというのに会話は特になかった。
俺が傘を持って桜井が俺に寄り添ってくる。
それだけで俺は幸せだった。
だが、ここでもっと嬉しいことが！！
桜井が無言のまま俺の腕に自分の腕を絡めて来たのどぅあ！
小さくともそこに確かに存在する胸の膨らみが、微かに俺の腕に当たってる……と思う。
決して桜井の胸がないと言っているわけではないのだが……微妙すぎて……。

とにかく、これは決して俺のモーソーなんかじゃないぞ。
桜井の腕は確かに俺の腕に……ああ、幸せぇ～。
ちょっと顔の筋肉緩んじゃってマヌケな表情をしている俺に桜井が一言だけ。
【明日香】「あたしが濡れるから、近くに寄っただけだから……」
理由なんてどうでもいいさ。
俺がここにいて、桜井がそこにいる……これが現実さ。
【渉】「あのさ、なんで俺と帰る気になったんだよ。今朝は一緒に傘じゃ嫌って言ってなかったか？」
【明日香】「気まぐれ」
【渉】「あー気まぐれね」
なんだか妙に納得。
【渉】「あとさ今朝の電車のことなんだけど、桜井の足踏んだのは悪かったと思うけどさ、仕返しに俺の足を強烈に踏んづけて走って逃げることないだろ」
【明日香】「別に仕返しのつもりで踏んだんじゃない。ちょっと電車が揺れて、それで……」
【渉】「じゃあなんで走って逃げるんだよ」
【明日香】「それは……」
桜井は顔を少し赤らめて恥ずかしそうにうつむいた。
【明日香】「だって謝るの恥ずかしかったから……」
【渉】「はぁ？」
【明日香】「だって麻生ってあたしのこと嫌いだと思ってたから、そんな奴に謝りたくなかったから……それで走って逃げた」
【渉】「はぁ？　俺が桜井のこと嫌い？」
どこでどういう風になったら話がそういう方向に展開するんだよ。
俺が桜井のこと嫌いなわけないじゃん。
むしろ俺は桜井のこと……。
【渉】「……ああ、俺はおまえのこと嫌いだよ。目が合うたびにガン飛ばされるし、俺がなにしたっていうんだよ」

ってなに言ってんだ俺！？
おいおいおいおい、心にもないことを言ってしまった。
【明日香】「……やっぱり嫌いなんだ。あたしも麻生のことなんて大ッ嫌いだけどね」
うわっ、すんげえ誤解されたっぽいぞ。
どうにかして挽回しろよ俺！
【渉】「でもさ、俺が思ってたより桜井ってヤナ奴じゃないかもな」
【明日香】「麻生はあたしが思ってた以上に嫌な奴」
なんだよ、おまえは俺とケンカしたいのかよ！？
意味わかんねえよ。
【渉】「それって俺にケンカ吹っかけてるのかよ？」
【明日香】「別にそうじゃないけど、麻生ってすごくムカツクんだよね」
【渉】「はぁ～っ！？」
【明日香】「あたしの頭の中に居座って、ウザイのに消えてくれないんだもん」
【渉】「は？」
【明日香】「頭の中が麻生のことでいっぱいになっちゃって、それがウザくてムカツクんだけど、どうにもできなくて……」
【渉】「あのぉ、それはどういった意味で？」
【明日香】「だから麻生を目の前にすると、腹立たしくて睨んだりしちゃうんだよ」
【渉】「もしかしてさ……」
これってもしかするともしかしてなのか！？
雰囲気的に言ってこの展開は衝撃の展開が待ち受けてるっぽいぞ。
もしかして……桜井って俺のこと……。
【明日香】「麻生のせいであたし……」
【渉】「間違ってたら笑って済ませろよ。桜井って俺のことス……ぐえっ！」
桜井の強烈なボディブローが俺の腹に……。

小柄なボディーからは想像も付かないパンチをくらった俺は声すら出せなかった。
桜井が数多くの男どもを蹴散らしてきたと噂では聞いていたが……マジで桜井がケンカ強かったとは……。
【明日香】「今言おうとしたこと口にしたら、再起不能にするからね」
腹を抱えてうずくまる俺から傘を奪った桜井はさっさと歩きはじめてしまった。
【渉】「おい待て、俺を置いてくな」
【明日香】「早く来ないと置いてくよ」
【渉】「そう言いながらすでに置いてかれてるし！？」
【明日香】「びしょびしょの身体で近づかないでよ」
【渉】「近づくなって……おまえのせいでこうなったんだろ！？」
【明日香】「あ、そっか」
【渉】「なんだよ、そのわざとらしい口調は！」
【明日香】「わざとだし」
【渉】「ムカツク女だなぁ」
【明日香】「あたしも麻生のこと嫌いだから、お相子でしょ？」
【渉】「まあな」
桜井が微かに笑った。
決して見間違いじゃない桜井の笑顔……俺の心に永久保存版！
なんだか桜井と俺の距離が近づいたような気がした。

――雨はまだ止まない。
駅ビルの前は屋根があって傘はもう必要ない。
それが少し寂しい。
駅の入り口の前では中古のＣＤを売る露店や、路上でアクセサリーを売ってる外国人のお兄さんがいた。
【明日香】「ちょっと見てこよ」
【渉】「なにを？」

【明日香】「クールなアクセサリーいっぱい売ってるよ」
【渉】「ああいうの趣味なのか？」
【明日香】「別に」
【渉】「別にって……」
【明日香】「いいじゃん、あたしが見たいって言ってんだから、付き合ってくれたっていいでしょ」
俺は桜井に腕を引っ張られてアクセサリーを売ってる露店の前に連れて来られてしまった。
シルバーアクセサリーとかが黒い台の上に隙間なく置いてある。
指輪にピアスにペンダントに……ぜんぜん興味ないんだけど。
【明日香】「これが欲しいなァ」
【渉】「は？」
桜井の指差す先にはハートのリングがぶら下がってるペンダントがあった。
【明日香】「これ買ってくれたらイイことしたげる」
【渉】「はぁ！？」
【明日香】「早く買わないと他の誰かが買っちゃうよォ、それでも麻生クンいいの？」
よくはないけどさ、イイことってなんだよ、イイことって！？
イイことって単語が俺のモーソーキーワードにヒットしちまった。
イイことって言ったらアレしかないだろ……でも桜井がそんなこと……。
【明日香】「くすくす……男ってみんな単純でばかだなァ」
【渉】「はぁ！？　もしかして俺ってからかわれてんのか？」
【明日香】「聞くまでもないじゃん？」
ガーン！！
もしかして俺って桜井の手のひらの上で転がされてるのか？
【明日香】「でも、これ欲しいってのはホント」
【渉】「しゃーねえなあ、買ってやるよ。兄さんこれいくら？」
【外国人】「５０００円」

【渉】「高けえよ！」
【明日香】「ビンボー人って高いもの見るとすぐわめくんだから」
【渉】「うるせーよ、これからが買い物上手の腕の見せ所だ。おい、２５００円に負けろ」
【外国人】「駄目アルよ、２つセットで５０００円アルよ」
【渉】「流暢な日本語で中国人の真似すんなよ、どう見たっておまえ金髪で目の色青だろ」
【外国人】「ワタシ中国から来ましたラーメンマいう者アルね」
【渉】「中国人のものまねはわかったから、２つセットじゃなくっていいから１つ２５００円で売ってくれ」
【明日香】「２つセットでちょうどいいじゃん」
　それは俺の財布がよくないと言っている。
【外国人】「実はこの二つのペンダントは中世時代から現代に伝わるものアルよ」
【渉】「見え透いたウソつくなよ」
【外国人】「ウソじゃないアルよ、二つのペンダントについてるハートは知恵の輪になってて、二つが一つになる時、奇跡が起こるって伝えられてるアルね」
【渉】「恋愛成就とか？」
【外国人】「ワタシはやってみたことないから知らないアル。なにが起こるか知りたいなら、お客さん買ってやってみたらいいアルね」
　そういう商売の仕方ってズルイと思うぞ。
【明日香】「買ってくれるのくれないの？」
【渉】「いや、だから、お金が……」
【外国人】「……ふう、可愛いお嬢さんのために２つセットで３０００円にしてあげるよ」
【渉】「マジで？　３０００円にしてくれんの……ってテメェ、普通にしゃべれるじゃねえか」
【外国人】「ワタシ中国からやって来ましたラーメンマいう者アルよ」

【渉】「中国人のものまねはわかったから、３０００円でいんだろ、買うよ」
【外国人】「税込みで３１５０円アル」
【渉】「消費税取るのかよ！」
そう言いながらも俺はなけなしの金をはたいた。
ひとつは俺の、そしてもうひとつは桜井の……。
【渉】「じゃあ、試しに２つのハートをくっ付けてみようぜ」
【明日香】「イヤ」
【渉】「はぁ！？」
【明日香】「だってあたしたち、そんな関係じゃないでしょ？」
【渉】「なんですとーっ！！」
ペアのペンダントを買って、ペンダントにまつわる奇跡のうんたらを聞いたというのに、あなたという人は試してみないと言うのですか？
【明日香】「だってあたしたち、友達でもないでしょ？」
ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！
マジですか！？
友達でもないってマジですか！？
俺って勝手に独り突っ走ってましたか？
誰か答えてください。
俺って勘違い野郎？
【渉】「お、俺たち友達だろ？」
【明日香】「いつから？」
【渉】「今日から」
【明日香】「あたしはそう思ってないけど」
【渉】「さっきまで一緒の傘に入ってて、それでも桜井は俺のことを赤の他人と？」
【明日香】「うん」
桜井の素敵笑顔炸裂！
なんかいろんな意味で悩殺っていうか、撃沈っていうか……。

【明日香】「冗談」
【渉】「えっ？」
【明日香】「ジョーダンだよ、これ買ってくれたから友達くらいにはしたげる」
【渉】「よかったぁ……」
昨日の今日にしてみれば、すごい前進だ。
俺は３１５０円で桜井と友達になれる権利を買ったのだ！
そう思えば安い買い物だったな。
【明日香】「じゃあ、あたし帰るね」
【渉】「え、あ、う？」
【明日香】「麻生って耳悪いの？」
【渉】「帰るって、ほら、イイことしてくれるんじゃ……？」
【明日香】「友達になってあげたじゃん♪」
うぉぉぉぉぉぉぉぉ！！
騙された！
詐欺だ！
【明日香】「じゃあね、今日はありがとね」
【渉】「いや待てって」
【明日香】「なに？」
うわっ、振り返りざまの凶悪目つき。
せっかく仲良くなったと思ったのに、また振り出しに戻った感じだ。
【渉】「あのさ、電車一緒だろ？　それにおまえ駅から家までどうすんだよ。濡れるだろ、だから俺が桜井の家まで送るよ」
【明日香】「タクシー使うからいい」
ぐはっ、そう来ましたか。
【渉】「でもさ、お金かかるから、やっぱり俺が……」
【明日香】「貧乏人」
【渉】「ううっ……」
【明日香】「貧乏人」

【渉】「ぐあっ、二度も言うことないだろ」
【明日香】「ちょー貧乏人」
【渉】「三回も余計だ。それにちょーと付けるな。俺は中流家庭だ」
【明日香】「でも、家の前までならいいかな」
【渉】「はい？　なにが？」
【明日香】「だ～か～ら～、家の前まで送らせてやってもいいかなって言っぅんの」
【渉】「マジで！？」
【明日香】「犬みたいにしっぽ振って喜ぶな、下心丸見え」
【渉】「ないないない、下心なんてありませんよ」
本当はある。
桜井を家まで送ったついでに、まんまと桜井の家に上がらせてもらおうなんて、バリバリ考えてます！
あわよくば、桜井の部屋に侵入！！
【明日香】「やっぱり送らなくていい。麻生ってすぐに付け上がるタイプみたいだから」
【渉】「そんなことないって！」
【明日香】「顔がにやけてる」
【渉】「えっ！？」
慌てる俺を見つめる桜井の冷めた視線が痛い。
俺と桜井の距離が離れていくぅ～～～。
【明日香】「じゃあね」
今の声、すごく冷たかった。
ああ、桜井の後姿が小さくなって行く……。
【明日香】「きゃ！？」
あっ！？
桜井が人にぶつかって尻餅ついた！
しかも、ぶつかったのは見るからに悪そうなお兄さんたち数名。
つーか、制服着てるから他の学校の生徒だな。
でも、俺よりも5歳は年上に見えるのは気のせいか？

しかも制服着たままタバコ吸ってやがるし……。
あ～っ桜井が腕つかまれて持ち上げられちゃったよ……って傍観しててどうすんだよ俺！
助けなくては！
【渉】「桜井！」
【明日香】「とりゃーっ！！」
【渉】「マジかーっ！？」
【不良A】「ぐあっ！！」
おお、不良Aが吹っ飛んだぞ……桜井の回し蹴りで。
ちくしょー微妙に桜井のパンツが見えそうで見えなかった。
じゃなくって、桜井強ぇいぞ。
って吹っ飛んだ男の目がマジギレしてるし、周りの奴らもキレてるよ。
……状況最悪。
【不良A】「てめぇぶっ殺す！」
【不良B】「可愛い顔してっからってナメてんじゃねえぞ！」
【不良C】「俺たちが可愛がってやるよ」
奴らは飢えた狼だ。
男は狼なのよぉ、気をつけなさい♪
うわぁ、狼が可愛らしい美少女を食べようとしているよぉ。
【明日香】「麻生助けて！」
【渉】「へっ？」
桜井はダッシュして俺の後ろの隠れた。
【渉】「おまえ俺の後ろに隠れなくても十分強いじゃん」
【明日香】「問題とか起こしたくないの！」
【渉】「もうすでに蹴り入れたし、問題なら現在進行形だし」
不良の数は3人で、こっちは2人。
この場合、桜井は頭数に入れるべきか……。
つーか、戦うまでもないな。
【渉】「逃げよう、あっちに交番あるし」

【明日香】「交番もだめ、家に連絡されたら困るし」
飢えた狼たちがジリジリと詰め寄って来るし、周りを歩いてる人たちは大きく迂回して素通りだし。
助け合いの精神はどうした！
【不良Ａ】「おい、その女おまえのカノジョかよ！」
不良Ａの視線は桜井と俺に向いている。
カノジョ＝桜井？
【渉】「と、とんでもない！　健全なお付き合いをさえてもらってる友達です」
【明日香】「麻生カッコ悪」
ボソッと桜井から攻撃されたし。
カッコ悪いもなにも、相手の人たち怖いし。
【不良Ａ】「どーでもいいから、その女こっちに渡せよ！」
【明日香】「イヤだよぉ」
あっかんべーをする桜井。
ヤヴァイ、狼たちがもっとキレた模様。
【不良Ａ】「このクソ女！」
ああ、凶暴な狼さんたちが一斉に牙を向けて飛び掛ってきたよぉ。
【渉】「逃げるぞ！」
【明日香】「意気地なし！」
【渉】「そういう問題じゃないだろ！」
【明日香】「あっ！？」
【渉】「えっ……ぐあっ！」
俺は顔面に強く殴られて地面に上に転倒した。
ああ、頭がクラクラする。
かなり今のは来たぞ、すっげえ痛ぇ。
【明日香】「麻生！」
【渉】「平気平気……でもないけど」
戦闘の最中、敵から目を放すべからず。
【明日香】「きゃっ！？」

あいたーっ、桜井捕まってるし！？
俺が意識朦朧としてる間に不良たちに羽交い絞めにされて捕まってるし。
さすがに3人に捕まれたら逃げられないよな。
【明日香】「助けて麻生！」
【渉】「言われなくたってわかってるって」
でも、どうする俺？
桜井を助けたいのは山々だが、相手は3人だし、桜井は人質だし、俺は素手だし。
なにか棒みたいのがあれば……。
ふと、俺が地面に目をやると、俺の傘が落ちていた。
さっき殴られた弾みで落としたやつだけど、傘じゃすぐに曲がって武器にはしづらいな。
もっと硬くて長い棒状の物があれば……。
【外国人】「これを使うアルよ！」
さっきの露店の兄ちゃん！
しかも段取りよくその外国人の兄ちゃんが俺に投げ渡してくれたのは木刀だった。
ってなんでそんなもん持ってんだこの外国人は！？
つーか、よく俺がこれが欲しかったってわかったな……エスパーか！？
あの外国人の詮索は後回しにして今は桜井を助けなくては！
【渉】「ああっ！」
【明日香】「やめて……放して……ううん……」
【不良A】「いい胸してんじゃねえか」
なんてこったい！
桜井が、桜井が後ろから手を回されて胸を揉まれてる！？
こんな公衆の面前で桜井に痴態を……。
【渉】「許さねぇぞ、テメェら！！」
俺は地面をひと蹴りして跳躍すると、一気に敵に踏み込み不良C

を一撃で気絶させて、身体を回転させながら木刀を横に振って不良Ｂも眠らせた。
だが、俺のスピードでは２人を一気に片付けるのが精一杯で、桜井を羽交い絞めにしている不良Ａまでは仕留めることができなかった。
【不良Ａ】「テメェ！」
【渉】「桜井を放せよ！」
【不良Ａ】「ふざけんじゃねえぞ！」
不良Ａは桜井を羽交い絞めにしていた体制から、素早く桜井の腕を掴む体制に変えて、そのまま桜井を連れて逃げようとした。
だが、俺が追うまでもなかった。
桜井が素早く相手の腕を振り払い、両手で相手の腕を掴んだかと思うと。
【明日香】「とりゃーっ！！」
一本！
華麗な一本背負いだ……しかもこんどはパンツ見えた。
……１対１だったら助けるまでもないんだな。
地面の上で気絶している不良Ａに桜井の蹴りを入れた……２度３度。
そして、桜井は俺の前に駆け寄って来ると、いきなり俺の頬に強烈な平手打ちを入れやがった。
【渉】「痛ぇーっ！」
【明日香】「どうしてもっと早く助けてくれなかったのよ！」
【渉】「ちゃんと助けたじゃん」
【明日香】「だって、あたしこんなところで胸を……すごく恥ずかしかったんだから、もぉ！」
【渉】「別にそれは俺が悪いわけじゃないだろ」
【明日香】「大っ嫌い、アナタなんて大っ嫌い」
【渉】「それでも助けてやったんだから、お礼ぐらい言えよ」
【明日香】「そんなのどーでもいいから、早く逃げよ」

【渉】「どーでもよくないぞ。あ、そうだ、この木刀返さなきゃ……ってすでにいないし！？」
露店の兄ちゃんがいない。
しかも、店もなくなってるし。
【明日香】「あ、ヤバイ、警官が走ってくるよ」
【渉】「誰か呼んだのかよ……って今更遅せえし」
【明日香】「ごちゃごちゃ言ってないで逃げるよ！」
【渉】「おう！」
俺は木刀は投げ捨てて桜井に腕を引かれてこの場から猛ダッシュで逃げた。
と少し走ったところで俺は足を止めた。
【渉】「俺の傘忘れた！」
証拠は残しちゃいけないのは鉄則だ。
俺は地面に落ちていた自分の傘を拾って、今度こそ桜井と一緒にこの場から猛ダッシュで逃げた。

いろいろなトラブルに巻き込まれながらも、どうにか桜井と電車に乗ることに成功。
でも、駅前で問題を起こしたのはヤバかったな。
もしも同じ学校とか、そんな奴らに顔を見られてて学校に報告されると少しマズイ。
まあ、そん時は刹那に泣きつくって手もあるが、あいつに借りを作るのもなんだよな。
この問題についてはなにか起こったら考えればいいか。
今は桜井の家までどうにかして自然な形で行くことだ。
そして、どうにか頑張って桜井の部屋に……ムフフ。
【明日香】「ねえ？」
【渉】「はい？」
【明日香】「麻生ってケンカ強いんだ。あれって剣道？」
【渉】「あれは剣道なんかじゃないよ、チャンバラごっこかな？」

【明日香】「チャンバラごっこ？」
【渉】「そうそうチャンバラごっこ。昔からチャンバラとか好きでさ、ガキの頃の遊びと言ったらチャンバラごっこだったな」
【明日香】「チャンバラごっこであんなに強いの！？」
【渉】「小さい頃にさ、俺より強い奴がいてさ、そいつに負けないように死ぬ気で猛特訓したんだけど、そいつには結局勝てなかったな。女のクセに強ぇんだよ、桜井みたいに」
【明日香】「あたしみたいって……」
【渉】「あの回し蹴りと一本背負いはマジで驚いた。凶暴女桜井見参って感じだったな……あっ」
【明日香】「凶暴……あたしが？　その口がそんな変なこと言ったわけ？　あたしのどこが凶暴なの？」
ヤバイ……口が滑って桜井を怒らせてしまったようだ。
【渉】「いや、その、だから俺が言いたかったのは桜井ってカッコイイなってことで……」
【明日香】「……」
【渉】「だから、桜井ってすごいなぁって……」
【明日香】「……」
あたし疑ってますよみたいな目で見るなよ。
そんな目で見たって俺は自分の非を認めんぞ。
でも、そんな大きな瞳で見つめられると、別の意味で落ちそうだ……。
【渉】「あ、だから、ところでさ、桜井ってなにか格闘技でもやってたのかなぁってさ」
【明日香】「……別に」
うわっ、そっぽ向かれた！？
なんだか空気を重くなってきたぞ……桜井臭が少して嬉しかったり。
桜井は俺の方を見ようともせず、ずっと窓の外を流れる景色を見ている。

ここは一発謝った方がいいのか？
だが、今更タイミングを逃しているような気もするし、別の話題でここは形勢逆転を狙うか？
【渉】「あのさ……」
と俺は精一杯話を切り出そうとしたところで、電車が停止してドアが開いた。
そして、桜井はそそくさと俺を無視して歩き出してしまった。
【渉】「ちょっと待て俺も降り……ぐわっ！？」
挟まれた！！
俺は電車のドアに片手を食われてしまった。
【渉】「抜けろ！」
抜けねえ！
しばらくしてドアが再び開いて俺の腕は無事解放された。
ふと、俺を正面を見ると、桜井が突っ立って俺のことを見ていた。
【明日香】「ちょーカッコ悪」
ぐわっ！！
カッコ悪いとか言われた。
ショックだ、ショックでしかない。
俺が落ち込んでいると、桜井が俺を置いて歩き出した。
【渉】「待てって」
桜井が待ってくれるはずがなかった。
完全に桜井ペースだ。
俺は桜井にハマッている！？

なんだかんだで、どうにか桜井と同じ駅で降りることに成功した。
ミッション成功って感じだな、高得点クリアとまではいかなかったけど。
だが、全てのミッションが終わってわけではない！
これから桜井を無事に家まで送り届け、そのまま流れに任せて桜井宅に侵入。

そして、桜井の部屋に！！
先を歩いていってしまった桜井のあとを追って駅を出ると……。
【渉】「ああっ！！」
【明日香】「よかった、雨止んでて」
なんてこったい。
だが、まだこっちには作戦がある。
【渉】「いや、まだ空はどんより曇っている。いつまた雨が降り出すかもしれない。やっぱり家まで俺が……」
【明日香】「ついてくるな」
【渉】「そんなこと言わずにさあ、また降ってくるかもしんないじゃん？」
すっげえムダな抵抗をしてる気分だ。
しかも、俺の下心全快なのが桜井に伝わってるっぽい。
だって、桜井が俺を見る視線が……痛い。
【明日香】「じゃあね、ペンダントありがと」
【渉】「じゃあな」
俺もそこまでしつこくないさ。
今日のところはここで引き下がってやるさ。
でもな！
絶対に明日は今朝と同じ時間の同じ車両に乗って、偶然を装って桜井にバッタリ出逢っちゃったよ作戦を実行してやる！
そしてそして！！
明日こそはなにか理由を考えて桜井の部屋に――いや、せめて桜井宅の前まで！
ああ、桜井の後ろ姿が小さくなってく……。
すんげえ寂しい気分。

今日はなんだかんだでラッキーな日だったと思う。
でも、頬がマジ痛ぇ。
よりによって顔面を殴られたのがマズかったな。

ちょっと腫れちゃって青くなってるし……明日学校でからかわれそうな予感だな。
まあ、桜井を守って付いた傷……漢の勲章さ、と言ってみる。
俺は制服から部屋着に着替えようと、制服のポケットに入っていた物を机の上に出した。
その中に、あの時に買ったペンダントが……。
ハート型の知恵の輪。
２つの知恵の輪をくっ付けると、どうとかこうとかって言ってたが、あれは確実にウソだな。
ボッタクられた！！
ってわけでもないかな。
２つで３１５０円だから、１つ１５７５円だろ……まあ、普通っていうか、ちょっと安いな。
つーか、桜井への好感度を上げたわけだし、いい買い物したって感じじゃんか。
俺はペンダントに付いてるハート型のリングを顔を前に近づけてまじまじと見つめた。
デザイン的にはシンプルだが、よ～く見るとハートリングに模様が刻まれてる……。
なんか、ずっと見てると心が安らいでくるっていうか、身体が温かくなってくる感じだ。
……そういえば、頬の痛みも和らいできたような気がする。
気がする？
【渉】「ああっ！？」
ふと俺は鏡に顔を向けて目を見開いた。
腫れて赤くなってた頬が治ってる！？
えっ、どうして？
待て待て、なにが起きたかを現実的に理論と論理に基づいて考えようじゃないか。
……俺の身体の自然治癒力ってすっげえ！

じゃないだろ。
そんなに早く治るわけねえよな、さっき鏡を見た時には治ってなかったわけだし。
【渉】「となると、これだな……」
俺はペンダントを見つめた。
温かくて心地よい感じがする。
……んなバカな。
でも、もしかしたらこのペンダントには不思議な力が……なわけないな。
待てよ、でも本当にそんな力があったとしたら、二つのペンダントを一つにするとっていう話も本当かもしれないぞ……ダメ元でやってみる価値が……ないな。
そんなわけないじゃん。
バカバカしい……けど、そんな力にもすがりたい気分だな。
桜井と結ばれるなら、バカバカしい力でも何でもいいから試してみるか。

どうにか今日も早起きして駅まで来れた。
昨日と同じ時間の同じ車両に乗って、桜井と偶然を装って会う。
これで途中の駅で桜井に会えれば俺の作戦は完璧だ。
【彰人】「よお、渉！」
【渉】「ああっ彰人！？」
【彰人】「なに驚いてんだよ？　てか、今日も遅刻しないで朝早くから学校行くなんてどういう風の吹き回しだよ？」
作戦ミス！
つーか、思わぬ障壁。
【渉】「俺が普通に遅刻しないで学校行っちゃいけないのかよ？」
【彰人】「別にいけなくはないけどよ、大型台風でも来るんじゃないか」
【渉】「来るわけねえだろ、自然現象と俺の行動を結び付けんな」

俺は偶然っていうか、家が近いんだから遅刻しないように学校行ったら、駅で会う確立高いよな、って感じで会ってしまった彰人と電車に乗ることになった。
雨の日の満員電車は最悪だが、やっぱ普段も最悪だよな。
【彰人】「それで、なんで今日も遅刻しないで来たんだよ？」
【渉】「遅刻しないのが普通だろ？」
【彰人】「おまえは遅刻するのが普通だろ」
【渉】「心を入れ替えたんだよ」
【彰人】「ウソつくなよ。1年の時も2年の時も出席日数が足らなくて沙羅先生に泣きついたんだろ。また、沙羅先生に泣き付くつもりだったんだろ、それがなんで突然心を入れ替える気になったんだよ？」
【渉】「黙秘権を行使する。例えおまえと俺の仲でも秘密事があるってことさ……ふふふ」
【彰人】「最後の『ふふふ』ってなんだよ。なんかすげえ『悪』を感じたぞ」
彰人の言うとおり、そこには下心があるさ。
そーさ、俺は桜井に会いたいだけさ！
そのために遅刻しないで学校行っちゃけないのかよ！
愛だろ、愛！
電車の走るスピードが落ちてきた。
キタ――――（゜∀゜）――――ッ！！
たぶん今日もこの時この瞬間、桜井がホームに立ってるハズ！
電車が停車して、ドア越しに桜井と目が合った。
キタ――――（゜∀゜）――――ッ！！
だが、桜井の方がすぐの視線を逸らした。
電車のドアが開いて桜井が電車の中に乗り込んできた。
そして、“偶然”にも桜井と同じ電車に乗ることに成功！
【渉】「おはよ桜井」
【明日香】「……高瀬」

【彰人】「ああ、あはよ桜井……？」
って俺が挨拶したのに、俺は無視で彰人に挨拶ですか？
【渉】「桜井おはよ」
【明日香】「……」
やっぱ無視だよね、明らかに無視されてるよね、でもさ俺がなにかした？
【渉】「俺さ、桜井になにかしたか？　してないよな？」
【明日香】「……別に」
出たぁ！！
機嫌悪そうに『……別に』の一言。
『……別に』って絶対に桜井の口癖だよな。
【彰人】「そうだ、二人に話すことがあったんだな」
【渉】「話ってなんだよ？」
【彰人】「昨日おまえらが帰った後にな、大した話もそんなになかったんだけどさ、一つだけ重要なことが決まったんだよ」
【渉】「重要なこと？」
【彰人】「実行委員の親睦を深めるために、旅行に行くことになったんだよ」
【渉】「はぁ！？」
【明日香】「えっ！？」
【彰人】「提案者は嬢王様こと沙羅先生だ」
……やっぱし。
そんなことを言い出すのは嬢王様しか……刹那も言いそうだな。
【彰人】「旅行先は刹那の別荘がある孤島で決定した。ちなみに全員強制参加な」
【渉】「やっぱ刹那って島持ってんだな。特に驚きもしないな」
【明日香】「イヤ、絶対にイヤ。あたし旅行なんて行かない」
【渉】「それは無理な話だろ。俺はこの世で嬢王様に逆らえる奴を知らんぞ」
【明日香】「それでもイヤ。そーゆーの嫌いなの」

【彰人】「桜井が刹那に頼めばどうにかなるかもな」
【明日香】「刹那に頼むってなにを？」
【彰人】「刹那は桜井の言うことだったらなんでも聞くと思うんだよ。だからさ、刹那ＶＳ沙羅の全面戦争」
【渉】「なるほどな、嬢王様に逆らえるのは資本力を持ってる刹那だけか。刹那が動けば軍隊とか特殊部隊とかで嬢王様に対抗できるもんな」
刹那の力を持ってすれば嬢王様に核爆弾投下も現実的な話だ。
だけど、嬢王様は核爆弾程度じゃ倒せないなきっと。
嬢王様に対抗するにはきっとマンガかアニメに出てきそうな未知の兵器じゃないと無理だ。
しばらくうつむいてなにかを考えていた桜井がボソッと呟いた。
【明日香】「じゃ、刹那に頼む」
【渉】「なんでそんなに旅行行くの嫌がるんだよ？」
【明日香】「……別に」
答えたくないとすぐそれか！
黙秘権の行使か！
でも、桜井だから許す。
……あっ！？
俺は気がついてしまった。
桜井の首に光るチェーン。
昨日はそのチェーンがなかったことは満員電車で急接近した時に確認済みだし、一緒に帰った時もなかったと思う。
だとすると、もしや！！
【渉】「桜井のしてるペンダントって昨日俺が買ってやったやつか？」
ぐわっ！？
睨まれたよ。
桜井に上目遣いで睨まれてるよ。
つーか、どこで桜井スイッチを入れたんだ俺は？

【彰人】「渉が桜井に……？　昨日あれからなんかあったのかよ、二人の間に？」
意地悪い笑みを彰人が浮かべると桜井の目つきはもっと凶悪になった。
桜井の視線を気にしつつも、俺は自分の付けていたペンダントを襟首から出して彰人に見せた。
【渉】「桜井のとペアのペンダントなんだぜ」
桜井の睨みパワーが一気に上昇した。
もしや、俺の判断ミス？
やっぱし、ペンダントのことに触れるのはいけなかったのか？
俺は禁忌を犯したのか！？
ちょうどこの時、電車が停車してドアが開かれた次の瞬間だった。
【渉】「痛ぇーっ！！」
桜井が俺の足を思いっきり踏んづけて人ごみの中に爆走していった。
昨日と同じ展開か！？
エンドレスか！？
俺に対する報復か！？
昨日俺の足を踏んだのは偶然とか言いやがったが、今日のは絶対にワザとだ。
つーか、ドアが開いた瞬間に俺を足を踏んで逃げるなんて……すっげえ汚ねえ女！
今日は桜井を追うことなく彰人と一緒に電車から降りた。

学校への道すがら彰人は俺と桜井の仲を聞いてきたが、答えてやる気にならなかった。
【彰人】「昨日あれから桜井となにがあったんだよ？」
【渉】「一緒に帰ってペアのペンダント買って、それから不良に絡まれて喧嘩して、途中で桜井と分かれた。それだけだ」
【彰人】「詳しく話せよ」

【渉】「ヤダ」
【彰人】「じゃあ、これだけ答えろ。桜井との仲が進展したのか？」
【渉】「わかんねえ」
【彰人】「俺が見る限りじゃ、おまえ嫌われてるな」
【渉】「俺もそう思う」
【彰人】「じゃあなんでペアのペンダントなんて買う展開になったんだよ？」
【渉】「桜井のきまぐれ」
つーか、わけわかんねえんだよ。
桜井の考えてることがわかんねえ。
一緒に帰ったあの時、桜井が俺のこと好きなんじゃないかって思ったとこもあった。
でも、今は弄ばれてるんじゃないかって思う。
つーか、遊ばれてる。
俺は桜井にいい遊び道具にされているに違いない。
そうだ、俺なんかに桜井が惚れるわけないもんな。
うわぁ、どんどんブルーな気分になって来た。
【真央】「麻生さん高瀬さん、おはようございます！」
【彰人】「結城さんおはよ」
……絶対俺は桜井の玩具だ。
【真央】「麻生さんおはようございます！」
……なんかすっげえショックだよ。
【真央】「麻生さん？」
俺って生きてる価値なし？
【真央】「あ、麻生さん、真央のこと嫌いなんですか！？　だから無視するんですか？　そうなんですよね、そうですよね。ごめんなさい、真央がなにか気に障ることしましたか？」
【彰人】「おい、渉。結城さんが話し掛けてんだろ！」
【渉】「えっ？」
うわっ、少し切れ気味の彰人が俺のこと睨んでるし！？

しかも、すぐ近くにいつの間にか真央が！？
ちっちゃいから気づかなかった……じゃないな。
独りのワールドに没入してた俺が真央のことを無視してたらしい。
【真央】「真央、麻生さんに嫌われちゃったんですね……」
ってどうしてそーゆー方向に思考回路が突っ走るんだよ！
【渉】「いや違うから、別に真央ちゃんのこと嫌いじゃないし……」
って昨日も似たような会話をしてしまったような気がする。
【彰人】「そうそう別に真央ちゃんは悪くないから。悪いのは人間のクズ代表の渉だからさ」
【渉】「ってなんで俺が人間のクズ代表なんだよ！」
【彰人】「思い当たる節がないのか？　これは重症だな」
【渉】「てめぇ！」
【真央】「二人とも真央のせいでケンカしないでください……」
うわっ！
これは絶対に昨日と同じ展開！
【渉】「だからさ、別に俺たちケンカしてるわけじゃないしさ」
【真央】「本当ですか？　真央のせいじゃないんですか？」
【彰人】「ごめんごめん、結城さんに心配かけちゃって」
【渉】「そうそう、真央ちゃんが心配しなくてもぜんぜんＯＫだし」
【真央】「よかったですぅ」
よかった、よかった。
なんかさ、真央ってすっげえ気遣うっていうか、いろんな意味で疲れる。
俺が小さくため息をついて下を向いた時だった。
真央が驚いた顔で俺のことを見た。
【真央】「ああっ！？　渉さん！」
【彰人】「避けろ！」
【渉】「えっ？」
間抜けな声で返答したその時だった。
【渉】「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

――俺は星になった。
ぼやける視界の中でリムジンが走り去って行くの見えた。
人はよく言う、人間死の直前に人生を走馬灯のように見ると――。
俺も見ちゃった。
ちっちゃい頃好きだった子のこととか、好きなマンガとか、とにかく色々見た。
そして、気を失った。
これもまた人はよく言う、人間死にそうになって意識を失っている時、三途の川とか見たりするって……俺も見ちゃった。
俺が見たのは三途の川で、川の向こうには奇麗な花がいっぱい咲いちゃったりしてて、お爺さんとお婆さんが手を振って、俺に来い来い言っているようだった。
しかし、俺はいかなかった。
なぜって？
当たり前だろ、あんなじいさんとばあさん見たことない、てゆーか誰だあれ？
俺のじいさんとばあさんは元気にピンピンしてるぞ、１００歳まではいくなあれは……。
とゆーわけで、俺は目覚めた。

つーか、酷い目に遭ったがどうにか学校に到着。
なんか校舎内が騒がしいぞ。
【彰人】「なんかあったのか？」
【真央】「あっ、後ろから沙羅先生が走ってきますよ」
俺が後ろを振り向くと、血相を変えた嬢王様がたわわな胸を豪快に揺らしながら走って来るではないか！？
そして、嬢王様は俺たちを追い抜かしながら声を張り上げた。
【沙羅】「アナタたちも教室に急ぎなさい！」
【渉】「はっ！？」

嬢王様の向かう先はたぶん俺たちの教室だな……って教室でなにがあんの？
【彰人】「あの嬢王様があれほど焦るなんてな。きっと自己に不利益な事態が起きたに違いないな」
嬢王様は、いい言い方をすれば合理的で、悪い言い方をすれば打算的。
見返りがない限り人に手を差し伸べるなんてありえない人だ。
そんな彼女が焦る理由は……？
【真央】「早く教室に行きましょうよぉ」
【渉】「いや、教室には行かない方がいいかもしれないぞ」
【彰人】「そうだな、きっと騒ぎの発生源が教室だな」
【真央】「どうしてですかぁ？」
【渉】「あの嬢王様が生徒を安全な場所に誘導するようなマネをするとは思えない。となると、教室に早く来い＝アナタたちも騒ぎ解決に手を貸しなさいよってことだろうよ」
【真央】「沙羅先生のこと、よくそんなにわかりますね」
【渉】「俺と彰人は3年連続嬢王様クラスだからな」
【彰人】「あの先生にとって生徒は実験台でしかないな」
【渉】「じゃ、そーゆーことで教室行かないでどこで時間潰すか？」
【真央】「えぇ～、教室に行かないんですか？」
【渉】「だってなぁ、デッドゾーンに自ら行くアホなマネしないだろ普通」
【真央】「でもぉ、遅刻になっちゃいますよ」
【彰人】「しょうがないから教室行こうぜ」
【渉】「マジで？　俺は行きたくないなぁ」
【彰人】「俺は教室行くからな。行こ、結城さん」
【真央】「え、あ、あのぉ、麻生さんは？」
【渉】「待てって、俺も行くよ」
俺はしぶしぶ教室に向かうことにした。

教室付近まで来ると、あたりの騒がしさが明らかに増していた。
つーか、ここに来てなにが起きてんのか悟ってしまった。
【刹那】「お～ほほほほっ！！」
教室から聞こえて来る高笑いは、嬢王様のものではなく、刹那のものだった。
【渉】「やっぱ教室に入らない方がいいな」
【彰人】「刹那の〈暴走〉かな……」
【真央】「刹那さんの〈暴走〉ですか！？」
刹那の〈暴走〉と聞いて、この学校で知らないものはいない。
簡単に説明すると、〈暴走〉とは刹那の突発性の発作みたいなもんだ。
まあ、詳しくは見ればわかるって感じだな。
【真央】「早く刹那さんのことを誰かが止めないと大変なことになっちゃいますよ」
【渉】「少なくとも俺は嫌だ」
【彰人】「とりあえず様子だけでも見ておくか？」
【渉】「そうだな」
教室の出入り口には何人もの野次馬が集まっていて、その隙間から俺は教室内の様子が伺った。
予想的中。
刹那が〈暴走〉してる。
机とか椅子とかが滅茶苦茶に散乱して、その瓦礫の山の上に刹那が立ってやがる……って、よりにもよって刹那の腕にはなんでか桜井が捕らえられていた。
なんてこったい！
どーして桜井が人質になってんだよ！
でも、抱きかかえられてる桜井の顔がすっげえ冷めてるし。
【明日香】「放して」
【刹那】「ヤダよ、明日香はボクの所有物なのさ！！」
【明日香】「……はぁ」

ほんとため息つきたくなるような状況だな。
桜井を人質に捕っている刹那の前に仁王立ちをした嬢王様が、ビシッとバシッとシャキッと赤いマニキュアをした指で刹那を指差した。
【沙羅】「ったく、好き勝手に暴れて誰に迷惑かかると思ってるの！　アタシに迷惑かかるのよ！」
あっ、嬢王様が機嫌悪そう。
【沙羅】「あのねえ、刹那がどこで暴れようとアタシは構わないわ。でもね、暴れるなら隣のクラスにしなさい！！」
責任転嫁か！！
【刹那】「ボクは誰に言うことも聞かないよ。なぜって、それはボクが神だから！」
意味不明。
桜井を抱きかかえたまま刹那が走った。
教室の出口は野次馬に塞がれていたが刹那は迷うことなく窓に向かって走り出した。
マジか、ここって2階だぞ！
開かれた窓の縁に足をかけて刹那が天に舞った。
【渉】「マジかぁーーーっ！！」
窓の外に消えた刹那を追って俺はすぐに野次馬を掻き分けて窓の外を覗いた。
すると、地面に敷かれたマットの上に刹那が無事に着地してる。
そのマットをセッティングしたのが噂の刹那の黒子部隊だった。
すげえ、刹那の影に黒子部隊ありだな。
刹那がマットから下りると黒子部隊は素早くマットを片付けて姿を消してしまった。
【沙羅】「ハ～イ、エブリバディ！　さっさと教室片付けてホームルームやるわよぉん」
切り替え早すぎ。
【渉】「あのぉ、嬢王様。刹那はどーでもいいですけど、明日香は

どーなるんスか？」
【沙羅】「そんな知らないわよ。アタシのテリトリー外で起きたことまで責任取れないわ」
やっぱしな。
そーだろーともさ。
それが嬢王様の性格だよな。
【彰人】「渉、追いたいなら追えよ」
【真央】「真央も二人のことが心配です」
そうだな、桜井のことも気になるし……。
俺が教室を飛び出そうとすると、たわわな胸がその前に立ち塞がった。
【沙羅】「だめよぉん、渉。アナタが学校をサボろうとアタシには特に関係ないわ、出席日数なんてあとで改ざんできるんだから。でもね、教室の片付けてからにしなさい！」

1. 沙羅先生の言うことを大人しく聞く――※1へ（沙羅）
2. 沙羅先生の静止を振り切って飛び出す――※2へ（明日香&刹那&雪乃）

明日香編（8・未編集）

【渉】「……はぁ～い」
【沙羅】「聞き分けのいい子は好きよぉん」
嬢王様の監視下で俺はしぶしぶ教室の片づけを手伝うことにした。
まあな、今から刹那を追っても見つからないだろうな。
でも、気になるぞ。
連れ去られた桜井はどうなったんだよ。
もしかして、あ～んなことや、こ～んなことを！？
つーか、まだチャイム鳴ってないから教室出て行っても遅刻にならないし……ってチャイム鳴るまで3分もないけどさ。
でもさ、やっぱ！
【渉】「行くっきゃないだろ！」
俺は桜井救出大作戦を実行するべく、教室の外に飛び出そうとしたその時だった。
教室の中に桜井が入って来た？
【渉】「あれ……桜井？」
そして、桜井の後ろから気絶している刹那を引きずりながら雪乃が入って来た。
どういうことですかーっ！？
どなたか説明プリーズ！
【渉】「桜井、なにがあったんだよ……特に刹那の身に？」
【明日香】「……別に」
って、別にじゃないだろ！
俺はすぐさま雪乃に顔を向けた。
【渉】「なにがあった？」
【雪乃】「たまたま登校中に明日香を抱えた夕凪さんに会ってしまって……黒子部隊はなかなかの強敵だったわね」
静かに雪乃が微笑った。

その笑みの奥に含まれているものはなんだ！？
……つーか、だからなにがあったんだよ！
【渉】「桜井でも雪乃でもいいから、なにがあったのか教えてくれよ」
【明日香】「……別になにもなかった」
【雪乃】「そうそう、なにもなかったのよ……」
含み笑いを浮かべる雪乃……！？
結局、二人はなにがあったのか語ろうとしなかった……刹那の身にいったいなにが！？
……気になる。
【渉】「なにがあったんだよーっ！！」
【沙羅】「うるさいわよ渉！」
【渉】「はぁ～い、ごめんなさ～い」
謎は謎のままで事件は終わってしまった……。

明日香編（9・未編集）

やって参りました昼休み！
昼休みといえば弁当！
学校生活の楽しみのひとつである毎日のイベント昼食の時間だぁ！！
ってことで、今日の弁当はなにかなぁ……あ、あれ？
【渉】「弁当がねえ！！」
……思わず叫んでしまってクラス中の注目を集めてしまった。
早起きなんてするもんじゃないな……絶対早起きのせいで弁当忘れたんだよ。
――ぐぅ～。
腹が鳴ったというか、泣いた。
昼食抜きは嫌だ！
だって、次の時間は体育だぞ！
体育に備えてエネルギー補給しないでどうする！！
『腹が減っては戦はできぬ』ってどっかの誰かさんが残した有名な言葉もあるし。
……さて、どうする自分？
考えろ。
普段使ってない脳ミソよ、今こそ目覚めよ！！
……購買に行くか。
いや、金を使うのが勿体ない気が……。
じゃあ、誰かに恵んでもらうか。
それとも断食修行……は嫌だな。
どこかに食いもん落ちて……るもんなんか食えるか！
俺はそこまで落ちてないぞ、辛うじて人間だ。
――ぐぅ～。
脳ミソ使ったらカロリーでも消費したのか、よけいに腹が……。

……ヤバイ、腹が空きすぎて死ぬぅ。

よし、今こそ決断の時だ！

1．教室にいる誰かに恵んでもらおう――※1へ（明日香＆雪乃）
2．ここは心の友、彰人に恵んでもらうか――※2へ（真央＆彰人）
3．やっぱ、購買に行くのが打倒だな――※3へ（沙羅＆刹那）

明日香編（１０・未編集）

食い物センサーオン！！
現在教室で飯食ってるやつらで俺になんか恵んでくれそうな神サマは……？
誰だ、誰なら俺にくれる？
そんな心優しい女神サマは……桜井！
……はないな。
桜井が俺に食べ物を恵んでくれるわけないな。
いや、微妙かもしれん。
いやいや、やっぱ無理かも。
ここはダメもとで……ダメなままってオチがありそうだな。
あっ、桜井と飯食ってる雪乃なら恵んでくれるかも……。
俺は営業スマイルを浮かべながら雪乃のもとに向かった。
【渉】「よっ、雪乃サマ」
【雪乃】「あら、麻生君。食べ物ならあげないわよ」
ぐはっ！！
いきなりの攻撃かよ！
【渉】「なんで俺の目的を見破ってんだよ！」
【雪乃】「だって、さっき大きな声で叫んでたじゃない」
【明日香】「……ばか」
ぐわっ！
桜井からも攻撃かよ！
そうさ、どーせ俺はバカでマヌケで救いようのないドジさ……。
でもさ、一言だけ言わせてくれ！
【渉】「食べ物を恵んでくれ」
俺は雪乃の弁当に入っているエビフライを凝視しながら言った。
すると、雪乃はすぐにエビフライを箸で挟んで俺の口元に……。
【雪乃】「渉クン、あ～んして、あ～ん」

【渉】「あ～ん」
な、なんと、俺の口に入る寸前のエビフライが急ターンした。
【雪乃】「なんちゃって」
パクッとエビフライは雪乃のお口の中へ……。
ひ、ひどい……弄ばれた。
【渉】「性格悪いぞ」
【雪乃】「あら、そう」
雪乃は笑って済ませた。
ダメだ、雪乃は俺に食べもんをくれる気ナッシングだな。
となると……桜井か。
【渉】「桜井……くれ」
【雪乃】「あらら、昼間から明日香をくれだなんて……えっちだわ」
【明日香】「……不潔」
【渉】「っておまえらどーいう思考回路してんだよ！　俺は桜井に食べ物をくれって言ってんだよ」
【明日香】「ヤダ」
即答！
反撃を無効化するような即答攻撃。
だが、ここはあえて反撃で食い下がるぞ。
【渉】「そこをなんとかさ。だってよ、桜井ってコンビニで買ったサンドイッチとサラダじゃん。サンドイッチなんか分けやすいと思うんだよなぁ」
【明日香】「ヤダって言ってるでしょ、麻生って耳悪いの？」
【渉】「サンドイッチひとつでいいからさ」
【明日香】「イ～ヤ！」
【渉】「ハム一切れ！」
【明日香】「しつこい男ってキライ！」
ぐわぁっん！！
好感度が下がったな……。
俺としたことがなんたる失態。

もうダメだ。
いろんな意味でダメで、俺は床に手を付いて項垂れた。
【雪乃】「明日香の一言が胸に刺さったのかしら。しょうがないわね、可哀想な麻生君にエビフライ一本恵んであげようかしら」
【渉】「マジですか雪乃サマ！？」
俺は勢いよく立ち上がってキラキラ光る瞳で雪乃を見つめた。
【雪乃】「渉クン、あ～んして、あ～ん」
【渉】「そうやって、また俺のことを騙すつもりじゃないだろうな！」
【雪乃】「そんなこと言ってるとあげないわよ」
【渉】「疑った俺が悪かったです、快くご馳走になります」
って言ってる先からエビフライが雪乃のお口へ！！
【渉】「テメェ！」
そうはさせるか！
そのエビフライは俺のもんだ！
どうにかして雪乃の口に入る前に俺の口へ！
俺は雪乃の口に向かっているエビフライに向かって食いついた。
……目を丸くする雪乃。
そこ横では明日香も口をポカンと開けて、俺も驚いた表情をした。
エビフライには食らい付くことには成功したが……この唇に伝わる柔らかい感触は……！？
【渉】「あぁぁぁぁぁっ！！」
俺は慌てて雪乃の唇から自分の唇を離した。
【渉】「ご、ご、ごめん！　ワザとじゃないんだ、不可抗力っていうか、物弾みっていうか、偶然っていうか……」
【明日香】「麻生のえっち、ばか、不潔、死ね！」
……桜井からの罵声もよく耳に入らないほど俺はパニクっていた。
事故とはいえ、俺は雪乃とキスをしてしまったのだ。
しかも、二人がエビフライをくわえたままという微妙なシチエーションで。

【渉】「だからね、ちょっと触れただけだから……。別に狙ってやったわけじゃないしさ。とにかくごめん」
【雪乃】「いいのよ、そんなに謝らなくても、事故なんだし」
雪乃は何事もなかったようにお澄まし顔で微笑んでいた。
その笑みの奥では腸煮えくり返ってるんですか、もしかして！？
これから夜道は背中に気をつけた方がいいでしょうか？
確か雪乃って神社の娘だったと思ったんですけど、呪とかかけられちゃうんでしょうか？
つーか、殺される？
【渉】「ごめん、怒らないでくれ、呪わないでくれ、殺さないでくれ」
【雪乃】「大丈夫よ、怒ってなんかないから。それに麻生君とキスするの2度目だし」
【渉】「なんですとーっ！？」
この発言には横にいた桜井も開いた口が塞がらない様子だった。
【雪乃】「あら、覚えてないの？　私のファーストキスの相手は麻生君なんだけどなぁ」
知りません、覚えてません、記憶に御座いません！
【渉】「ジョーダンだよな？」
【雪乃】「まあ、物心付く前だからキスの数に入れなくてもいいけど」
【渉】「いつどこで、どのようなシチエーションで俺たちキスしたんだよ！」
【雪乃】「神社の境内で麻生君の方からキスしてきて、大きくなったら結婚しようってね。小さい頃のいい想い出ってやつかしらね」
……いや、全く記憶にないんですけど。
そう、雪乃と俺は幼馴染で、俺が引っ越しをして離れ離れになったわけだが、高校である意味運命的再開。
雪乃との小さい頃の思い出って、なぜだか記憶が抜け落ちてるところが多くて……。

【渉】「マジでそんな約束したのかよ？」
【雪乃】「ええ、したわ。でも、小さい頃のそんな約束なんてジョーダンみたいなものだから、気にすることでもないわね」
【渉】「そ、そうだよな」
【明日香】「でも、今の雪乃とのキスは時効になんないかんね」
【渉】「あれは事故だって。な、雪乃？」
【雪乃】「あら、ワザとだと思った」
【明日香】「サイテー」
【渉】「いや、違うから。そんな冗談いらないから、雪乃も俺のことからかうのよしてくれよ」
【雪乃】「からかってなんかないわ。だって、あの時……麻生君ったら、私の口の中に舌を……」
【明日香】「不潔、不潔、不潔、麻生死ね！」
ショック！
無罪の罪でショック！
桜井にマジで死ねとか言われたし……。
もう立ち直れねえ。
……ふっ。
俺はズタボロに傷ついた胸を労わりながら自分の席に戻った。
そして、机に突っ伏して泣いた。
俺って青春！

明日香編（１１・未編集）

放課後になり、昨日と同じく会議（？）みたいなものが行われるわけだが……。

【真央】「ところで刹那さんの別荘にはいつ行くんですか？」

【彰人】「刹那の別荘にはコンビニとかあったりすんの？　さすがコンビニまではあるわけないよな、孤島だし」

【刹那】「コンビニなんて標準装備さ。ちなみにゲームセンターも完備してるよ」

あるのかよ！！

しかもゲーセンまで……。

……と、こんな感じですっかり旅行の話で盛り上がっている。

【沙羅】「旅行の日程はアタシの都合で３泊４日、今週の金曜日に出発するわよ」

【渉】「はっ？　今週の金曜日って終業式の日ですよね？」

【沙羅】「そうよ、その日の午後に出発よ。刹那の別荘まではそんなに時間がかからないと思うわ」

……ここで俺の脳裏に『嫌な予感』が爆走した。

【渉】「交通手段は刹那んちの自家用ジェットですよね？」

と聞きながら、俺は別の乗り物が頭に浮かんでいた。

【沙羅】「アタシの造った航空機の試運転をしたいから、それで行くわよ」

……やっぱりね。

たぶんマッハで飛ぶことは間違いないな。

全員参加予定で旅行計画が盛り上がる中、桜井がボソッと呟いた。

【明日香】「あたし行かない」

……。

一瞬にして場の空気が静まり返った。

別に桜井の発言によって場の空気が冷めたわけじゃない。

ただ、昨日と同じ展開――桜井ＶＳ嬢王様になりそうだなぁ、ってことをみんな危惧して静まり返ったのだ。
静かな笑みを浮かべた雪乃が素早くフォローに入る。
【雪乃】「そんなこと言わないで、私も行くんだから明日香もね？」
【明日香】「あたし、馴れ合いとか好きじゃないの」
あたし一匹狼的な生活してるんです発言！
【沙羅】「あらん明日香、本気で言ってるのかしら？」
桜井は嬢王様の問いには答えず、ただ不機嫌そうな顔をするだけだった。
【真央】「あのぉ、みんなもっと楽しくしましょうよぉ」
【雪乃】「真央ちゃんの言う通りよ。みんなで楽しい旅行にしましょう」
【彰人】「高校最後の夏休みなんだしな？」
【渉】「一緒の旅行行こうぜ桜井？　ほら、刹那だって桜井のいない旅行なんてヤダろ？」
【刹那】「君にしてはいい意見を言うじゃないか。ボクは明日香のいない旅路なんて考えられないよ！」
【明日香】「じゃあ、行かなきゃいいじゃん」
……グサッ。
発言にトゲがありすぎ。
【沙羅】「どぉーしても行かないっていうなら、アタシにも考えがあるわよ」
【明日香】「行かない」
【沙羅】「……女子高生ナゾの失踪」
なんか凄まじい脅し文句だぞ。
授業の単位を落とすとか、退学にするとかじゃなくって……ナゾの失踪？
【渉】「失踪ってなんスか、失踪って……？」
【沙羅】「失踪は失踪よ」
ニヤリと嬢王様が悪魔の笑みを浮かべた。

……これ以上この話題には触れない方がよさそうだ……俺がナゾの失踪を遂げてしまう。
【雪乃】「お願いだから明日香も一緒に行きましょう。ほら、私から明日香にお願い事をするなんて滅多にないでしょう？」
桜井の表情が少し変わる。
さっきまでは不機嫌な表情をしていたんだが、今は難しい表情をしてなにかを悩んでいるようだった。
雪乃のお願い攻撃によって桜井の心が揺れ動いているのか？
だとすると、ここでもうひと押しかも？
【渉】「俺からもお願いするから、一緒に行こうぜ桜井？」
【明日香】「イヤ」
ぐわっ、逆効果だったか！？
【刹那】「マイハニー明日香が一緒に行ってくれないなんて、ボクは悲しくて涙が出てくるよ」
ってマジで刹那号泣してるし……リアクションが大きいぞ。
【真央】「一緒に行きましょうよ明日香さん？」
【彰人】「桜井さんがいないとみんな盛り上がらないみたいだしな」
考え込む桜井。
そんな悩める桜井の表情も素敵だ！
【沙羅】「……行かないと実験台よ実験台」
【明日香】「あたし絶対に行きませんから」
うわっ、あと一歩で落ちると思ったのに、嬢王様の一言で桜井の表情が急変。
【雪乃】「まあまあ、そんなこと言わないで、一生のお願いだから明日香も一緒にね？」
【刹那】「明日香が行かないって言うなら、ボクは別荘を貸すことを拒否する！」
【沙羅】「ふふ～ん、刹那クン。それはアタシに対しての宣戦布告かしらぁん？」
【刹那】「明日香のためならボクは死ねる！」

どーしてそーゆー展開になる！？
【雪乃】「二人が全面戦争したら多くの死者が出るだろうし、都市も一個くらい消滅するかしら」
【真央】「ダメですよぉ、二人とも仲良くしてください」
【彰人】「旅行ひとつでこんなにもめるなんてな。嬢王様、この旅行計画は白紙に戻して、ついでに実行委員も解散した方がいいんじゃないですか？」
【沙羅】「ダメよ」
【渉】「そもそもなんで旅行計画なんて考えたんでスか？」
【沙羅】「天才のひらめきよ。それに夏休みにみんなで旅行なんで青春じゃない！」
……はぁ？
つまり気まぐれなわけね。
急に天井を仰ぎ目をつむる刹那。
出たぁ、刹那の〈交信〉だ！
さぁて、どんな〈信託〉が出るのか交互期待……なのか！？
【刹那】「ああ……時間が見える。二つのハートペンダントは運命によって結ばれているから、無理に仲を引き裂こうとすると災いが起こるよ」
この〈信託〉聞いて俺は驚いた。
きっと桜井もはっとしただろうし、俺がペンダントのことを話した彰人もはっとしたと思う。
【沙羅】「意味がよくわからない信託ね」
【雪乃】「誰か心当たりのある人は？」
【真央】「どういう意味だったんですか刹那さん？」
【刹那】「ボクに聞かれても困るなァ、頭に浮かんだ言葉を言っただけだから」
桜井が俺のことをチラっと見た。
今のチラ見はどういう合図だよ？
彰人も俺のことをチラっと見た。

やっぱ、ハートペンダントってのはこれのことだよな。
でも、俺がそれを持ってるってことをここで言うと、桜井に怒られそうな気がするなぁ。
つーか、今朝も電車の中でその話題したら桜井の機嫌損ねたし。
【明日香】「刹那くん、災いって具体的になにが起こるかわかる？」
【刹那】「さあ、わからないなァ」
【渉】「刹那の〈信託〉が外れるわけないから、なんか起こるんだろうな、きっと……」
内心なにが起こるかドッキドッキだぞ。
俺的解釈で刹那の〈信託〉を紐解くと、たぶんだけど、今回の旅行に桜井が来なかったらなんか起きそうな感じなんだよなぁ。
【渉】「そうだ、そうだ、刹那の〈信託〉の話なんかよりも、旅行の話に戻そうぜ。桜井も一緒に旅行行くよな？　な？　な？」
【明日香】「……しょーがないから行ってあげる」
【雪乃】「あら、どういう風の吹き回しかしら？　さっきまであんなに行かないって言っていたのに……？」
【明日香】「……別に」
【渉】「まあ、そんなことといいじゃんか。桜井の旅行に参加ってことでバンザーイって感じでさ」
【真央】「みんなで楽しい旅行にしましょうねぇ」
【沙羅】「青春よ！」
……なんか一件落着って感じだな。
でも、桜井の表情があんまり浮いてないな。

夏だ、海だ、青春だ！！
ザバ～ン（海の音を自作自演）
とゆーわけで、南海の孤島に来てしまった。
ここに来るまでにはいろいろあった……聞くも語るも涙の話があったわけですよ。
まず、数学の抜き打ちテスト結果が悪くって、夏休みに補習受け

ることになちゃってさ……あはは。
しかも、その補習日と今回の旅行が重なっちゃってさ……あはは。
その問題は嬢王様のお陰でどうにかこうにかなったんだけど、数学教師のゴリラが……ナゾの失踪を……いや、この話については語るまい……俺までナゾの失踪をしてしまう。
あと、終業式の日――つまり旅行出発日にもいろいろと問題があったんだけど……この話もしない方がいいな。
あとぉ、嬢王様が開発したジェット機でここまで来たんだけど……いや、この話も止めておこう。
とにかく聞くも語るも涙の話があって、どうにか刹那の別荘に到着。
ああ、陽の光が眩しい……。
そして！
水着も眩しいぜ！！
生きててよかったとしみじみ実感する瞬間だ。
桜井のロリコン体系を包み込む水着になりてぇーっ！！
その横には真央と雪乃も水着姿ではしゃいでやがる。
つーか、真央はほとんど小学生だな……見てても微笑ましくなるだけだ。
雪乃は意外に胸がデカイことが発覚！
そして、浜辺ではビーチパラソルを立てた下で、ビーチチェアーに座りながら嬢王様がトロピカルなジュース……いや酒っぽい飲み物を飲んでるし。
つーか、なんで水着の上から白衣着てるんですか！！
それはさて置き、さらにそして、同じくビーチチェアーに座りながら本を読んでる刹那……なんだけど、南海のビーチでも白学ランかよ！！
ヤツって私服も白い学ランなのか？
つーか、嬢王様もいつでも白衣羽織ってるし、刹那は白学ランだし……奇才の妙な共通点はいつも同じ白い服？

【彰人】「早く俺たちも海に入ろうぜ」
【渉】「いや、俺は砂浜に座って日光浴してるよ」
【彰人】「どうしてだよ？」
【渉】「神々しすぎて近づけないんだよ」
つーか、これ以上近づいたらモーソー爆発で出血死しそうだからな。
あの水着の下になにが隠されているのかとモーソーするだけで、心トキメク瞬間で幸せを噛み締めながらご飯3杯はいける。
【彰人】「おまえ鼻の下伸びてるぞ」
【渉】「え、あ、マジ！？」
【彰人】「ジョーダンだよ」
【渉】「なんだよ、焦るだろ！」
【彰人】「ホントはマジかで見たいんだろ。ほら、さっさと行くぞ」
砂浜の上に座っていた俺は彰人に無理やり立たされると、ケツを一発蹴られて海に向かって歩き出した。
マジかで見る桜井の水着姿は一段と俺のモーソーを爆発させる。
とりあえず、頭の中で一回押し倒しておこう。
ふと桜井の首元を見て俺はあることに気がついた。
あのペンダントしてないのか……。
まあ、俺も水着に着替える時に外したけど。
そもそも桜井があのペンダント付けててくれてるとは限らないしな。
それに同じペンダントなんか付けてたらみんなにからかわれるだろうし、どっちか一人がつけてても、前に刹那の〈信託〉でハートペンダントの話題が出たからなぁ……。
陽の光を浴びてキラキラ輝く水しぶきの中で、俺は腰まで水に浸かって水遊びをする女子に首っ丈。
波が揺れる揺れる。
そして、雪乃の胸も揺れる揺れる。
【雪乃】「麻生君ったら、さっきからどこ見てるのかしら？」

バシャ！
と雪乃が勢いよく水を俺にかけてきた。
空かさず俺も雪乃に水をかけ返す。
【渉】「俺がなに見てたっていうんだよ！」
【雪乃】「私の口から言わす気なのかしら？」
【明日香】「麻生のえっちぃ」
すさまじく白い目線で俺は桜井に見られてしまった。
でもさ、そこにデカイ胸があったら見るだろ普通。
別にさ、えっちな気持ちなんてなくたって、見ちゃうだろ。
それに、俺は小さい胸の方が好きだ！！
……なんて弁解は決して口に出してはしない。
【彰人】「おい、大変だ！」
突然声を上げる彰人の視線の先を一斉にみんなで見た。
そこには浮き輪でプカプカ浮いている真央の姿が……！？
【渉】「あれって流されてるのか！？」
元からちっちゃい真央がよけいに小さくなって沖の方へ流されてる。
【明日香】「早く誰か行ってあげなきゃ」
【彰人】「俺が……ああっ！」
浮き輪でプカプカ浮いていた真央を突然消えた。
正確に言うと、両手を上げて助けを求めようとした真央が、スッポリと浮き輪から抜けて海に沈んだ。
【雪乃】「あら大変！　真央ちゃんは正真正銘のカナヅチよ」
いち早く動いた彰人が真央救出のため、全速力で浮き輪のある位置まで泳ぎ、そこで海の中に潜った。
しばらくして真央を抱えた彰人が海面に顔出し、真央を抱きかかえたまま砂浜までやって来た。
俺らもすぐさま砂浜に上がって、意識を失ってるようすの真央を砂浜の上に寝かせた。
騒ぎを駆けつけて嬢王様と刹那が急いでやって来た。

【沙羅】「まったく世話の焼ける子ねぇ」
【刹那】「真央ちゃんの様子は？」
彰人がすぐに真央の脈と呼吸を確かめた。
【彰人】「……呼吸が変だ」
【沙羅】「海水でも飲んだのかしらね。そんなわけで誰かマウストゥマウスしてあげなさい」
人工呼吸＝キス！？
【沙羅】「今なら正当な理由で真央の唇を奪えるわよ、二人とも？」
二人って俺と彰人ですか！？
とんでもない、そんなキスなんてしたら、マズイでしょ？
と言いつつも人命にかかわることだから早くしないとダメなわけで……。
刹那の瞳がキラリーンと光った。
【刹那】「ボクがするよ」
にわかに笑う刹那。
ま、まさか真央ちゃんのことも狙ってたのか！
砂の上に膝をついた刹那が、まさに王子様がお姫様にキスをするかのごとく……接吻！
若いオナゴ同士がキスする光景……不謹慎だがドキドキだ。
しかも、何度も何度も口を離しては付けて、離しては付けて……。
刹那が人工呼吸を止めると、咳き込んで水を吐いた真央が目を開けた。
【明日香】「……よかった」
【雪乃】「ホントにね」
目をパチクリさせた真央は自分を取り囲んでる人たちを見て頭に？マークを飛ばした。
【真央】「あのぉ、水の中に中に落ちたところまでは覚えてるんですけど……」
【渉】「彰人が真央ちゃんのことを助けて浜辺まで運んで……」
【沙羅】「刹那があなたに濃厚なキスをしたのよ」

【真央】「……キ、キスですかぁ！？」
【雪乃】「あ～、勘違いしちゃダメよ。刹那君が真央ちゃんに人工呼吸したのよ」
刹那の顔を見つめる真央の顔がだんだん真っ赤になっていく。
【真央】「はわぁ～～～っ」
バタン！
あっ……真央が倒れた。
【沙羅】「少し暑くて気を失っただけでしょ。誰か日陰に運んであげなさい」

場所は南国の孤島なのに風呂は純和風の露天風呂じゃん。
まあ、個室にも部屋風呂がついてたけど、大浴場の方が気分いいもんな……ななーっ！？
【刹那】「やあ、渉クン。こんなところで会うなんて奇遇だねェ」
【渉】「わあっ！」
俺はすっぽんぽんで突っ立ってる刹那を確認して、すぐさま後ろを向いて刹那から視線を逸らした。
……以外にデカイ……じゃなかった。
【渉】「『やあ』とかじゃなくって、なんでおまえがここにいんだよ」
【刹那】「ボクの別荘だし、一緒にジェット機に乗って来たじゃないかァ……あはは」
【渉】「そーゆー意味じゃなくって……。つーか、混浴なのかよ？」
【刹那】「バカだなァ、渉クンは。旅館じゃなくってプライベートなお風呂なんだから、男女仕切られてるわけないじゃないか。渉クンんちのお風呂は男女分かれて存在してるのかい？」
……もっともな意見なのか、どうなのかビミョーだ。
まあ、そりゃー確かに家の風呂は混浴っていうか、男女兼用だよな普通。
【刹那】「ほら、渉クンもまったりと湯船に浸かりたまえ」

【渉】「浸かんねーよ」
一緒に入れるわけないだろうが。
やっぱ部屋風呂使おっと。
【刹那】「なるほど、渉クンは先に体を洗う派なんだね。じゃあ、ボクが背中を流してあげようw」
【渉】「いいから、いいって！」
刹那に腕を引っ張られ強引に座らせれると、いつの間にか泡立てられたスポンジで背中をゴシゴシされてしまった。
【刹那】「お客サマ、お痒いところはございますかァ」
【渉】「そのセリフって間違ってるだろ。普通は頭洗ってる時に聞くセリフだろ」
【刹那】「へぇ、そうなんだ。てっきりボクはメイドがご主人サマの頭を洗っている時に聞くセリフだと思っていたよ」
【渉】「……はぁ？」
【刹那】「えっ、どうかした？」
刹那は目を丸くして、自分が爆弾発言をしたことにも気づかないようで、すっとぼけた間抜けな表情をしていた。
……刹那はどこまでが計算で、どこからが天然なのだ……？
もしかして、全部計算なのか？
俺って刹那に弄ばれてる！？
……つーか、刹那って桜井が近くにいないと抜けてるっていうか、ふわふわしてるとこあるよな。
ってなんですっかり刹那ペースで背中なんて流されてんだよ。
すっかり寛いじまったじゃん。
【渉】「もういいから、十分洗ってもらったからもういい」
【刹那】「そうかい？　まだ前が洗い終わってないのになァ」
【渉】「……」
からかわれてるのか……天然なのか……？
前っつたら……あ～んなことや、そ～んなことを……。
【刹那】「じゃあ、頭も洗ってあげようか？」

【渉】「いや、もういいから」
つーか、よく考えたら背中の後ろにはスッポンの刹那がいるわけで……。
よ～く考えれば考えるほど、よからぬモーソーが……。
【刹那】「まあまあ、そんなこと言わずにね。ボクはまだ人の髪の毛を洗ったことがないんだ。つなり初体験なんだ。さあ、ボクの初体験に付き合っておくれ」
【渉】「言葉の使い方が……ってやめろよ！」
俺の頭に大量のシャンプーが振り掛けられ、刹那の手が俺の髪に突っ込まれる。
すぐに俺は刹那を振り払おうとしたのだが……。
【刹那】「わお」
【渉】「ああっ！」
刹那の足を滑られると同時に俺に腕をつかみ、二人揃って転倒してしまった。
シチエーション的には床に倒れた刹那の上に俺が覆い被さる感じ……。
【刹那】「コケちゃったね、あはは」
刹那は驚くでもなく、声を上げるでもないので、俺は呆然として刹那の上から退くことを忘れてしまった。
と、ここで俺の耳に微かに水が跳ねる音が聞こえた……誰かが歩く音！？
俺は慌てて足音のした方向を振り返った。
【渉】「ぐわぁっ！？」
【明日香】「麻生のえっち！！」
【渉】「ご、誤解だって！」
俺が振り向いた先には桜井と雪乃が立っていた。
二人とも大きなバスタオルを体に巻いていて、ちょっぴり残念……とかじゃなくって！
【雪乃】「麻生君の刹那君って……そーゆー関係だったのね……う

ふふ」
そーゆー関係とはつまり、スッポンの刹那の上に俺が覆い被さってる状況。
【渉】「だから誤解だって！！」
【明日香】「……」
軽蔑の目をした桜井は無言のまま後ろを向いて、雪乃の腕を引っ張って風呂を出て行ってしまった。
ショック！！
マジ誤解された。
どうにか濡れ衣を晴らさなければ……。
でも、こんな状況見たら普通は誤解……こんな？
【渉】「うわぁっ！？　ごめん！」
まだ刹那の上から退いてなかった。
俺は慌てて刹那の上から退くと、カァっと熱くなった顔を隠すために風呂の中に飛び込んだ。
背中の後ろでチャポンという水音がして、刹那風呂の中に入ってきた。
【刹那】「すぐに帰っちゃうなんて、明日香はなにしに来たんだろうね。せっかくだからお湯に浸かっていけばいいのに」
【渉】「……状況理解しろよ。つーか、おまえもバスタオル巻くとかしろよ……嬢王様みたいに……みたいに？」
俺に視界に風呂に浸かってお酌をする嬢王様の姿が！？
【渉】「っなんで嬢王様がいんスか？」
【沙羅】「居ちゃわるい？」
【渉】「悪くはないですけど……」
【沙羅】「それにしても、刹那ってナイスバディね。学ランの下にそんな魅惑の乳ががあってなんて驚きだわ」
【刹那】「最近また大きくなったみたいで、さらしを巻くのが大変なんだよね」
【渉】「って刹那なに自分の乳揉んでんだよ！　つーか、早くバス

タオ巻けよ！」
【刹那】「まったく、渉クンはばかだなァ。自分んちのお風呂にバスタオルを巻いて入る人なんて変人だよ」
……いや、おまえは十分に変人だから、やっても問題なし。
【渉】「じゃなくって、男の俺がいるんだから隠せよ」
【刹那】「……渉クンのえっちだなァ」
【渉】「おまえわかってんじゃねえかよ、えっちとかそーゆーこと思うなら隠せよ」
【刹那】「ボクは別に見られても恥ずかしくないけどなァ。だってボクらは同じ人間じゃないか！！」
【渉】「論点がズレてるぞ。そりゃー動物の身体見てコーフンなんてしねえけど……ってだから同じ人間だとコーフンするんだろ！」
【沙羅】「あらん、渉ってら爆弾発言ねぇん。刹那の女体を見て興奮だなんて、夜のオカズにしちゃダメよ」
ごめんなさい、するかも……。
そんなの仕方ないだろ、刹那の生ボディを上から下まで心のメモリーに保存しちまったんだから。
今だって見ないようにしてるんだけど、微妙に目を横に動いちまって、水に浮く生乳が…プカプカ。
そうさ、俺はたぶん今夜のオカズ決定さ。
友達をオカズにするなんてと思ってんだろ、軽蔑したきゃしろよ！
しょうがないだろ、だって男の子だもん♪
……ってなに俺は考えてるんだ。
【渉】「とにかく、刹那はバスタオル巻け」
【刹那】「じゃあ、こうしようよ。渉クンも腰に巻いてるタオル取ろうよ。そうすればお相子で問題なしさ」
【沙羅】「グッドアイディアね」
【渉】「バッドアイディアだろ」
【刹那】「ほら、渉クン早く取っちゃいなよ、さっき渉クンのは見ちゃったから恥ずかしがることないよ」

……さっき？
最初にここで刹那に会った時にタオル巻いてなくて、刹那を確認してすぐに巻いたんだよな……あの時か。
【沙羅】「ほ～ら、ほ～ら、早く脱いじゃいなさ～い！」
顔を赤く染めた嬢王様が俺に迫ってくる
この人酔ってるでしょ？
絶対酔ってるでしょ？
俺はすぐさま湯船から出て逃げようとした。
だが、嬢王様の手が俺の腰に巻いてあったタオルに！！
【沙羅】「そぉ～れ！」
【渉】「ぐあっ！？」
ぶらんぶらん♪
【刹那】「わお」
無表情な顔のままで驚いてみせる刹那に続いて嬢王様の攻撃。
【沙羅】「デカイわね」
ハズカシラメラレたぁ～。
【渉】「わぁ～ん！」
俺は青春涙をボロボロ流しながら、風呂場から逃げるようにして走って去った。

夏だ！　海だ！　ビーチバレーだ！！
今日は昨日の事件（胸がないから滑り落ちたのよぉん――嬢王様談）の教訓を生かしたの生かしてないのか、砂浜でビーチバレーをすることになったのだ。
チームは話し合いによって好きなもの同士ということで、俺・彰人ペア、刹那・真央ペア、明日香・雪乃ペアで嬢王様が審判を勤めることになった。
チームが全部で3チームになったので、試合は総当たり戦でみんなで仲良く楽しもうということになったのだが、途中で嬢王様が刹那に優勝チームに商品を出すことを要求し、総当たり戦だと勝ち数

が同じで引き分けになる可能性があるので、急遽リーグ戦に変更された。
厳正な抽選（あみだくじ）の結果、明日香・雪乃ペアがシード権を獲得し、第１回戦は俺・彰人ペアＶＳ刹那・真央ペアの戦いになった。
試合は俺たちのチームがかなり優勢。
軽く上がったチャンスボールに向かって俺がジャンプする。
【渉】「とりゃーっ！」
俺の放ったレシーブをブロックしようと真央がジャンプするが、背の高さが足りず手の上を通り過ぎていく。
真央の後ろには刹那が控えていたが、スイッチオフ状態の刹那は動きが鈍く、ワザとだろって言いたくなるくらいの空振りをある意味華麗に決める。
つーか、刹那学ランだし！
……そう言えば、そもそも刹那が学校の体育の授業に出てる見たことないしな。
ま、まさか刹那って極度の運動オンチ！？
【沙羅】「勝負にならないわね。見ててもつまらないわ。仕方ないわね、奥の手よぉん！」
嬢王様がすごい勢いで桜井のいる方向を振り向いた。
【沙羅】「刹那を応援するのよ！」
【明日香】「えっ！？」
【沙羅】「刹那は明日香に応援されれば元気１００倍よぉん！」
【明日香】「なんであたしが……」
【雪乃】「まあいいじゃないの、応援してあげなさいよ」
【明日香】「……刹那がんばれ」
感情が全くこもってない小声。
だが、その心は刹那の心にグサッと刺さったと思う。
だって、明らかに刹那スイッチがオンしてるし！
【刹那】「任せておきたまえマイハニー！」
サーブ権が刹那・真央ペアに移行し、刹那がサーブを放つ。

【刹那】「夕凪家の名に懸けてこの勝負はもらうよ！」
放たれるサーブ！
うおっ、ぜんぜんサーブのキレが違うぞ！
【渉】「……おおっと！」
かろうじて俺はボールを受け、上がったボールを彰人がトスする。
【彰人】「決めろ渉！」
【渉】「おうよ！」
彰人がいい位置にあげたボールを俺がレシーブする！
【渉】「くらえ……なにーっ！？」
【刹那】「甘いよ、渉クン」
真央の後ろを守っていたはずの刹那がいつの間にか俺の真ん前に！？
俺のレシーブは見事に刹那にブロックされてしまい、俺チームのコートに落ちた。
【沙羅】「うふふ、刹那本領発揮ねぇん」
いや、大丈夫だ。
たかが一点取られただけさ。
まだ１２対３でこっちがリードしてる。
だが、今の１点から試合のペースはあっちペースになってしまった。
さっきまでは考えられないほどのスピードで刹那が動き、こっちの攻撃を刹那ひとりが一発でこっちに返してくる。
【真央】「あわわ～っ」
真央はさっきからボールに触れることなく、あっちこっち振り回されるように走ってるだけだ。
つーか、バレーボールって３回タッチして体制整えるのが普通だろ、それを一発で返してくるなんて……。
こっちが軽く返してしまったボールをチャンスと見て、刹那がジャンプする。
そして、空中で状態を捻ってオーバーヘッドキック！

【刹那】「……ふっ」
また、点を決められた。
なんだかんだで俺と彰人は運動量増加して汗だくだってのに、もっと動いてるハズの刹那は涼しい顔して汗で出てないし……学ランなのに！
【渉】「刹那って運動神経異常なほどいいんだな。じゃあ、なんで学校の体育いつも見学なんだよ？」
【刹那】「……ダルイ」
……やっぱし！
そんな答えが返ってくるんじゃないかと思ってたよ。
本来ビーチバレーのルールだと第3セットまであるんだけど、今回は1セット勝負で15点先取制で行われている。
そして、いつの間にか試合は17対17で、先に2点差をつけた方が勝ちって状態になっていた。
【渉】「あんなリードしてて、なんでこんなに追い詰められてるんだよ……」
【彰人】「刹那スイッチ恐るべしだな」
【刹那】「ボクの活躍をしっかり見ててね明日香！」
【真央】「あわわ～っ」
猛襲に次ぐ猛襲の点の取り合いが繰り広げられ、どちらも2点差を付けられぬまま71対70の状態で、こっちがリードしてるんだけど、この状態がなんど訪れたことか……なのに勝てない。
【渉】「ヤバイ……眩暈がしてきた……」
【彰人】「俺も体力の限界だ」
【刹那】「負けを認めるなら今だよ！」
俺は立ってるのもやっとのヘトヘト状態っていうのに、刹那のヤロウは元気ピンピンって感じだな……学ランなのに汗もかかず！
つーか、ほとんどボールに触れないで走り回ってた真央はコートの上で倒れてるし。
【雪乃】「麻生君たち負けちゃいそうね。ちょっとは応援してあげ

たら、明日香？」
【明日香】「なんであたしが麻生のチームの応援なんて……」
【雪乃】「刹那君のことも応援したんだから、両方に応援しなきゃ不公平でしょ。ほら、麻生君、高瀬君頑張って！」
【明日香】「……刹那がんばれ」
【刹那】「ありがとうマイハニー！！」
ってなんで刹那を応援すんだよ桜井は！！
これ以上、刹那にヤル気になられたら、絶対俺ら負けるぞ。
【渉】「クソ、絶対負けねえ、なにがあっても負けねえぞ！」
【彰人】「俺的にはギブアップなんだが」
【渉】「なに言ってんだよ彰人！　優勝商品はプラズマテレビ＆ホームシアターセット（数百万円相当×２）なんだぞ！」
【彰人】「ウチに置くところがないからもらっても困るだけだな」
【刹那】「二人ともごちゃごちゃ言ってないで早くサーブ打ってよ」
【渉】「わかったよ、打てばいいんだろ、打てば！」
ったく、こっちは体力の限界だってのに、少しは休ませろよ。
３点連続で取らなきゃこっちの負けだ……作戦を考えろ俺！
刹那はひとりで戦ってるから、こっちの攻撃したボールを一発でダイレクトで返さなきゃいけないんだ。
だから、一発で返せないようなボールを打てば……ってさっきからやってんだよ！
やってんのに勝てない。
大丈夫だ、こっちが１点取ればこっちの勝ちなんだから、なんとかなるはずだ。
【刹那】「早くしてよ」
【渉】「急かすな！　作戦考えてるんだから！」
【刹那】「渉クンが頭を使うなんて、エライエライ」
【渉】「なんかその言い方バカにしてるだろ！」
【刹那】「うん」
【渉】「もう頭きたぞ。作戦なんて俺には不要だ。気合と根性で勝

ってみせる！」
俺は勝つ！
勝って桜井にいいところを見せる！
【渉】「俺のサーブをくらいやがれ！」
渾身の力を込めて俺はサーブを放つが、例のごとく刹那が一発で返してくる。
【渉】「任せろ！」
刹那の返したボールを俺が受ける。
そして、彰人がトスを上げる。
【彰人】「決めろよ渉。俺はもう限界だ」
彰人が体力の限界で砂の上に倒れた。
天に上がっているボールに向かって、俺はジャンプしてレシーブを決めようとした。
【渉】「見ろ刹那、桜井がおっぱいポロリだ！」
【刹那】「えっ？」
刹那が余所見をした瞬間、俺のレシーブが決まった！
ボールが相手のコートに沈み、俺は見事勝ったのだ！
【渉】「よっしゃ！」
【刹那】「おっぱいポロリなんてしないじゃないか！」
【渉】「ウソに決まってんだろ、ばーか」
どうにか勝てたが、俺も体力の限界だ。
身体全身から力が抜け、俺は砂浜の上に背中から倒れた。
すぐに俺のもとに桜井が近づいて来る……怖い顔して。
【明日香】「……死ね！」
【渉】「ぐおっ」
桜井のかかと蹴りが寝ていた俺の腹を抉った。
【明日香】「誰がおっぱいポロリしたって？」
【渉】「ぐはっ！」
二度目の桜井の蹴りが……。
【明日香】「ホント麻生ってサイテー」

……俺、砂浜の上に死す。
【沙羅】「さぁって、決勝戦はじめるわよぉん！」
マジですか嬢王様！
俺は意識朦朧としてるし、横では彰人は倒れてるし。
【渉】「無理です、休ませてください……」
【沙羅】「ダメよ、アタシがルールブックよ。刹那、コートで倒れてる真央を外に出してあげて。そこの二人はさっさとコートに入った入った」
刹那がとっくに倒れてた真央をコートから引きずり出し、桜井と雪乃がコートに入る。
【渉】「休ませろよ」
【沙羅】「渉・彰人チームは動けないみたいだから、強制的に明日香・雪乃チームのサーブ権からはじめるわよ」
アホかあのルールブックは……なんてことは口に出して言えない。
ああ、桜井の打ったサーブが青い空に浮かんでるよ……あはは。
もう立ち上がる気にもなんねえ。
ボールがだんだん落ちてくる……。
【渉】「ううっ」
俺の股間にボールヒット！
思わず俺は股間を押さえながら飛び上がった。
【渉】「なにすんだよ！」
【明日香】「寝てるのが悪いんじゃん」
【沙羅】「渉も元気になったみたいだし、試合続行よぉん！」
【渉】「続行できるわけないじゃないですか！」
【沙羅】「アタシに逆らう気？　ちなみに棄権は認めないわよ」
【渉】「チクショー、彰人立て、立たないと、嬢王様に殺されるぞ！」
俺の声に反応して彰人がゆっくり立ち上がる。
【彰人】「……嬢王様に殺されるか、過労死かだな」
【渉】「俺だったら過労死を選ぶ」

【彰人】「俺もだな」
無理やり闘志を奮い立たせ、俺と彰人は試合に向かった。
試合は散々な展開で、完全に負け試合だった。
けれども、試合放棄はできなかった。
チラリと横を見ると嬢王様が、パラソルの下でビーチチェアーに座りながらこっち睨んでるし。
【明日香】「もっとちゃんとやってくんないとツマンナイ」
【渉】「ちゃんとやってるわボケ！」
【明日香】「ボケってなによ、ボケって！」
ぐあっ！！
明日香の強烈なレシーブが決まり、俺の顔面に直撃！
【渉】「ワザとだろ今の？」
【明日香】「あたしそんなに器用じゃないもん」
すっとぼけた顔しやがって……そんな表情も可愛いぞ！！
得点差は5対14で、あっちがあと1点入れてくれれば、この地獄から開放される。
【沙羅】「あ、そうそう言った思うけどぉ、決勝戦は21点先取だから」
なんですとーっ！！
【彰人】「……聞いてないよな」
【渉】「知るか、言ったんだよきっと！」
【彰人】「俺に当たるなよ」
……あのルールブックが全部悪い……なんてことは口が滑っても言えない……けど叫びたい。
大丈夫だ、俺。
落ち着け、落ち着けば、火もまた涼し……なんてことあるか！！
しかも、暑いんじゃなくて、体力の限界なんだし。
俺っていっぱいいっぱい。
いや、大丈夫……だよな俺？
あと、7点取られれば負けれるんだから平気！

でも、ある程度真剣にやんないと嬢王様の目が……。
【彰人】「余所見してんな渉！」
【渉】「ぐあっ！」
また顔面ヒット！
【渉】「もう吹っ切れたぞ！」
桜井がトスを上げたところで俺がネットに向かって走る。
【渉】「ここでブロック……だぁ！？」
レシーブを放とうとした雪乃がジャンプした瞬間、雪乃の水着の紐が！？
【雪乃】「あら？」
ボールが３つ！？
放たれる強烈なレシーブ！
【渉】「ぐえぇ！？」
鼻血がどびゅ～～～～～っ！！
顔面に強烈な一撃を受けた俺は、たわわに揺れるボールを見ながら意識を失った。

……ここはどこだ！？
あ、俺が借りてる部屋か……。
顔面にボールの直撃を受けて気を失って、誰かがここに運んでくれたのか……。
コンコン！
【彰人】「俺だ、入るぞ」
彰人が寝室のドアを開けて入って来た。
【彰人】「起きてたのか」
【渉】「ああ、今起きた」
【彰人】「それにしてもよく寝てたな……俺の苦労も知らずにな」
【渉】「苦労ってなんだよ、苦労ってさ」
【彰人】「俺より先におまえが気絶したせいでな、あのあと俺はひとりでビーチバレーやったんだよ」

【渉】「それはそれはご愁傷様で……」
よかった気絶して。
【彰人】「気絶して助かったなんて思ってないだろうな」
【渉】「ギクッ……そんなこと思ってるわけねーじゃんかよ」
【彰人】「思ってんだな……俺の性格知ってるだろ？」
【渉】「案外、根に持つタイプ」
【彰人】「わかってるならいいんだ」
……いや、よくない。
彰人のことだから直接手を出してくることはないけど、トラブルに巻き込まれて時に笑顔で見捨てられそうだ。
【彰人】「今日は和室の大広間で飯食ってる早く来いよ」
【渉】「昨日は洋室で洋食だったよな。今日は和室で和食ってことか……って昼飯食ってねぇ！！」
【彰人】「おまえ寝てたからな」
【渉】「あ、そうそう、ところでビーチバレーはどっちが勝ったんだ？」
【彰人】「聞くなよ、わかってるだろ……勝った」
【渉】「ウソだろ！？」
【彰人】「ウソだよ」
【渉】「……だよな」
【彰人】「さっさと行くぞ、飯。でも、おまえ着替えろよ水着」
【渉】「おぉっ、水着のままだ。言われなかったら気づかなかった」
【彰人】「じゃあ、言わなきゃよかったな。部屋の外で待っててやるから、さっさと着替えろよ」
【渉】「先行ってていいよ別に」
【彰人】「屋敷の中で白骨死体になっても知らないぞ」
白骨死体とまではいかないけど、この屋敷をひとりで勝手に歩いたら確実に迷うな。
【渉】「すぐ着替えるから待っててくれ」
【彰人】「じゃ、廊下でな」

彰人が部屋を出て行ってから、俺は即行で着替えを済ませた。
なんだ……この有様は！？
美味そうな海鮮料理はさて置き……その横に転がるお酌とか一升瓶とか……。
酒臭いし、みなさんお顔が赤いようで……飲んだんですか！？
【彰人】「俺が目を放した隙に……」
【渉】「……見事に全員酔ってるな」
真央はなんか号泣してるし。
【真央】「真央が悪いんですぅ。真央は悪い子だから、日本の治安はどんどん悪くなるし、景気は回復しないし、金利だって上がらないんですぅ」
……随分と社会的な話だな。
誰かが喚いてると思ったら、嬢王様は一升瓶から直接飲んでるし。
【沙羅】「酒持って来い、酒はまだぁん！」
【刹那】「サケがないだけに、サケぶ嬢王様……ククク」
寒いぞ刹那。
しかも、刹那ってば寝ながら飯食ってないか……壁を話し相手に。
この場でまともなのは雪乃と桜井だけか？
いや、雪乃のようすが可笑しいぞ……なんか呟いてる。
【雪乃】「エコエコアザラク、エロイム・エッサイム、マハリク・マハリタ・ヤンバラヤンヤンヤン、テクマク・マヤコン……お姫様になぁ～れ！」
急に立ち上がった雪乃がテーブルの上でクルクル回って……踊ってる……舞踏会か！？
やっぱまともなのは桜井だけか……顔赤いけど……？
【明日香】「……おい麻生！　こっち来てお酌しろぉ～」
十分酔ってるな。
【沙羅】「酒はまだなのぉん！　彰人ったら突っ立てないでさっさと酒持って来なさぁ～い！」

【彰人】「はいはい」
【明日香】「麻生ク～ン、早くこっち来いよバ～カ！」
【真央】「ごめんなさい、ごめんなさい、世界が平和にならないのは真央のせいなんです。だから、ここで一曲歌いま～す！」
【刹那】「腐っても鯛だけに……腐った鯛なんて食えるか！」
突然刹那がテーブルを引っくり返して、料理が滅茶苦茶にぶちまけられる……ちゃぶ台返しか！？
ぶっ飛んだ料理を華麗なステップで避けた雪乃が俺の傍に来る。
【雪乃】「さあ王子様、一緒に踊りましょう！」
王子様って俺かよ！？
雪乃の手を捕まれた俺はそのまま……宙を舞った！？
背負い投げか！！
【渉】「いててててて……腰打った」
【雪乃】「まだまだ踊りたいないわ！」
【渉】「今のどこが踊りだよ！」
【雪乃】「さあ、レッツダンシングナイト！」
【渉】「意味不明だよ！」
逃げようとする俺の腕を雪乃が掴む。
ヤバイ投げられると思った瞬間、もう片っぽの腕も掴まれた。
【明日香】「あたしと酒飲むんでしょ。それともあたしの酒は飲めないって言うの！」
【雪乃】「王子様はこれから私と晩餐会に行くのよ！」
【渉】「意味わかんねえよ」
っていつの間に俺の前で真央が正座してるし？
【真央】「真央が悪いんです。お代官様許してくだ～さい」
【渉】「俺に向かって土下座されても困るから。しかも、お代官様じゃないし」
【雪乃】「そうよ、この人は私の王子様よ！」
【刹那】「バカ王子、バカ王子……ククク」
刹那のヤロウ生け作りになってるお魚さんと話してるし。

【沙羅】「アタシの理論を聞きなさ～い！」
……無理だ。
俺には事態を収拾することはできない。
ヘルプミー！
つーか、彰人どこ行ったんだよ。
ちょうどそこに酒を大量に運んできた彰人が帰ってきた。
【彰人】「……」
思わず現状を見て黙する彰人。
【彰人】「……ここに酒は置いときますから。俺は風呂入って寝ます」
逃げた。
彰人は逃げた。
ここで俺を置いて逃げやがった。
俺たちの友情はウソだったのかぁーーーっ！！
大量に運ばれてきた酒を見て嬢王様の目が爛々と輝く。
【沙羅】「渉も飲んで呑まれるのよぉん！」
【渉】「ううっ、ごほっ、うげぇ……」
一升瓶の2本構えた嬢王様が、1本の一升瓶を俺の口の中に無理やり押し込めてきた。
余計なお世話的に雪乃が俺の鼻を摘み、桜井が口を押さえて一升瓶が出ないようにする。
【渉】「ううあ……うぇあ……」
どんどん俺の口の中に液体が流れ込んで来る。
口と鼻を塞がれてるから強制的に一気飲みで、よい子はマネしちゃダメよ状態。
マジでこのままだと息できなくて死ぬ！
俺は周りの奴らを振り払おうとしたが、刹那がいつの間にか俺の手を掴んで『せっせせーのよいよいよい♪』って遊んでる場合かーっ！
無理やり俺は周りの奴らを蹴散らして、部屋の隅っこにダッシュ

で逃げた。
【渉】「ふはっ……死ぬかと思った！」
って部屋の隅っこに逃げてどーんだよ俺！
逃げ場ないだろ！！
【沙羅】「アタシの酒が飲めないっていうのぉん！」
【渉】「そういう問題じゃないし」
【雪乃】「私の王子様ぁん！」
【渉】「幻想の産物だ」
【真央】「真央が謝りますから、みなさん核放棄してください」
【渉】「真央ちゃんが謝って済む問題なら、もっと世の中平和だし」
【刹那】「きゃはははははは……」
【渉】「無表情のまま笑うな、マジ怖いから」
【明日香】「麻生のクセしてあたしのことが嫌いなの！！」
【渉】「……別にキライじゃないけどさ」
5人の酔っ払いどもが一斉に俺に飛び掛ってきた。
俺は逃げる術もない。
【渉】「ぎゃぁぁぁぁっ！！」
【沙羅】「とりあえず服を脱がせるから、みんな手伝いなさい！」
【渉】「うわっ雪乃！　俺のベルトに手を掛けるなって、っ言ってるそばから俺の上着脱がすの止めろ真央ちゃん」
【刹那】「ぴろろろろろ～ん」
【渉】「いい加減、無機物と会話するの止めろよ刹那……って桜井放れろ！」
【明日香】「麻生の身体ぽかぽかするぅ」
桜井が俺の身体に抱きつくというか、すごい怪力で身体を締め上げて、桜井の確かにそこにある胸が……胸が当たってるから。
【渉】「ううっ……苦しぃ……」
巨大な肉塊……もとい、巨大な嬢王様の胸が俺の顔を押し潰して息が……。
女子の執拗な攻めに遭い、辱められている俺って構図を考えるだ

けで……ヤバイ……下半身が反応しそうだ。
落ち着け、落ち着け俺！
こんなところで下半身が反応したらシャレにならんぞ。
無の境地だ！
邪念を棄てろ！
煩悩よ、頼むから消えてください。
って考えることが逆効果に……。
【沙羅】「さぁて、どっちがいかしらぁん？」
どっちって？
嬢王様が両手に持ってるの、どっちも一升瓶でしょ？
違う点があるとしたら銘柄くらいなもんで、結局はアルコール。
【沙羅】「２本一気にいっちゃおうかしら！」
【渉】「俺を殺すかーっ！！」
……あっ？
部屋の電気が消えた。
停電か？
……逃げるチャンス到来！！
暗闇の中で俺は周りのやつらを振り払って逃げようとした。
【真央】「うわぁ、真央の頭叩いたの誰ですかぁ？　真央が悪い子だからお仕置きだれたんですかぁ。ごめんなさい、ごめんなさい」
たぶん、叩いた……つーか、蹴ったの俺。
【雪乃】「イヤッ……誰、私のお尻撫でたの？」
撫でたんじゃなくて、ちょっと当たっただけだろ！
【明日香】「キャッ！？　あたしの胸を誰かが触った！」
不可抗力だが、バレたら殺されること間違いなし。
つーか、出口どこだよ！！
ぐわっ！！
弾力性のある巨大な何かが顔に！？
【沙羅】「いやぁん♪」
嬢王様の胸か……。

じゃなくって、電気がつく前に逃げないと……。
俺はとにかく手探りで壁伝いに歩き、暗い闇の中で騒いでる声からだいぶ遠ざかった。
【渉】「……おっ」
電気がついた。
辺りを見回すと、途方もないくらい長い廊下だった。
どうにかあの部屋からは逃げ出したらしい。
【刹那】「きゃはははは……」
【渉】「うわっ！？　刹那？」
【刹那】「きゃはははは……」
【渉】「頼むから無表情のまま奇声を発しないでくれ、かなり怖い」
【刹那】「きゃはははは……」
刹那の手が俺の腕に伸び、俺は間一髪で刹那から逃げた。
【刹那】「きゃはははは……」
ヤバイ……逃げた方がよさそうだ
【刹那】「きゃはははは……」
俺がダッシュで廊下を駆け抜けると、後ろから刹那が奇声を発しながら追ってくる……無表情のまま。
【刹那】「きゃはははは……」
【渉】「これってホラー映画かっ！！」
【刹那】「きゃはははは……」
【渉】「誰か助けてぇーっ！！」
【刹那】「きゃはははは……」

昨日は散々な目に遭ったな……。
あの後、俺は屋敷中を走り回って刹那の魔の手から逃げるハメになって……。
真夏の夜のホラー体験をしてしまった。
……思い出しただけで身震いするな。
【雪乃】「……麻生君……おはよう……」

【渉】「おはよ。おまえ顔が青いぞ」
【雪乃】「なんだか……よくわからないんだけど……頭がガンガンして……」
【真央】「おはようございますぅ……ううっ」
【渉】「真央ちゃんも気持ち悪そうだな」
【明日香】「……昨日の記憶がない」
【渉】「あのさ、君ら昨日の夕飯の記憶全部ないとか？」
【雪乃】「ないわ」
【真央】「ありませぇ～ん」
【明日香】「なにかあったの？」
【渉】「……覚えてないならいい」
【刹那】「ボクは全部覚えてるよ」
【渉】「うわっ！？」
いつの間にか俺の背後に立ってた刹那。
人に忍び寄る能力忍者並み。
【刹那】「どこら辺を話せばいいの？　嬢王様が渉クンに一升瓶をくわえさせたとこ？」
【渉】「わざわざ封印された記憶を掘り返すな。つーか、俺との追いかけっこも記憶あるのか……っていうか、ワザとかよ！」
【刹那】「記憶はあるけど、ワザとじゃないよ。そんなまさか、良識のあるボクがチェーンソーを持って渉クンに襲い掛かるわけないじゃないか」
【雪乃】「チェーンソー？」
【渉】「その件には触れないでくれ……。俺が言えることは、壮絶なバトルロワイヤルがこの屋敷で繰り広げられたってことだけだ」
【刹那】「楽しかったよねぇ～」
【渉】「楽しくねえよ」
こっちは死ぬ気で逃げてたんだから。
【真央】「ううっ……気持ち悪いですぅ」
【雪乃】「大丈夫、真央ちゃん？」

【真央】「ううっ」
口を押さえて真央が猛ダッシュで走り去る……きっとトイレ直行で……。
【刹那】「さてと、みんな朝食はどうするかい？　みんな気分悪そうで食べる気なしって感じだけど？」
【雪乃】「私は遠慮するわ。あと、真央ちゃんのあんな調子じゃ無理じゃないかしら？」
【明日香】「あたしもパス」
【刹那】「じゃ、朝食はなしって調理人たちに連絡してくるよ」
【渉】「いや、俺は食うって。あと彰人の意見も」
【明日香】「みんな食べないって言ってるんだからワガママ言うな」
【渉】「ワガママとかそーゆー問題かよ」
【雪乃】「私は真央ちゃんのようすが気になるから見てくるわね」
【刹那】「ボクも料理人に言いに行くよ」
雪乃と刹那が歩き去っていった。
この場に残された俺と桜井。
【明日香】「ああ～っ、吐き気もする」
【渉】「だいじょぶかよ？」
【明日香】「これが大丈夫そうに見えるなら、いっぺん死んで来い」
『大丈夫？』って聞くのは社交辞令っていうか、気遣いの問題だろうが。
【明日香】「ちょっと外の空気吸ってこよっと」
【渉】「男も行くよ」
【明日香】「来なくていい、空気が汚れる」
【渉】「汚れるってなんだよ、そんなに口臭くないぞ」
【明日香】「気分的にイヤ」
……それって存在否定ですか？
機嫌悪いのか気分悪いのか、よくわかんない表情で桜井は歩き去ろうとした。
【渉】「俺も行くって」

【明日香】「もう好きにすれば……」
よし、このまま二人っきりでいい展開に発展させるぞ！
海岸線の舗装された道を歩く桜井の後ろを俺は適当な会話をしながらついて行った。
【渉】「綺麗な海に青い空。解放的な気分になるよなぁ」
【明日香】「あたしの前歩いてくんない？」
【渉】「なぜに？」
【明日香】「解放的な気分になられたら困るから」
【渉】「……俺がおまえのこと襲うとでも思ってるのかよ！」
【明日香】「うん」
現実でそんなことするかよ。
ヤルとしてもモーソーの中だけだ。
突然、俺のことをキツイ目で見る桜井……心を見透かされたか？
【明日香】「……今変なこと考えてたでしょ？」
【渉】「とんでもない」
【明日香】「早くあたしの前歩け」
【渉】「はいはい」
ったくワガママ娘だぜ。
つーか、いつの間にか俺は桜井に尻を敷かれる存在になったんだ？
生まれた時から？
宿命ってやつだな。
あと、嬢王様に俺が逆らえないのも生まれた時から決まってる宿命だな。
そう、因果応報ってやつだ。
……って因果応報ってなんだっけか？
【渉】「なあ、桜井？」
【明日香】「なに？」
うわっ、いきなり機嫌悪そうに返事返されたし。
【渉】「あのさ、因果応報ってどんな意味？」

【明日香】「前世の行いが現世に影響すること」
【渉】「へぇ、そんな意味だったんだ。ってなんで俺の前歩いてるんだよ！」
【明日香】「……別に」
先に行けとかいいながら、前歩いてるし。
つーか、さっき襲う襲わないみたいな会話してたから、妙に意識しちまう……。
目が……目がどうしても前を歩く桜井のケツに……。
急に振り向いた桜井。
【明日香】「今あたしのお尻見てたでしょ？」
【渉】「見てない見てない」
【明日香】「ホントにぃ？　嫌な視線感じたんだけどぉ？」
【渉】「見てたよ、見てましたよ、見ちゃわるいのかよ！」
【明日香】「意味不明な逆ギレしないでよ！　見たいなら見ればいいでしょ、どーぞ、ほら見なよ！」
【渉】「おまえこそわけわかんねぇキレ方すんなよ」
【明日香】「もぉ知らない！」
【渉】「あっ！」
走り去ろうとする桜井の腕を俺は反射的につかんだ。
【渉】「待てよ」
【明日香】「放してよ」
【渉】「意味わかんねえよ、おまえ」
【明日香】「それはこっちのセリフ」
【渉】「はぁ？」
【明日香】「だって二人っきりだと、なに話していいかわかんないんだもん」
【渉】「はぁ？」
バツの悪そうな表情をする桜井。
逃げる様子もない桜井の腕をゆっくりと放した俺は、ため息を付きながら歯がゆい気持ちになった。

【渉】「桜井って俺のこと好きなのか？」
相手を滅殺するような目つきで桜井が俺のこと睨んだ。
うわっ！？
やっぱ俺の勘違いでしたか？
俺の自意識過剰でしたか？
ニアミスすらしてませんでしたか？
【明日香】「……」
【渉】「睨んだまま黙るなよ」
【明日香】「……勘違い男サイテー」
【渉】「ぐはっ！？」
やっぱ俺の勘違い？
いやいや、今までの桜井の言動やらを解析すると、少なからずとも俺に好意を持ってるような……持ってないような？
【渉】「……俺のこと好きなんだろ？　俺も桜井のこと好きだ」
【明日香】「……」
【渉】「あの広大な海に俺は叫ぶぜ。俺は桜井が好きだぁーーーっ！！」
桜井の目が光った。
【明日香】「……死ね」
ドゴッ！！
ぐあっ！！
桜井の回し蹴りが俺の腹に直撃……。
腹を押さえてうずくまる俺を見下す桜井。
【明日香】「ウザイ。勘違いも大概にしてよ。あたし麻生のことこれっぽっちも好きじゃないから！」
そんなー、そんなー、そんなー……と言葉がエコーした。
俺がはっきりと桜井に好きだって言っちまった手前、これからの桜井との関係が……。
つーかさ、もう一度よく考え直すとさ、どうしても桜井が俺のこと好きなような気がしてならないんだけど……？

嫌い嫌いも好きのうち？
口で嫌いっていうのは照れ隠し？
【渉】「……本当の気持ちで答えてくんねえか？　本気で嫌いだって思われてるなら、俺だってあきらめるけどさ……桜井の態度ってなんかさ……」
本気で嫌いって言われてもあきらめらんねえな。
【明日香】「……しつこい男はキライ。これ以上聞くとキライになるからね」
……これ以上聞くと？
ってことは、今は嫌いではないと？
【渉】「マジっスか？」
俺は嬉しさのあまり桜井の身体に抱きついてしまった。
【明日香】「離れてよ」
【渉】「マジで嬉しいんだよ……あっ？」
桜井の香りが……じゃなくって、桜井のうなじに光るチェーン……？
俺は桜井の首にあるチェーンを摘んで引っ張った。
【明日香】「きゃっ、くすぐったい」
【渉】「これってさ」
引っ張ったチェーンの先にはハートペンダントがあった。
【渉】「俺が買ってやったペンダントじゃん？」
【明日香】「やっ、あっ、違う！」
急に慌てた桜井は顔を真っ赤にして俺から離れた。
【明日香】「違うってば」
【渉】「違うってなにが？　俺もつけてるぜ、ほら」
俺は襟首からハートペンダントを出して桜井に見せる。
すると、桜井の顔がもっと赤くなった。
【明日香】「な、なんでつけてんの！？」
【渉】「だって、俺と桜井の唯一の絆だし……つーか、おまえこそなんでつけてんだよ？」

【明日香】「……べ、別に！」
あの桜井がすごく動揺してるように俺には見えるのだが……？
【渉】「別にじゃないだろ」
俺は桜井に詰め寄って、桜井のつけてるペンダントをまじまじ見つめた。
【渉】「これってやっぱし俺が買ったやつだよな？」
【明日香】「違う、違うって！」
【渉】「ちゃんと見せろって！」
【明日香】「ダメ！」
【渉】＆【桜井】「あっ！？」
桜井のペンダントを俺がつかんだ瞬間、チェーンがブチッっと千切れて、その反動で俺の手からペンダントが！？
【桜井】「早くつかんで！」
【渉】「クソッ！」
ポチャン。
海の中に落ちた。
ペンダントが海の中に落ちて沈んでいった……。
【渉】「……ごめん」
【明日香】「別にいい、大切なものじゃないし」
大切なものじゃないと口で言いながらも、桜井は少し寂しそうな顔をしていた。
【渉】「……ごめん」
俺はいても立ってもいられくて、飛び込んじゃった……えへっ。
ジャバーン！
【明日香】「麻生！」
俺は海の中に飛び込み、ペンダントを探そうとした……が、無謀！？
砂浜沿いの海ならまだしも、ここって舗装された道路沿いの海の中。
つまり、水深いくつだよ！！

俺は水の中に飛び込んだものの、すぐに水面に顔を出した。
【渉】「……ぷはぁ」
【明日香】「……ばかじゃないの」
桜井のすごく冷たい視線。
『頑張って』とかじゃなくて『……ばかじゃないの』ってさ。
『ばか』っていわれたら、もう引くに引けねえ。
根性で見つけたる！！
俺は大きく息を吸い込んで、もう一度、海の中に飛び込んだ。
水深はそれほどない……だいたい6メートルくらいだと思う。
そして、せめてもの救いは海の水が澄んでいて下までよく見えるってこと。
トロピカルな色の魚たちが泳いでるなぁ～。
ああ、楽園！！
……じゃなくって、ペンダント、ペンダント。
見つかるかよ！
いくら海が澄んでて見通しがよくたって、海は広いな大きななんだよ！
が、ここで負けるわけにはいかない。
俺は気合と根性と根気の体力勝負でペンダントを見つけてみせる！
でも、息が続かなくなってきた……そろそろ上がろうかな……なぁっ！
見っけた！
あったぞ、岩陰にペンダントが……！！
でも、息が……。
でも、上がったら見失うかも。
でも、息が……。
でも……。
俺は意識朦朧としながら、結局ペンダントの場所まで泳ぎ、岩陰にあったペンダントに手を伸ばした。
……意識が遠のく。

……あと、少し。
視界が白くなっていく……。
あっ、ここでペンダントを取っても、海面まで上がる酸素まで計算に入れて……あはは。
俺っておバカさん♪
俺の意識は完全に白い世界に呑み込まれた……。

ああ、天井。
そして、桜井の顔。
【渉】「え……桜井の顔？」
【明日香】「あたしの顔で悪かったわね」
【渉】「別にそんな意味じゃなくって」
俺はベッドから状態を起こして見回した。
すると、桜井の他に刹那もいた。
【刹那】「おはー渉クン」
【明日香】「刹那が溺れた麻生のこと助けたんだよ」
【渉】「あー、そうなんだ。サンキュ刹那」
つーか、どうして刹那があの場所に……？
そんなことよりも……。
【渉】「ペンダントは？」
【明日香】「麻生が気失いながら、ずっと手に握ってた」
桜井の首にはハートペンダントが光っていた。
【渉】「……よかった。ところで今なん時？」
【刹那】「お月様が空に浮かぶ時間」
【渉】「マジで！？　朝飯も食ってないのに……」
【刹那】「今夜は野外でバーベキューだよ」
【渉】「肉かぁ。たらふく食ってやる！」
【刹那】「最高級の和牛を日本から空輸してもらったり、他の食材も世界中から空輸して取り寄せたよ。あ、それから嬢王様が今晩、肝試しするって言ってたよ」

【明日香】「聞いてない」
【渉】「まあ、嬢王様が思いつきそうなイベントだけどな」
【明日香】「あたしあの先生の考えてることわかんない」
【渉】「突発的な思い付きなようでも、凡人にはわからないなにかがあるん……いや、思い付きかも」
ふと、俺は刹那の顔を見た……。
刹那と嬢王様……似てるのか？
も、もしや親子！？
んなわけないな。
刹那って謎の学園長（俺は声しか聞いたことがない）の息子だし、嬢王様だって刹那くらいの子供がいるような歳でもないだろうし……年齢不詳だけど。
【渉】「そんなことより、飯食いに行こうぜ……？」
って誰もいねえ！！
薄情な奴らだ。
クソッ、俺の肉は渡さんぞ！！
俺はベッドから飛び起きて肉に向かって走り出した。

【渉】「この肉マジうめえ！」
【彰人】「朝昼食ってないからって、口の中に詰め込むなよ」
【渉】「うぐっ……ううぅ……苦しぃ」
【真央】「麻生さん飲み物です！」
真央からもらった飲み物を一気飲みして口の中の物を流し込んだ。
【渉】「……ぷはぁ」
【沙羅】「今のアタシの酒よ」
【渉】「えっ？」
【沙羅】「アタシの酒。アタシの、アタシの、アタシの酒よ！」
嬢王様ってば目が据わってる。
【沙羅】「酒の恨みは末代まで祟るわよぉ～ん」
酔ってるよ、すでにこの人酔ってるよ。

【渉】「事故です、事故ですから、落ち着いて落ち着いて」
【真央】「真央がいけないんでぅ。真央が麻生さんに渡したから」
【彰人】「食べ物を喉に詰まらせるような食べ方をしてる渉が悪い」
【真央】「やっぱり真央が悪いんですぅ」
【雪乃】「まあまあ上條先生、新しいお酒をどうぞ」
嬢王様に新しいお酒を渡す雪乃のナイスフォロー。
でも、これ以上、嬢王様に酒を飲ませるのも問題があるような……。
【沙羅】「それじゃん、スイカ割りするわよぉん！　渉を砂に埋めなさぁ～い！」
【渉】「はぁ！？」
固まる一同。
昨晩のノリだったらみんなに地中に埋められてたけど、今日はみんな素面だもんな。
【刹那】「おもしろそうな企画だね！」
【渉】「オイッ」
さわやか笑顔を浮かべながら刹那が俺の腕をつかんだ。
……う、埋められる！？
【渉】「やめろよ！」
【刹那】「さあ、大地のパワーを全身に！」
【渉】「意味わかんねえ！」
刹那が俺の身体の自由を奪い、刹那お抱えのシャベルを持った黒子がどこからか現れた。
この場所にやって来た黒子軍団は、あっという間に人が埋まる程度――つまり俺が埋まる程度の穴を掘り、刹那がポイッっと粗大ゴミを捨てるように俺を穴の中に放り投げた。
【渉】「マジで人を生き埋めにする奴がどこにいんだよ！」
……ここにいた。
俺は命の危険を感じ、穴の中から這い上がろうとしたが、黒子軍団が刹那の指示のもと、スコップで次から次へと俺に砂をぶっかけ

てきた。
【渉】「うわっ……うぎゃ……うごっ！」
そして、俺の抵抗も虚しく、スッポリ俺の身体は頭を残して砂に埋められてしまった。
【沙羅】「さぁってん、トップバッターはアタシよぉん！」
アンタがトップバッターかい！
ってすでに目隠しして手には……釘バッド！？
【渉】「ちょっと待った、嬢王様。普通のバットでも死亡率８０パーセントくらいだと思うのに、釘バットじゃ１００パーセント死亡でしょ！　せめて、大根とかしてくれません？」
【刹那】「大根じゃリーチが短いからね。空振りもいいところだよォ」
【渉】「余計なこと言うなよ！」
大根にしてくれれば死なずに済んだのに。
【彰人】「でもな、このままだと渉がマジで殺されそうだからな……」
【雪乃】「釘バットの代用品を探さないといけないわね」
【渉】「釘バットの代用じゃなくて、俺の代用としてスイカを用意しろよ！」
【真央】「あ、あのぉ、こんなことしたら麻生さんが可哀相だと思うんですけどぉ……ねぇ明日香さん？」
【明日香】「……別に」
冷たいぞ桜井！！
【渉】「刹那！　お前の力で巨大スイカでもなんでもすぐに用意しろよ！」
【刹那】「う～ん、今からスイカを用意するとなると、１時間くらいは欲しいかな……？」
【渉】「そーゆーわけです嬢王様。１時間ほど待ってください」
【沙羅】「イヤよ」
【真央】「でもぉ、麻生さんが死んだら悲しいですぅ」

悲しいとか、そーゆー問題じゃなくて、殺人だろ殺人！
【沙羅】「死んだら死んだで、そん時はそん時で頑張ってアタシが生き返らせるから平気よ！」
頑張るって！！
死人を生き返られるのって頑張るとかいう次元の問題じゃないでしょ！
【沙羅】「アタシの辞書に不可能の文字はないわ！　あるとしてもふとした失敗ね。だから安心しなさい」
【渉】「安心できるかーっ！！」
俺が叫び声を上げるなか、モクモクと上がる煙を見て雪乃が他人事のように言った。
【雪乃】「あら、お肉から煙が上がっているわ」
【彰人】「早く食べないと肉だ駄目になりますよ先生？」
【沙羅】「そうね、人間スイカ割りはやめにして、食事の続きをしましょう」
【刹那】「デザートには冷えたスイカも用意してあるよ」
【渉】「スイカあるんじゃねぇか！！」
と俺の叫びも虚しく、みんなは食事に戻ってしまった。
……生き埋めにされたままの俺。
【渉】「まだ昼食の分、食ってねぇ！！」

俺が掘り起こされた頃には、当然のごとく夕食は終わり、みんなはデザートまで食い終えていた。
そして、ひと休憩置いたところで嬢王様が肝試しの話をはじめた。
【沙羅】「じゃあ、ペア決めをするわよぉん」
嬢王様が白衣のポケットから取り出したのは、不透明のコップとそれに突き刺さった割り箸数本。
【沙羅】「割り箸の先に赤・青・黄色で着色してあるから、みんな一本ずつ心を込めて引きなさい」
心を込めるってところが意味不明。

いや、桜井とペアになれるように心を込めるべきか。
【渉】「そんじゃ、俺が一番初めに」
【刹那】「いやいや、ボクが一番だよ。何事もボクは一番とそう決まっているんだ」
【渉】「そんなの誰が決めたんだよ？」
【刹那】「ばかだなァ、渉クンは。カミサマに決まってるじゃないか」
【渉】「あー、そーですか」
【雪乃】「それじゃあ、私が引いちゃお」
【渉】&【刹那】「あっ」
【渉】「2番はもらった！」
【刹那】「ボクは2番も愛してる！」
結局、刹那と俺は同時に割り箸を引いた。
まず、一番初めに引いた雪乃が青色、刹那が青色で、俺は赤だった。
【雪乃】「あら、刹那君と一緒ね。宜しくね、刹那君」
【刹那】「こちらこそ宜しく。実はボク、雪乃クンのことも好きなんだ」
……浮気性。
すでに1つペアが決まったことで、俺と桜井がペアになれる確立アップ！
【真央】「次は真央が引きま～す！」
真央が引いたのは黄色だった。
よっしゃ、これでまた確立アップ！！
あとは彰人と桜井だけで、残る割り箸は2本。
つまり、次でペアが決まってしまう。
【彰人】「桜井さん、先に引く？」
桜井が無言で首を降ると、彰人が割り箸に手を掛けた。
黄色を引け、黄色を引け、黄色を引けったら引け、引きやがれ！！
と俺が心の中で呪文を唱えると……？

【彰人】「黄色だな」
よっしゃ！
【明日香】「あたし肝試しなんてやんない」
ガーン！
天国から地獄に叩き堕とされた気分。
【明日香】「麻生となんか二人っきりになったら、なにされるかわかんないもん」
【渉】「なにもしねぇよ！　つーか、したことないだろうが！」
【明日香】「未遂ならいっぱいあったと思う。エッチな目であたしのこと見てたり」
……それは否定できない。
モーソーの中でいろいろしても……現実でできるか！
【雪乃】「麻生君ったら、明日香をそんな目で……ふふふ」
【刹那】「……マイハニーが汚されたァ」
【渉】「誤解だーっ！！」
【沙羅】「誤解だろうが、有罪だろうが、市中引き回しだろうが、ペアが決まったんだから、さっさと肝試しやるわよ」
【明日香】「だから、あたしは――」
【雪乃】「まあまあ、そんなこと言わないでね」
【明日香】「ヤダ」
【雪乃】「みんなで楽しくやりましょうよ」
【明日香】「ヤ～ダ」
【真央】「ええっと、明日香さんが参加してくれると、真央とっても嬉しいですぅ」
【刹那】「明日香が参加しない肝試しなんて肝試しじゃないよ。ホラーには華が付きものって決まってるじゃないか」
【彰人】「桜井さんが入らないと人数が合わなくなるしな」
【雪乃】「ほら、みんなもこう言っているのよ」
【明日香】「イヤったらイ～ヤ～だ！」
【渉】「相変わらず桜井ってワガママな性格してんよな。そういう

協調性のない性格は直した方がいいと思うぜ」
【明日香】「アンタに言われたくない」
【雪乃】「……明日香ったら、本当に強情ね」
冷たく激しい風が吹き荒れた。
俺は知っている。
この空気ってか、感覚ってか、雰囲気……頭じゃない、身体が覚えてる。
なにかが静かにキレる音が聞こえたような気がした。
【雪乃】「……私は明日香のこと大好きだし、大切なお友達だと思っているわ……でもね」
雪乃が明日香に向かって微笑んだ、
でも、なんか違う。
雪乃の微笑みは冷笑だった。
【雪乃】「この際だから言って置くけど、明日香の性格って最低なところがいっぱいあるわよ……ふふ」
いちよーここは常夏の孤島で、夜は爽やかな涼しさなハズなんだが、この時この瞬間は北からの海風が吹いたのか、とっても寒い。
この異様な雰囲気を感じているのは俺だけではあるまい。
ここにいた全員および、半径１０メートルくらいにいた草木や、どっかに隠れているであろう刹那お抱えの黒子軍団もだと思う。
涼しげな沈黙が場を包み、少し間を置いて雪乃が口を開いた。
【雪乃】「ざけんじゃねえよ！　アンタ何様のつもり？　みんなの気も知らないでワガママ言ってんじゃねぇよ！」
……一同口をポカンとあけて沈黙。
……。
……。
【真央】「ゆ、雪乃さん！？」
【彰人】「……マジ？」
【沙羅】「ついに本性を出したわねぇん」

【明日香】「ゆ、雪乃！？」
【雪乃】「はァン？　気安く呼び捨てしないくれる？」
【明日香】「え……雪乃……だよね？」
雪乃を前にして、雪乃ですかと聞く桜井の混乱よう。
きっと桜井は裏雪乃を見たの初めてなんだろうな。
俺も今の今まで裏雪乃の存在を記憶の彼方に忘却してたっていうか、記憶に頑丈なカギをかけて封印してたんだけど、どうやら封印が解けちまったらし。
【雪乃】「アタイはアタイ決まってんだろ？」
雪乃が桜井の襟首に掴みかかった。
つかまれた桜井はきょとんとした表情をして、イマイチこの展開についていけてない様子。
【真央】「あ、あのぉ、やめてください雪乃さん」
【雪乃】「んだと、チビは黙ってろ」
【真央】「あわわ、ごめんなさい、ごめんなさい、真央がチビでグズでノロマだからいけないんですぅ」
誰も真央がチビでグズでノロマでマヌケですっとこどっこいのおたんこナスなんて言ってないんだけど、被害モーソー激しすぎ。
【刹那】「それ以上マイハニーに手を出だしたら、僕が容赦しないよ雪乃クン？」
【雪乃】「望むところだ、かかって来いや！！」
【沙羅】「どっちが勝つか賭けしましょうか？　一口1万円でどうかしらぁん？」
そうじゃなくって、誰か止めろよ……俺は無力でか弱いから無理だけど。
【明日香】「放してよ雪乃！」
【刹那】「マイハニーを放すんだ雪乃クン」
過去の記憶を解き放ってよく考えろ俺。
度々プッツンした雪乃を元に戻す方法がなんかあったハズだ……たぶん。

【雪乃】「かかって来いや！」
【真央】「ダメですよ刹那さん、雪乃さんにかからないでくださいよぉ」
【沙羅】「刹那ちゃ～ん、殺っちゃいなさぁ～い」
【彰人】「刹那、絶対に神楽さんに手を出すな。神楽さんも早く桜井さんを解放して」
【雪乃】「ヤナこったね！」
【明日香】「もぉ、雪乃ったらどうしちゃったの！？」
なにか方法があったハズなんだけど……思い出せない。
そうだ、呪文だったような……。
【彰人】「渉！　神楽さんを押えろ！」
【渉】「えっ？」
俺が気が付くと、雪乃が桜井を突き飛ばして刹那に襲い掛かろうとして、前に飛び出そうとしている刹那を彰人と真央が押えている状態だった。
【沙羅】「血の雨が見れそうねぇん♪」
【渉】「呑気なこと言ってる場合じゃないでしょ！」
【刹那】「……ははは、あ～はははははっ、ボクは神だ！！」
ヤベぇ、刹那の〈暴走〉だ。
俺はすぐに刹那に飛び掛ろうとしていた雪乃を取り押さえようとしたが、雪乃に掌底をくらってぶっ飛び、刹那は彰人と真央を振り払って地面を蹴った。
雪乃に向かって踏み込んだ刹那がバク宙をしながら蹴りを放った……ムーンサルトキックだ！！
が、雪乃は逆さになって宙に浮いている刹那の足首をつかみ、そのまま状態を捻りながら刹那の身体を横にぶん投げた！！
【雪乃】「アタイに喧嘩売ろうなんざ、１００年早いよ！」
〈暴走〉刹那がいとも簡単にやられるなんて……。
いや、まだだ、刹那が立ち上がって雪乃に向かって速攻を決める！
【沙羅】「刹那、１００万馬力よぉん！」

そこっ！！　意味わかんない応援しない！
【真央】「あわわ～っ」
ホント『あわわ』な展開だ。
交じり合う拳と拳の肉弾戦……ってアクション映画かこれは！！
【刹那】「ボクは最強！」
【雪乃】「坊やはお寝んねの時間よ！」
【渉】「……！！」
一瞬の出来事でなにがなんだかよくわからんかった……。
ただ、言えることは、雪乃が立ってて刹那が倒れてるってことだけだ。
【雪乃】「最強の称号はアタイのもんよ。さてと、これから明日香にたっぷりお説教したげるからね」
【沙羅】「そ、そんな……まさか、アタシの最高傑作である刹那が負けるなんて……」
最高傑作ってなんだよ！
ってツッコミは今はともかく、雪乃を元に戻す方法は……あっ！？
【渉】「テクマクマヤコン・テクマクマヤコン……普段どおりの神楽雪乃になぁ～れ！」
……スッと雪乃の身体から力が抜け、倒れそうになったかと思うと、雪乃はバランスを整えて目をパチクリさせた。
【雪乃】「あら、ええと、なにがあったのかしら？」
【彰人】「覚えてないのか？」
【雪乃】「もしかして、久しぶりにアレが出ちゃったかしら……。嫌ね、ここ数年アレは出てなかったんだけど……」
……だんだん昔のこと思い出してきたぞ。
確か俺が小学生に上がるちょっと前の出来事だっと思うんだけど、、雪乃と遊んでたら神社の境内にバイクで入って来た数人の高校生がいて……あの時は血の雨が……やっぱり昔の記憶は封印しておこう。
【渉】「刹那は大丈夫か？」

【雪乃】「あらまあ、もしかして私がやちゃったのかしら？」
【明日香】「……うん」
【真央】「雪乃さんが雪乃さんじゃんかったみたいですぅ」
嬢王様は地面に倒れている刹那に慌てたようすで駆け寄った。
【沙羅】「刹那しっかししなさい！」
他人に手を差し伸べるどころか蹴り飛ばす性格の嬢王様が刹那の身を案じてるのか！？
【沙羅】「防護スーツを着ていたのに、こんなダメージを受けるなんて……」
防護スーツって、もしかしてその白い学ラン？
その学ランって防護スーツだったの？
つーか、なんでそんなもん着てるわけ？
【渉】「あの、嬢王様に質問が……」
【沙羅】「うるさい黙ってなさい！　パーツを取り替えて防御力及び攻撃の力の強化……回転数も上げて……」
考え深げな表情をしている嬢王様は、なにかを思いついたように手を叩いて、刹那の身体を軽かると担ぎ上げて走り去って行った。
【渉】「あ、嬢王様！」
【彰人】「……疑問点がいくつかあるんだがな、渉わかるか？」
【渉】「俺に聞くな」
そう、謎は謎のままの方がいいってこともあるのさ。

刹那は嬢王様に担がれて消えたあと、結構すぐに何事もなかったように戻ってきた。
そして、右往左往しながら、どうにか肝試しは開始されることになった。
嬢王様は準備があるとかないとか言って、すでにどこかに消えてしまっている。
【渉】「どのペアから最初に行く？」
肝試しのコースは嬢王様が事前に立てた道しるべ通りに進み、中

間地点に洞窟の奥にある祠で嬢王様のブロマイドを持って、行きとは違う道でスタートまで戻ってくることになっている。
【刹那】「嬢王様から赤・青・黄色ペアの順番で、最初のペアが出発してから15分に次のペアが出発するように言付かってるよ」
【雪乃】「わざわざ細かい指定をして来るなんて、なにかあるのかしら？」
【渉】「嬢王様のことだから大掛かりな仕掛けがあるに違いないと思うぜ」
【彰人】「前々から気になっていたんだが、嬢王様の資本はどこから出てるんだ？」
【刹那】「嬢王様の研究資金はウチから出てるんだよ」
……やっぱり刹那と嬢王様の関係性が気になるが……ここは流した方が良さそうだ。
そう、世の中、知りたくもないヒミツを知っちゃって消されることだってあるんだし。
【明日香】「ところで赤ペアってもしかしてあたしたちのこと？」
【刹那】「うん、割り箸の先の色がそうだよ」
【渉】「ってことは俺らが一番か……」
【明日香】「一番はイヤだけど……仕方ないか」
小さくため息をついた桜井。
なんかいつもと違って聞き分けがいいな。
【真央】「麻生さん、ファイトです！」
【渉】「そんなに気合入れるほどの……いや、嬢王様のことだから気合入れていかないとダメか」
桜井の前で恥かくわけにもいかないしな。
【彰人】「ビビって途中で引き返してくんなよ」
【渉】「嬢王様がどんな仕掛けを用意してようと、所詮は作り物にすぎない。俺のことをビビらせることができるなら、やってみろってってんだ」
【彰人】「ほお、強がるのも今のうちって感じだな」

【雪乃】「明日香をしっかり守ってあげるのよ、麻生君」
【明日香】「こんな奴に守ってもらわなくても平気だもん」
【刹那】「早く出発しないと嬢王様が待ちくたびれて怒り出すよ。はいこれ、懐中電灯だよ」
俺は刹那から懐中電灯を受け取ると、心の中で気合を入れた。
実は俺、おばけとか苦手だったりw
【渉】「じゃ、行くとするか。桜井行くぞ」
【明日香】「……こんな奴と一緒なんて、ユーウツ」
【真央】「二人ともファイトです！」

都会の街中と違って、当然のように当たりはシーンと静まり返り、聞こえる音といったら、俺らの歩く音と得体の知れない虫や動物の鳴き声。
不気味といえば不気味な気もするが、爽やかなこの風、空を見上げれば満点の星、そしてなんていっても桜井と二人っきり。
しかもだ！
肝試しといったら、女の子がキャーとか言って男の腕にしがみ付くのが定番！！
【渉】「ぎゃあ！」
って、なんだ小動物が足元通っただけか。
ったく脅かすなよ。
……あれ、桜井は？
【渉】「桜井～っ？」
俺が辺りを見回すと、桜井が両耳を塞いで地面にしゃがみ込んでいた。
【渉】「桜井？」
【明日香】「きゃっ！」
俺が桜井の肩を軽く叩いただけで、桜井は飛び上がって驚いた。
【明日香】「脅かさないでよ！」
【渉】「おまえなにやってんだよ？」

【明日香】「なにって、麻生が急に大声出すから、それで……」
【渉】「桜井って、もしかして怖がりとか？　ぐはっ！！」
いきなり俺の腹にボディブロー。
【渉】「くぅぅ……なんだよ、いきなし」
【明日香】「あたし怖がりなんかじゃないから！」
【渉】「わかったから殴るな蹴るな。桜井が怖がりなのはわか……げほっ！」
桜井の回し蹴りが俺の腹に……。
もう少しで晩飯の肉をリバースして土に返すところだった。
【明日香】「怖がりじゃないって言ってるでしょ！」
【渉】「桜井が怖がりじゃないのは１００歩譲って了解した。けど、必要なら俺の腕とかつかんでもいいぞ」
【明日香】「……」
桜井はじーっと俺の顔を見つめた。
この間はいったいなんの間だよ！
そして、桜井は俺のシャツの裾をぎゅっと拳で握り締めた。
【明日香】「別に怖いからじゃないかんね」
【渉】「素直じゃな……ぐっ！」
わき腹抓りやがった。
【明日香】「麻生が迷子になると困るから」
すんげえ言い訳。
でも、ツッコミ入れると痛い目に遭いそうだからやめよう。
俺だって学習機能くらい付いてるさ。
ゆっくりと歩き出した俺の服をつかんで、俯き加減でついてくる桜井の可愛いこと可愛いこと。
俺に理性ってもんがなかったら、この場で押し倒してるところだ……危ない危ない。
しばらく歩いたところで、俺は足元に違和感を感じて立ち止まった。
【渉】「ん？」

足元に懐中電灯を当てると、そこにはベトッとした液体が水溜りのようになっていた。
【明日香】「きゃーーーっ！！」
桜井が俺の身体に飛びついた。
待ってました、この展開！！
桜井の微かな胸が俺の身体に……ああ、幸せ。
俺の幸せを祝福するようにお空のお星様も瞬いてるぜ。
【明日香】「あ、麻生ってば、これって血だよ！」
【渉】「へっ？」
俺が片足をゆっくりと持ち上げると、ねっとりとした液体が靴にこびり付いていた。
懐中電灯を当てても暗がりで色がよくわからないが、確かにそれは血のように見える。
俺の靴に血が……血溜まりの上に立っている？
【渉】「ぐわぁ！？」
すぐさま俺は桜井をお姫様だっこして後ろに飛び退いた。
【渉】「落ち着け、常識的に考えてこんなところに血溜まりがあるわけない」
【明日香】「上條先生の仕業？」
【渉】「当たり前だろ、それしか考えられ……ぎゃ！」
【明日香】「きゃっ！？」
突然、血溜まりが大きくなった。
いや、正確にいうと、地面から血が滲み出して、血溜りがどんどん広がっていた。
【渉】「あはは、よくできた仕掛けだなぁ」
【明日香】「あ、あれ見て！！」
声をあげてなにかに指を差した桜井の指先を懐中電灯で追っていくと、なんとそこには！？
【渉】「なんじゃありゃー！？」
オボッ！　オボッ！

と地中から動く手が次から次へと突き出てくる。
【明日香】「なにあれ、気持ち悪い……」
【渉】「問題ない、ああいうモンスターをＲＰＧで見たことある。ホラーとコメディは紙一重だ」
【明日香】「真ん中だけ道があいてるけど、あそこ通んなきゃいけないのかな？」
何十本、何百本もの蠢く手の真ん中には、人がひとり通れる道が開けていた。
【渉】「迂回するって手もある……うわっ！」
迂回しようと道の脇を見ると、そこには臓物飛び出しちゃってますよ、早く病院行った方がいいですよ、って感じのアンデット系の方々が周りを囲んでいた。
【明日香】「どんどんゾンビたちがこっちに来るよ」
【渉】「問題ない、早く先に進めって催促だ」
アンデットがゆっくりとした足取りでどんどん俺らに近づいて来る。
問題はまったくもってなにもない。
こういう時こそ男たるもの落ち着かなきゃいけない。
そう、俺は桜井にカッコイイとこを見せなきゃいけないんだ！
俺は抱きかかえていた桜井を抱え直し、地面から突き出る手の間を駆け抜けようとした。
あと少しで抜けるというところで、俺の足が誰かにつかまれた。
ズコッ！！
俺の世界が回転する……つまりコケた。
地面にダ～イブ！
コケながらも俺は桜井を守り、桜井を守ったことによって受身ゼロで俺は大ダメージを受けた。
でも、今の俺ってカッコいいかも。
【明日香】「大丈夫！？」
【渉】「ぜんぜん平気」

後ろを振り返るとすでに手もアンデットさんたちも消えていた。
【渉】「コケたくらいじゃ俺の身体は……」
ボキッ！
立ち上がろうとした時、俺の足が奇声をあげた。
【渉】「痛ぇーーーっ！」
【明日香】「どこ怪我したの！？」
【渉】「右足挫いたっぽい」
【明日香】「もぉ、麻生ったら」
立ち上がることもできないで俺は地面に尻をついて座った。
今の俺ってカッコ悪い。
嬢王様め、あんな大そうな仕掛けなんか作りやがって、あとで慰謝料請求……できたらいいなぁ（希望）。
【明日香】「立てる？」
【渉】「無理かも」
【明日香】「誰か呼んできてあげたいけど、ひとりで……」
１００歩譲って怖がりじゃない桜井には独りでみんなのとこに行くのは無理だろうな。
【渉】「肩かしてくれたら立てるかも」
【明日香】「しょーがないなぁ」
桜井が差し出した手につかまって俺は立ち上がろうとしたのだが……。
【明日香】「きゃ！？」
桜井は俺の身体を持ち上げきれず、身体のバランスを崩して俺の胸に飛び込んで来た。
とっさに俺が桜井の身体を抱きしめて、桜井の顔が俺の顔のまん前にきた。
二人の視線が合って、二人とも黙り込む。
しばらくして桜井の顔が赤くなったけど、それでも桜井は俺の身体から離れようとせず、俺も桜井を抱きしめる手に力が入っていた。
【渉】「桜井……」

【明日香】「……」
桜井の顔を見つめているうちに、俺は居ても立ってもいられなくなって、思わず桜井の唇にキスをしようとした。
バシーン！
華麗なる桜井の平手打ちが俺の頬にクリティカルヒット！
【渉】「痛ぇーーーっ！！」
【明日香】「なに勘違いしてるの！！」
顔を真っ赤にした桜井が俺の身体から離れて飛び起きて、服についた砂埃を手ではたいた。
【明日香】「いきなりキスしようとするなんてサイテー」
【渉】「でも、その、雰囲気的にさ……」
【明日香】「物事には順序ってあるでしょ！？　あたしたち別に付き合ってるわけじゃないんだよ、そこんとこわかってるバカ！」
【渉】「……じゃあさ、付き合ってくれよ」
【明日香】「……」
【渉】「俺の彼女になってくれよ」
【明日香】「……」
【渉】「……」
【明日香】「ば～か、誰があんたの彼女になるわけないじゃん」
【渉】「……へっ？」
俺的ビジョンでは……。
――あたしも前から渉クンのことが好きだったの。
――知ってたぜそんなこと。
――寝ても覚めても渉クンのことで頭がいっぱいになちゃって、胸がドキドキして苦しいの！
――俺が明日香のこと癒してやるぜ。だから俺の胸に飛び込んで来いよ。
――渉ク～ン！！
――愛してるぜ明日香！
ガシッ！

と抱き合うって予定だったんだが……見事ハズレ！！
【明日香】「ボサッとしてないで、早く行くよ」
【渉】「いや、だから、立てないから……」
【明日香】「じゃ、置いてく」
【渉】「ま、待てって！」
【明日香】「だったら、今すぐ治して」
【渉】「無理言うなよ。自然治癒力には限界があるだから」
【明日香】「バイバイ」
【渉】「あ、あ、あっ！？　思い出した！」
【明日香】「なに？」
【渉】「怪我治るかも」
【明日香】「ウソばっかり」
【渉】「もしかしたらだけど……」
マジでもしかしてなんだけど、試してみる価値はあると思うことがある。
そう、いつだったか不良どもとケンカして見事桜井を守った時、顔を殴られたんだけど、どーゆーわけかすぐに治っちゃったんだよな……たぶんペンダントの力で。
あの時はまさかと思ったけど、今ここで試して治ったら……。
俺は襟首からあのハートペンダントを出した。
俺的にはこのペンダントには科学では解明できない不思議な力が宿ってる……と思うし、そう願いたい。
ペンダントを首から外した俺は、ハートの飾りをゆっくりと捻った足首に翳した。
すると――。
【渉】「マジ！？」
【明日香】「光った？」
ハートの飾りが淡く輝いている。
その輝きはとても優しく温かく、俺のことを包み込んでくれているようだった。

ゆっくりと俺は地面に手を付き、身体を起こすと足はちっとも痛くなかった。
【渉】「マジすげえ」
【明日香】「どうして、足は？」
【渉】「治った。桜井も見ただろ、このペンダントが光るとこ？」
【明日香】「……それの力？」
【渉】「っぽいな」
【明日香】「足は仮病だったとかじゃないの？」
【渉】「マジで挫いて立てなかった」
【明日香】「ウソだよそんなの、信じられるわけないじゃん」
【渉】「桜井が持ってるヤツも不思議な力があると思うんだけど、なんか心当たりないか？」
【明日香】「……別に。すごくリアルな夢見たけど、それは関係ないと思うから」
【渉】「夢？」
【明日香】「うん、このペンダントが出てくるんだけど、つけてる人がぜんぜん知らない人で女の人で、剣持って戦ってる人とかがいて……」
【渉】「なにそれ？」
【明日香】「中世ヨーロッパみたいな感じ」
【渉】「はぁ？」
たぶん桜井の見た夢は、このペンダントとぜんぜん関係ないな。
桜井は俺がコケた時に落とした懐中電灯を拾い上げ、スイッチを何度もカチカチと押した。
【明日香】「壊れたみたい」
【渉】「月が出てて結構明るいには明るいけど、やっぱ暗いよな」
【明日香】「……サイテー」
【渉】「もしかして！」
もしかしたら、このペンダントで懐中電灯も直るかも。
【渉】「その懐中電灯貸してみな、このペンダントで直るかもしん

ないから」
【明日香】「あたしのでやってみる」
桜井は襟首からペンダントを出して懐中電灯に近づけた。
【渉】「付けててくれたんじゃん」
【明日香】「……直んない。ウソつき」
【渉】「ウソじゃないって、桜井のじゃなくて、俺のだったら直るかもしんないから貸してみろよ」
【明日香】「はい。直んなかったら一生ウソつきって言うからね」
俺は桜井から懐中電灯を受け取って自分のペンダントを近づけてみた。
が、うんともすんとも言わない……。
【渉】「あれ？」
【明日香】「ウソつきぃ～」
【渉】「ウソじゃないって、機械とかそういうのは直らないんだよ、きっと……」
【明日香】「ウソつきぃ～」
【渉】「絶対このペンダントには不思議な力があるんだって……たぶん」
【明日香】「さっきちょっと光ったのは認める」
【渉】「その光を強くして懐中電灯代わりになんないかな？」
大怪我してそれを治そうとしたら強く輝くかも……やりたくはないけど。
【明日香】「念じたら光るんじゃない？」
全くペンダントの力を信じようとせず、かなり冷めた言い方をする桜井に対して、俺はどうしてもペンダントの力を照明したくて、とにかく光るように強く念じた。
すると、俺自身が一番驚いたんだけど、光ったんだよね、これが。
【渉】「光った！？」
【明日香】「……まさか」
【渉】「もっと念じたら、もっと光るかもな」

そして、もっと念じたら本当にペンダントは懐中電灯並みの光を発するようになった。
【渉】「桜井も自分のでやってみろよ」
あたし全く信じてませんよ的な疑い度数９９パーセントの瞳で俺を見つめる桜井。
そんな瞳で見つめるなよ、照れるだろｗ
けれど、桜井はなにやら黙り込んで、ペンダントに集中しているような行動を見せた。
【明日香】「光っちゃった」
よっしゃ！
なんか初めて桜井よりも優越した感じだ。
【渉】「な、光っただろ？」
【明日香】「う～ん」
【渉】「まだ信じてないのかよ」
【明日香】「現実的じゃない」
【渉】「それを言うなら嬢王様の方が現実的じゃない人物だ」
【明日香】「あ～なるほど。うん、ペンダントが光るのはなんとなく信じた。けど、怪我が治るって言うのは信じてないから」
怪我も本当に治ったんだよと叫びたかったけど、まあ今はいいや。
【渉】「早く先進もうぜ、後ろの追いつかれたら嬢王様に文句言われそうだしな」
ガサガサ！
【明日香】「きゃっ！？」
草陰から黒い影が飛び出してきた。
その影は病院に行っても手遅れかも、って感じのアンデット系の方々だった。
そろりそろりと近寄ってくるアンデットさんたちは、早く先に進めよって催促しているようだった。
【明日香】「もぉ、脅かさないでよ。あたし怖いの苦手なんだから」
【渉】「あ、自分で認めた」

ズガゴォォォォォォッッ！！！
ああ、花畑が見える。

洞窟の中は外よりも暗いかと思ったら、蒼白いランプが設置されていて、それほど暗くはなかったけど……蒼白い光って言うのが怖い。
湿気っぽい洞窟の中は、どこからか水音が落ちる音がポタポタと聞こえてきて、時折外からの冷たい風が洞窟内に吹き込み、背中をゾクっとさせる。
桜井と俺の距離は自然と近くなっていた。
身体を寄せ合い、桜井が俺の服をギュッとつかんで離さない……この時間フォーエバー！
【明日香】「少し肌寒い」
俺はかなり熱い。
絶対俺の体温、桜井に伝わってるよな……。
しばらくして祠らしき物が見えてきた。
【明日香】「きゃっ！？」
祠の影から現れる小さな女の子。
女の子というよりは、日本風に童女とかいう言い方をした方がぴったりかもしれない。
むか～し、むか～しの昔話に出てきそうな童女は俺たちを見てニッコリと微笑んだ。
【渉】「なんでこんなところに子供がいるんだ？」
【明日香】「あなた誰？」
桜井の問いかけに童女は無言のままで、たたニッコリと微笑み続けるだけだった。
可愛いと言えば可愛いし、不気味と言えば不気味だ。
『君ってここに住んでる子？』って聞こうとしたけど、ここって島ごと刹那の所有物だし、海外だからジャパニーズ風の童女がいるわけないし。

となると……？
【渉】「君ってさ、刹那のところで働いてる人の子供とか？」
童女はニコニコしながら俺たちを見つめているだけだった。
【明日香】「あの小さい祠の中に上條先生のブロマイドが入ってるんでしょ。早く取って帰ろうよ」
【渉】「ああ、そうだな」
俺は桜井に催促されて小さい祠の扉についていた取っ手に手を掛けた。
【渉】「ビックリ箱みたいになにか飛び出して来たりして」
【明日香】「そんなこと言ってないで早く開けてよ。ここってイヤな感じがする」
【渉】「わかったわかった」
と言いながら俺の手は少し震えていた。
この中からなにかが飛び出してくる可能性は十分にある。
【明日香】「早くぅ」
【渉】「わかったって」
俺は意を決して祠の扉を開けた！！
が、なにもなかった。
なんだかこの静寂が寂しい気分になる。
【渉】「あれ？」
【明日香】「どうしたの？」
【渉】「なにもない」
仕掛けもなかったけど、ブロマイドもなかった。
【明日香】「ないってなにが？」
【渉】「入ってるハズのブロマイドがないぞ」
【明日香】「もっとよく探してよ」
【渉】「見てみろよ、なんもないから」
少し機嫌悪そうな顔をした桜井は俺を押し退けて祠の中を覗き込んだ。
【明日香】「ホントだ、なにもない……？」

【渉】「だろ？」
【明日香】「うん」
……ふと、俺はあることを思った。
【渉】「あのさ、君が持ってるとか？」
俺が尋ねたのは童女だった。
こんなところに小さな女の子がいる理由は、ブロマイドをきた人に渡すために違いない。
【渉】「君が持ってるんだよね、上條先生のブロマイド？」
童女はコクリと頷くと俺に嬢王様のブロマイドを手渡した……その瞬間！？
【渉】「ぎゃぁぁぁぁっ！！」
童女の顔が突然般若の顔に変わった。
驚いた俺は腰を抜かしながらもすぐに立ち上がって、桜井を抱きかかえると一目散に逃げた。
走って走って走りつかれたところで俺は足を止めた。
【明日香】「降ろしてよ」
桜井を地面に降ろすと、俺は肩で息をしながら地面に座り込んだ。
【渉】「マジビビッたし、体育でもこんなに走らねえよ」
【明日香】「ビビリすぎでカッコ悪い」
【渉】「カッコ悪いってなんだよ。桜井だって驚いただろ？」
【明日香】「渉が先に大声で叫んだから、あたしは冷静になれた。それにどーせ上條先生の仕業でしょ」
【渉】「それはそうだけどさ、あの仕掛けはよくできたぜ……って、あれ？」
……なにか俺の心に引っかかったキーワードが存在したぞ。
記憶を巻き戻しして考えろ、俺。
【渉】「ああっ！！」
【明日香】「耳がキーンとするから、大声出すのやめてよ」
【渉】「俺のこと『渉』って呼んだよな？」
【明日香】「……別に」

【渉】「別にとかじゃなくってさ、呼んだよな絶対に？」
【明日香】「呼んじゃ悪いの？」
【渉】「とんでもございません。お気の済むまま何千回、何万回と呼んでくださって結構です！」
マジで嬉しい。
桜井との距離がグッと近づいたような気がする。
【渉】「ところで明日香」
ぐはっ！？
相手を殺す目つきで桜井に見られた。
【明日香】「誰があたしのこと下の名前で呼んでいいって言ったの？」
殺される、今にも俺は桜井に殺されそうだ。
下から睨付けるように見られてるし。
【明日香】「誰があたしのこと下の名前で呼んでいいって言ったの！」
【渉】「だ、だってさぁ、桜井は俺のこと渉って呼んでさ、俺だって桜井のこと明日香って……ぐはっ！」
ボディブローが入った。
【明日香】「じゃあ、麻生って呼ぶからいい」
【渉】「渉って読んで下さいお願いします。俺は桜井のこと桜井って呼ぶから」
ってなんで俺は桜井に頭下げてまでお願いしてるんだ？
ふっ、人の弱みに付け込みやがって、この子悪魔が！！
でも、そんな桜井に魅力を感じる俺がいるんだから仕方ないさ。
【明日香】「なにボサッとしてんの、さっさと行くよ！」
【渉】「え、あ、待てってば！」
とっとと先を歩きはじめていた桜井の背中を俺は急いで追った。

なんだかんだで肝試しは無事に終了。
全ペアも戻ってきて、嬢王様もニコニコの笑顔だった。

【沙羅】「どうだったみんな？　最高のコメディだったでしょ！」
【彰人】「コメディ？」
【沙羅】「そうよ、ホラーというものは最高のコメディなのよぉん！」
【真央】「十分怖かったですよぉ」
【雪乃】「でも、コンニャクを顔面にくらっても無表情のままだった刹那クンは笑えたわ」
【刹那】「うん、美味しいコンニャクだったよ」
　コンニャクに驚いて声をあげた桜井は可愛かったなぁ……俺のメモリーに保存しておこ。
【渉】「ところでさ、洞窟の中の祠にいた女の子の仕掛け、マジで怖かったよなぁ」
【彰人】「女の子なんていなかったぞ？」
【雪乃】「そんなのあったかしら？」
【明日香】「和服着た女の子なんだけど？」
【真央】「そんなの居なかったですよぉ」
【刹那】「あの娘、可愛かったよねェ」
【雪乃】「刹那クンは見たの？　私は見なかったんだけど……」
【沙羅】「……」
　なぜかこの場で押し黙る嬢王様。
【渉】「どうしたんスか嬢王様？」
【沙羅】「……そんな仕掛け作った覚えないんだけど？」
【渉】＆【明日香】「えっ？」
　嫌な予感。
【渉】「刹那は見たって言ったよな？」
【刹那】「うん、可愛い自縛霊の女の子だったね」
【渉】「……」
　ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！
　あの旅行は結果として俺にとって有意義で、桜井との仲が深くな

った……と思いたい。
つーか、あの旅行以来、桜井は俺のことを『渉』と呼んでくれるようになった。
かなりの進展だ……と思いたい。
そんなこともあってか、今日は桜井宅にお呼ばれしちゃいました！（強引に）
けど、まだまだ二人っきりとはいかないようで、雪乃もオプションとして付いてきた。
まあ、もともと雪乃が桜井んちに行くって言うから、俺もついて行くってことになったんだけど（強引に）。
桜井んちの最寄り駅で雪乃と待ち合わせ。
【渉】「ちわーっス」
【雪乃】「麻生君、５分の遅刻よ」
【渉】「５分くらい、いいだろ別に」
【雪乃】「よくないわ。集合場所には１５分前に到着しているのが基本よ。待ち合わせの時間に遅れるなんて、日頃の生活習慣が緩んでいる証拠だわ」
【渉】「集合時間ってのは、その前後に来てればいいんだろ」
【雪乃】「そういう考えが人を駄目にするのよ。……まあいいわ、明日香はあっちよ、ついて来て」
【渉】「ああ」
駅前の道を抜け、住宅街のひしめき合う道路を歩く。
ここら辺の景色は微かに記憶の片隅にあるような気がする。
そう、ここは俺が以前住んでいた町だ。
【雪乃】「この辺りの風景覚えている？」
【渉】「覚えているような覚えていないような……ぜんぜん見たことないような気もするし」
【雪乃】「そうね、この辺りもだいぶ変わってしまったから。私の実家の神社は、ここの角を曲がったところよ。明日香が住んでるマンションは、ここをまっすぐ行ったところ」

【渉】「桜井ってマンション暮らしなんだ」
【雪乃】「ええ、高級マンションに住んでるのよ」
【渉】「ふ～ん。ところで雪乃と桜井っていつから友達やってんだ？」
【雪乃】「中学に入ってすぐよ」
【渉】「桜井って自分から友達作るタイプに見えないけど、どっちから？」
【雪乃】「私からよ。明日香は中学に入学すると同時期にこっちに引っ越してきたから、小学校からの友達はいなかったのよね。それでいつもクラスで浮いた存在になってて、いいえ、彼女自身が人を寄せ付けないようにしていたのかしらね」
【渉】「人を寄せ付けない感じねぇ～。今でもそんな感じするよな」
【雪乃】「あら、今の明日香は大分丸くなったし、人付き合いもとくなった方よ」
よくなった方か……。
今でさえ殴られたり蹴られたりしてるのに、中学の頃に会ってたら一撃死攻撃とか受けてたな。
【雪乃】「あのマンションよ」
しばらく歩いたところで、雪乃が前方にあるマンションを指差した。
【渉】「デケェ～～～っ」
【雪乃】「明日香の部屋はあのマンションの最上階の角部屋よ」
【渉】「最上階の角部屋……最上階って値段が高いんじゃなかったっけか？　桜井って良家の娘なんだな……にしてはワガママなような気がするが……」
裕福な家の娘だからワガママなのか。
……ふっ、所詮俺は中流家庭さ。
庶民、庶民、庶民……。
庶民のなにが悪いじゃ！！
【雪乃】「ボサッとしてないで早く行くわよ」

【渉】「あっ？」
すでに雪乃は俺を置いて先を歩いていた。
【渉】「待てよ、俺を置いていくなよ」
【雪乃】「麻生君は“おまけ”なんだから置いていかれたくなかったら早くついて来て」
【渉】「は～い」
気のない返事をして俺は雪乃の後を追った。

【明日香】「ホントにこいつも来たんだ」
それが桜井の第一声だった。
あからさまに嫌な顔しながら桜井は俺と雪乃を部屋の中に招き入れてくれた。
思ったとおり、部屋の中は広い。
それに綺麗に片付いていて清潔感の漂う部屋だった。
ただひとつ俺が気になったのは、物が少ないこと。
家族全員で住んでるわりには雑貨が少ない。
もしかしたら、片親と二人暮しとかなのかもしれない。
【雪乃】「今日はお兄さんはいないの？」
【明日香】「知らない。きっとどっかに遊びに行ってるんじゃない？」
【渉】「桜井って兄貴いるんだ」
将来俺のお兄様になる人かもしれないから、そのうちちゃんと挨拶しなきゃな。
【雪乃】「明日香はお兄さんと二人暮しをしているのよ」
【渉】「ふ～ん、そうなん……だぁっ！？」
兄貴と二人暮し！？
二人暮しって俺の予想は当たってたけど、兄貴と一緒ってご家族のみなさんは！？
【渉】「二人暮しって、両親は？」
【明日香】「……別に」

【雪乃】「明日香のご両親はご健在よ。ただ、一緒には住んでいないのよ」
……これは触れてはいけない話題だったのか。
でも、兄貴と二人暮しって。
仮にも兄貴って生命体は男だぞ。
男と一つ屋根の下で……許せん！！
世の中には妹萌えって言葉だってあるくらいだ。
まあ、現実の妹に萌えるヤツはそういないだろうけど、桜井くらいの可愛さがあったら、俺が桜井の兄貴だったら間違いを犯すぞ！！
……男と二人暮しなんて犯罪だ。
法律がそう認めなくても、俺が桜井の兄貴に天誅だ！！
【渉】「桜井の兄貴ってどんなヤツなんだ？」
【明日香】「……」
【雪乃】「妹大好きって感じかしら」
【渉】「やっぱり妹萌えかっ！！」
……口に出してしまった。
【渉】「……妹想いな兄貴なんだなぁ」
今更言い直しても遅いか。
【明日香】「あたしはあんまり好きじゃない」
【渉】「好きじゃないって兄貴のこと？」
【明日香】「だってウザイんだもん」
【雪乃】「明日香は口ではそんなこと言ってるけど、実はお兄さんのこと好きなのよ。好きじゃなかったら、一緒に住んでるわけないじゃない」
【明日香】「そんなことない！　あんなのが自分の兄なんて、同じ血が流れてると思うだけでゾッとする」
【雪乃】「ふふ、まあいいわ」
静かに笑った雪乃を見て桜井は少しブスッとした表情をしたが、すぐに深く息を吐いて普段の表情に戻した。
【明日香】「ソファーに座って待ってて、なにか飲み物持ってくる

から」
【渉】「桜井の部屋には入れてくれないのかよ？」
【明日香】「あたしの部屋は男子禁制。あたしんちに入れてリビングのソファーにまで座れるっていうのに、渉ってホントずうずうしいヤツ」
そう言い残して桜井は台所に消えてしまった。
【雪乃】「……ふふ、明日香ってホントわかりやすい子ね」
【渉】「わかりやすいってなにが？」
【雪乃】「私の口から言うことじゃないわ」
意味深だ。
生命の神秘だ。
俺の脳内回路が意味不明だ。
しばらくして桜井が飲み物を両手に一つずつ持って現れた。
【明日香】「はい雪乃」
飲み物を雪乃に渡した桜井は、ソファーに座って自分の持っていた飲み物を一口。
……？
【渉】「俺の分は？」
【明日香】「……なんのこと？」
【渉】「いや、その、俺の飲み物は？」
【明日香】「あっそ」
【渉】「あっそ、じゃなくって俺の分の飲み物がなんでないんだよ！」
【雪乃】「明日香ったら、意地悪しないでちゃんと麻生君の分も出してあげなさいよ」
【明日香】「だって客人じゃないし。勝手にあたしの家に来て、飲み物をねだるなんてずうずうしい」
【渉】「台所どこだよ、飲み物勝手に探すからいい！」
【明日香】「勝手に探さないでよ！」
【渉】「じゃあ飲み物くれよ」

【明日香】「もぉ……」
桜井は顔を膨らませながら再び台所に消えていった。
……かなり理不尽なキレかたされた。
【渉】「いつもいつも桜井にキレられてばっかだな」
【雪乃】「あの子はそんなに人に自分の感情を見せる子じゃないわよ。麻生君は麻生君がいる時の明日香しか見ることができないのよ、この意味わかる？」
そう言って雪乃は静かに微笑んだ。
意味深だ。
【渉】「どういう意味？」
【雪乃】「野暮な質問はしないで。麻生君って天然のボケなのかしらね？」
【渉】「ボケってなんだよ、確かに頭はそれほどいい方じゃないけどさ」
だいたい雪乃言わんとすることはわかる。
きっと、俺と桜井のことだと思う。
誰も直接的には言わないけど、俺が桜井のこと好きなのは一目瞭然だし、桜井も俺のことを好きなような気がする……っていう推測域をでないから悩んでるんだよ。
別の俺はさして鈍感じゃないし（と思う）、鈍感を演じてるわけでもないんだよ。
ただ、なににしても確信が持てなくて、自身も持てなくて、なにひとつ『これだ！』って言えることないんだよ。
桜井が俺のことを好きって推測は、桜井が直接俺のことを好きって言ってくれるまで、ずっと推測のままだと思う。
行動とか間接的なことじゃ確信を持てないんだよ、直接言ってくれないと。
俺が考え事をしていると、桜井が飲み物を持って戻ってきた。
【明日香】「はい、水」
……水？

俺は渡されたコップを覗き込む。
透明の液体はまさしく水。
【渉】「あのさ、桜井と雪乃が飲んでる飲み物って、明らかに湯気出てるのが確認できるんだけど……俺だけ水？」
【明日香】「浄水器は通してる」
【渉】「そーゆー問題じゃないっしょ」
【明日香】「せっかく持ってきてあげたのにいらないの？」
……目つき凶暴。
【渉】「いりますいります、ありがたく頂かせていただきます」
やけっぱちな俺は水を一気に胃の中に流し込んだ。
【渉】「ぷはぁ～」
【明日香】「おかわりは？」
【渉】「いや、もういい」
イジメだ、これは明らかなイジメだ！
俺は桜井にイジメられている！
【雪乃】「そうそう、今日は明日香にこれ見せに来たんだったわ」
そう言うと雪乃は自分の持ってきた小さなバッグの中から数十枚の写真を取り出した。
【渉】「これってあの時の写真かぁ……」
そう、雪乃が取り出した写真はつい先日行った旅行の写真。
ジェット機の機内で撮った写真やビーチバレーの時の写真から肝試しの時のまで……。
この桜井の水着写真欲しい！！
金出すから譲って欲しいけど、ここではもちろんそんなこと口にできない。
でも、喉から手が出るくらい欲しい。
【明日香】「渉ったら鼻の下伸ばしてイヤラシィ～」
【渉】「鼻の下なんて伸ばしてねぇよ！」
【雪乃】「誰の水着写真を見て鼻の下伸ばしてたのかしらね……うふふ」

一番はもちろん桜井だけど、雪乃の巨乳も目が放せないし、嬢王様の爆乳も棄てがたい……真央ちゃんはマニア受けだな。
そう言えば、刹那って意外に乳がデカかったよなぁ……ぽわぁん。
【明日香】「鼻血出てる！！」
【雪乃】「まあ」
【渉】「えっ！？」
慌てて俺は自分の鼻の下を触った。
すると手についた生暖かい液体。
【明日香】「もぉサイテー、えっちなことしか頭ん中ないわけ？」
【渉】「違うって誤解だって」
別に誤解じゃなくって、ホントにえっちなこと考えてたけど、普通否定するだろ。
【渉】「ほら、この部屋って暖房効いてて、鼻血が出やすい環境なんだよ」
【雪乃】「ふふふ……男の子なんだからしょうがないわ。明日香も大目に見てあげなさい」
【明日香】「不潔サイテー死ね」
【渉】「雪乃も言ってるだろ、男なんだからえっちなことくらい考えて当たり前だ！」
【明日香】「認めればいいってわけじゃないでしょ！」
【雪乃】「まあまあ二人とも、ね？」
ニッコリと微笑む雪乃を見て俺と桜井は押し黙った。
確かに大人気ないケンカだった。
でもさ、好きな子のことでエッチなこと考えちゃうだろ……鼻血の原因は刹那の真っ裸映像だったけど。
俺って駄目だな、刹那で鼻血なんて……モーソー浮気って感じだ。
モーソー浮気なんて桜井に申し訳ない。
俺は桜井一筋なんだ！
でも、俺は性別男だから、種の保存のプログラムがＤＮＡに内蔵されてい訳で、どうしても桜井以外でも下半身が反応してしまうわ

けで……。
【明日香】「……渉、飲み物ココアでいい？」
【渉】「はっ？」
【明日香】「ココア飲むって聞いてんの！」
【渉】「……うん、もらう」
……どういう風の吹き回しだ？
俺的には『ごめんね渉クン、さっきは怒鳴ったりしちゃって』って感じで俺に優しくして気を使ってくれてるとか？
すぐに台所に行って戻ってきた桜井は俺にココアの入ったコップを手渡した。
【明日香】「熱いから」
わざわざ『熱いから』って言うってことは、『熱いから気をつけてね♪』みたいなことなんだろうな。
ああ、俺に優しい桜井もサイコーだ。
むしろ、ずっと桜井は俺に優しくあって欲しい。
雪乃が急に立ち上がった。
【雪乃】「さてと、私はそろそろ帰ろうかしら」
【明日香】「えっ、もう帰っちゃうの？」
【雪乃】「ええ、用事は済ませたし、これから別の用事もあるのよ」
桜井の視線が俺に向けられる。
これはどういうアイコンタクトだ？
桜井は俺になにを言わんとしているのだ？
【明日香】「帰って」
【渉】「ぐあっ」
それか、その一言か。
つまり雪乃が帰ちゃって俺と二人っきりになるのは断固拒否というわけですね。
わかってますよ、同じ屋根の下で二人っきりって展開はまだ早いですよね。
まだまだ二人っきりで間が持つ関係じゃないってことですよね。

ふっふっふっ……チャンスはまだあるさ。
今日は桜井んちが判明しただけで良しとするさ。
……ふふふ。
【雪乃】「麻生君も帰るの？」
【明日香】「帰るよね？」
桜井の妙に強い口調。
そんなに強調しなくても帰るよ、帰ればんだろ！
【渉】「ああ、そういえば俺も用事があったんだよな」
不必要なウソをついてしまった。
【雪乃】「じゃあ、私と途中まで帰りましょう」
【渉】「ああ」
【明日香】「雪乃またね♪　渉は一生来なくていいから」
【渉】「……」
だから桜井が俺のこと本当に好きなのか確信が揺らぐんだよ。
深読みってどこまで読んでも切がないから、深読みしなくてもいい確信が欲しい。

桜井のマンションから出てしばらく歩き、曲がり角で雪乃と分かれることになった。
【渉】「じゃあな」
【雪乃】「そうそう」
【渉】「……？」
【雪乃】「麻生君にも写真を渡さないといけないわね」
【渉】「えっ？」
【雪乃】「はい、大事にしなさいよ」
雪乃が俺に渡した写真は全部桜井が写ってる写真だった。
もちろん桜井の水着写真もバッチリある。
でも、桜井の写真だけって……。
【渉】「あのさ……」
【雪乃】「明日香のこと大切にしてあげてね。じゃあねぇ～、バイ

バ～イ♪」
【渉】「……あっ」
結局俺は雪乃に手を振りながら、その場で呆然としてしまった。
雪乃は俺の応援団の第１号なのか……？
少なくとも桜井の写真だけを俺に渡すっていうのは……？
……いいヤツじゃん、雪乃って。
とか思ってたら、雪乃が急に足を止めて振り返った。
【雪乃】「そうだったわ！」
【渉】「なに？」
【雪乃】「今度ウチの神社でお祭りがあるのよ」
【渉】「引っ越す前は毎年行ってたなぁ」
【雪乃】「みんなにはもう声をかけてあるから」
【渉】「みんなって？」
【雪乃】「聞かなくてもわかるでしょ？」
ってことは、俺と彰人と桜井、雪乃、刹那、真央に嬢王様……は入ってるのか？
【雪乃】「明日香は来るって言わせておいたから。詳しい話はまた今度ね。じゃあ、今度こそさよなら」
今度こそ雪乃は行ってしまった。
……今の雪乃のシグナルはどういう意味だ？
つまり、桜井とお祭りでうまくやるのよってことなのか……？
……すんげえいいヤツじゃん、雪乃って、

お祭りの行われる神社は雪乃の実家で、あそこの神社は結構有名な神社で敷地が広くて祭りの規模もデカイ！
しかもしかも、この祭りの日に合わせて近くの川辺で花火大会もあるんだよなぁ。
最高のイベントだ！
というわけで、雪乃の神社がある駅で彰人と待ち合わせ。
【渉】「ちわーっス」

【彰人】「相変わらず遅刻だよな」
【渉】「ま、いつのことじゃん……あれ？」
【真央】「こんにちわぁ」
【渉】「……こんちわ」
真央もいたんだ。
とりあえず待ち合わせしてたのは彰人だけだったんだけど……？
【彰人】「早く行こうぜ、道案内は渉な」
【真央】「お祭り楽しみですねぇー！」
真央ってばしっかり浴衣着込んでテンション高いな。
……彰人と真央の物理的な距離が近い。
ま、まさか！？
……なのか？
神社の場所を知ってるのは俺だけだから、道案内をするのはいいんだけど……。
真横を並んで歩く彰人と真央の距離が近いし、なんだか会話が弾んでるようす。
二人の間になにがあった！？
……あの旅行か？
……肝試しか？
……気になる。
羨ましい関係に発展か！？
【真央】「高瀬さん、花火大会もあるって聞いたんですけど、一緒に見てもいいですか？」
【彰人】「いいよ」
やっぱりそーゆー関係かっ！！
【彰人】「そう言えば桜井さんと神楽さんとはどこで待ち合わせなんだ？」
【渉】「雪乃に聞いてない？」
【彰人】「神楽さんに『麻生君に言っておいたから』って聞いたぞ」
【渉】「人ごみで待ち合わせしても大変だから、雪乃の家で待ち合

わせ。雪乃の家って言っても神社の一角なんだけどさ」
【真央】「雪乃さんの神社ってどんなところなんでしょうねぇ、ドキドキします」
【渉】「神社自体はただ広いだけだけど、祭りとかの出店は多くて全部回るのが大変だろうな」
【真央】「楽しみですねぇ」
【彰人】「そうだな、楽しみだな」
真央に向かってニッコリ微笑む彰人。
なんだか、しみじみ思う……いい関係だな二人。
よし、俺も頑張れ、どうにかして桜井との関係を進展させるぞ！
つーか、現在の俺と桜井の関係ってどんな感じなんだ？
わかんねぇ！！

ついに日曜日が来てしまった。
……俺はこの日をどこのくらい待ちわびたことか、言葉では言い表せないくらいだ。
そのイベントの名はお祭り！！
夏と言えば海。
このイベントはすでに済マークがついている。
夏の昼を象徴するイベントが海ならば、夜のイベントは祭りだ！
しかも神社のお祭りと来たもんだ。
……最高だ。
桜井の浴衣姿最高！
つーか、うなじ最高！
【明日香】「……な～にジロジロ見てんの？」
【渉】「桜井の浴衣姿似合ってるなぁと思ってさ」
【明日香】「……そっ」
せっかく褒めたのに軽くあしらわれた。
祭りの会場ではそこら中が人だらけで、出店の数も多い。
金魚すくいとかの定番物もあるけど、漂ってくるソースの香りの

方が俺には魅力的だったり。
【真央】「あのぉ、刹那さんは来ないんですかぁ？」
【雪乃】「刹那君は今日は用事があって忙しいらしいわよ」
【真央】「そうですかぁ、残念ですね」
刹那の私服って学ラン以外見たことなんだけど……お祭りの会場にも学ランで来るのだろうか？
【雪乃】「それじゃあ、私仕事が忙しいから行くわね。みんな楽しんで来てね」
【明日香】「えっ、雪乃？」
雪乃は早歩きで人ごみの中に消えてしまった。
この場に残ったのは俺、桜井、彰人、真央の４人……ダブルデート風！！
【渉】「どうするこれから？」
【明日香】「……別々に行動しよか」
【渉】「へっ？」
【明日香】「じゃ、あたしはあっち行くね」
さっさと歩き出してしまった桜井を後を俺は急いで追った。
桜井の足が止まるようすはない。
そして、桜井が急に俺の腕をつかんで足を速めた。
もしかして、桜井のやつ俺と二人っきりになるために……。
【明日香】「勘違いしないでよ」
【渉】「へっ？」
【明日香】「なにか勘違いしてるんじゃない？」
【渉】「勘違いって？」
桜井が急に足を止めて俺の顔を見た。
【明日香】「二人っきりにするためだから」
【渉】「やっぱり俺と二人っきりになる……ぐはっ！」
桜井のボディーブロー。
しかも今回のはかなり巧妙なボディーブローで、周りにいる人たちに見えないように俺に接近して小さく腹に一発。

【明日香】「アンタとなんか二人っきりになりたいわけないじゃん」
【渉】「……腹を殴る時は予告してくれ……そしてら腹筋に力入れるからさ……つーか、二人っきりにするためって誰を？」
【明日香】「あの二人に決まってるでしょ」
【渉】「あの二人ね。つーか、いつからあんな仲になったんだ？」
【明日香】「高瀬の片思いだと思ってたのに」
【渉】「はぁ！？」
【明日香】「なに驚いてんの？」
【渉】「そうなの！？　彰人って真央ちゃんのこと好きだったの？」
【明日香】「やっぱり渉ってちょー鈍感」
そう言えば真央は俺のことが好きだとかなんとか彰人が言ってたことあったよな……。
つまりそれって三角関係だったってことかよ！
……危ない危ない、恋の泥沼に足を踏み入れるところだった。
とにかく彰人と真央がくっ付いてくれて、俺的には安心ってことだな。
でも、俺のことが好きだったらしい真央がなんで彰人と……？
そもそも真央が俺のこと好きって言うのは彰人の勘違いだったとか？
【渉】「……あれ、桜井は？」
桜井の姿が見当たらない。
【渉】「桜井！」
返事がない。
つーか、人が多すぎて聞こえそうもないな。
ったく桜井はどこ……いたいた。
桜井を人ごみの中で発見した俺は急いで桜井に追いついて、桜井の肩を軽く叩いた。
【渉】「置いてくなよ」
【明日香】「別に最初から一緒に行動してたつもりないけど」
【渉】「桜井だってひとりで行動してもつまんないだろ、俺と一

緒に回ろうぜ」
【明日香】「それもそだね。じゃあ、特別に一緒に行動してあげる」
と言って桜井は俺の手を握った。
そう、桜井が俺と手を繋いだのだ、自らの意思で！！
どっと握られた手から汗が吹き出る。
汗をどうにか止めたいけど、生理現象なんだからどーしょーもなくて恥ずかしい。
【明日香】「なんか買ってよ」
【渉】「なんかってなに？」
【明日香】「別になんでもいいんだけど、いちよーこれってデートだから男の子が女の子になにか買ってあげるのが当然でしょ？」
【渉】「デ、デート！？」
【明日香】「すぐ勘違いするぅ。別にちゃんとしたデートじゃなくって遊びだよ、遊び」
でもデートという名が付くんだからデートに変わりないだろ。
桜井とお祭りデートができるなんて俺って幸せ者。
【明日香】「ヨーヨー釣りやろ」
【渉】「ヨーヨー釣りってどこ？」
【明日香】「ほら、あそこにあんじゃん」
先を指差す桜井に手を引っ張られながら俺はヨーヨー釣りの出店の前まで連れて行かされた。
この展開ってなんかマジカップルっぽいな。
【明日香】「早くお金出してよ」
【渉】「はいはい、すぐに出すよ」
少ししぶしぶ金を出して店の人に金を渡して、かわりに釣り導具みないなやつを2つ受け取った。
これも未来への投資と思えば安いもんさ。
さっそく桜井と二人でヨーヨー釣りをはじめた。
すぐに俺はヨーヨーを1個ゲットして、1個目をゲットしようとしたところで糸が切れた。

横を見ると、まだ桜井はどのヨーヨーを取ろうか狙いを定めている。
そんなヨーヨーに狙いを定める真剣な桜井の横顔が素敵だ！
【明日香】「……あっ」
切れた。
桜井がヨーヨーをフックに掛けて持ち上げようとした瞬間、糸がプチっと切れてしまったのだ。
桜井は店の人を見つめて一言。
【明日香】「切れた」
【店の人】「それは残念だったね」
店の人はそれだけを言っただけだった。
勢いよく立ち上がった桜井を俺の腕を引っ張ってうつむき加減で小さく呟いた。
【明日香】「……ケチ」
少し怒ったようすの桜井は俺の腕をつかんでどんどん歩いていく。
【渉】「怒るなよ、桜井の腕が未熟だっただけだろ」
【明日香】「そういうことじゃなくって、1個も取れなかったら普通サービスで1個くれるじゃん」
……ガメツイぞ桜井。
【明日香】「金魚すくいだって1匹も取れなかったらくれるよねぇ？」
【渉】「それはそうだけど」
【明日香】「あの店員ケチだよ」
【渉】「俺の取ったやつやるから機嫌なおせ」
【明日香】「えっ、渉が取ったのくれんの？」
【渉】「ほら、やるよ」
俺が差し出したヨーヨーを受け取った桜井は少し口元を綻ばした。
【明日香】「渉もいいとこあんだね」
【渉】「今まで俺にいいとこ全くナシみたいな言い方すんなよ」
【明日香】「全くなかった」

グサッ！
あっただろ、俺的にはいろいろあると思うぞ。
【明日香】「そんじゃ、次どこ行こうか？　なにか食べ物とか飲み物が欲しいなぁ」
【渉】「また俺が金出すの？」
【明日香】「イヤならいいよ、自分です出すから。あたしそんなにビンボーじゃないし」
その言葉の意味を解釈すると、絶対オマエが出せ、出さなきゃ絶好よ、って聞こえたんだけど。
つーか、桜井って絶対に欲しい物はなんでも人に買ってもらう環境で育ったっぽいな。
つーか、桜井の家って裕福そうだから、実際になんでも欲しい物は買ってもらってんだろうな。
【明日香】「早くなにか食べよ！」
桜井に腕を引っ張られるシチエーションが嬉しかったりした。
それに桜井もなんだか楽しいそうな顔してる。

桜井と一緒にいろんな出店を回って、いろんな物を買わされた。
ヨーヨー釣りにはじまり、ヤキソバと飲み物から最終的にはお面まで。
でも、未来への投資だと思えば安いものさ。
【渉】「そろそろ花火がはじまる時間だけど、どうするみんな集合するか？」
【明日香】「う～ん、あの二人の邪魔しちゃいけなだろうし、雪乃も忙しいかな？」
【渉】「そんじゃ、二人で花火見ることになるのか……」
よっしゃ！！
二人っきりで花火を見る思い出ゲット！
【明日香】「二人っきりか……」
複雑な横顔をする桜井。

【渉】「俺となんかじゃイヤとか言い出すんじゃないだろうな」
【明日香】「そんなことないよ、デートごっこはまだ続いてるから」
小さく笑う桜井の顔を見て俺はほっとした。
【明日香】「花火を見るベストスポットとかないの？」
【渉】「なんで俺に聞くんだよ」
【明日香】「だって昔はここらへんに住んでたんでしょ？　雪乃に聞いたよ」
【渉】「住んでたには住んでたけど、ベストスポットなんて知らねぇよ」
【明日香】「役立たず」
【渉】「つーか、桜井の地元だろここって」
【明日香】「このお祭り来たの今日がはじめてだもん」
そう言えば昔はこの祭りで毎年雪乃と一緒に花火見てた記憶があるな……どこでだっけか？
【渉】「花火なんてどこでも見れるだろ。よく見えなきゃ俺が桜井のこと肩車してやるよ」
【明日香】「肩車なんて恥ずかしいからやめてってば」
すごく残念。
【渉】「ま、とにかく花火が見える場所まで行こうぜ」
頷いた桜井の手を握り、歩き出そうとした時だった。
俺は肩を叩かれて振り向いたその瞬間、俺は顔面に強い衝撃を受けて、そのまま吹っ飛ばされて地面に両手を付いた。
【明日香】「渉だいじょぶ！？」
大丈夫とかそーゆー問題じゃなくって、なにが起きたのか把握できない。
なんだ今のは……？
ヒリヒリする頬を押えながら俺が顔を上げると、そこにはイカツイ見るからに自分たち悪ですって感じのグループが立っていた。
つまり、俺はこいつらに殴られたってことだな。
つーか、全く見に覚えもない不意打ちだ。

【渉】「なんだよ！　誰だよ俺のこと殴りやがったヤツは？」
【不良A】「あの時はよくもやってくれたな！」
【渉】「はっ？」
【不良B】「俺たち顔忘れたとは言わせねぇぞ！」
【渉】「忘れた」
【不良C】「んだと！」
【明日香】「こいつら前に駅前であたしたちに絡んできたヤルらだよ！」
【渉】「あーっ、いつぞやの不良ＡＢＣか！？」
【不良A】「ＡＢＣってなんだコラァ！」
だってＡＢＣだろ。
つーか、ヤナとこで遭っちまったな。
【不良A】「あの時の借りは返させてもらうぜ！」
【不良B】「覚悟しやがれ！」
【不良C】「その女物な！」
別に借りとか返してくれなくていんだけど。
ヤヴァイなこの状況。
人多いし、こんなところでケンカするのはマズイよなか。
【明日香】「えいっ！」
桜井が手に持っていたヨーヨーを全力投球で不良Aに投げつけて、ヨーヨーがパーンと弾けて不良Aの顔を水浸しになった。
ヨーヨーって以外に割れやすいんだな。
ってそんなこと考えてる場合じゃなかった。
【不良A】「ふざけんなテメェ！！」
あ、マジで怒らせちゃったよ。
つーか、この時期に問題起こすのはマズイよな。
大学進学とかもあるしさ、いちよーウチの高校って大学の付属高校で、エスカレーター式に上に行けるけどさ、それでも問題起こしたらマズイよなぁ。
ってことは選択肢はひとつ。

逃げるが勝ち！！
桜井を抱きかかえた俺は猛ダッシュで人ごみの中を掻き分けて逃げた。
【不良Ａ】「待ちやがれ！」
後ろを振り返ると不良ＡＢＣがものスゴイ形相で追って来る。
待てと言われて待つやつがどこにいんだよ！
【明日香】「どこまで逃げるの？」
【渉】「どこまでって相手が追って来なくなるまで」
とは言ったものの、なにか相手をまく方法がないか？
【不良Ａ】「ぎゃあぁぁぁ！！」
後ろで悲鳴が聞こえて振り返ると、不良Ａがうつ伏せになって地面に倒れていた。
【明日香】「あの人知ってる！」
【渉】「あ、あいつは！？」
このペンダントを売った外国人。
俺と桜井が持ってるハートペンダントを売った外国人がそこには立っていて、不良ＡＢＣの足止めをしてくれていた。
あの外国人には聞きたいことがたくさんあったけど、今はこの場から逃げることの方が優先だった。
でも、どうしてあの外国人が？
この祭りで出店を出してるって考えるのが自然かもしれないけど、俺はそれよりも運命的なことを感じた。
やっぱ、逃げるよりもあの外国人に話を聞いた方がいいかも。
【明日香】「もう降ろしてよ」
【渉】「ああ、すぐ降ろす」
やつらが追って来るようすはもうなかったので桜井を地面に降ろした。
【明日香】「さっきの外国人って、あの時の人だったよね？」
【渉】「ああ、あの時のだったな。あの人に話したいことあるんだけど」

【明日香】「あたしもあの人に話したいことある」
【渉】「やっぱペンダントのことか？」
【明日香】「ちょっと違う」
【渉】「ちょっと違うってなんだよ？」
【明日香】「夢の話」
【渉】「夢？」
【明日香】「あの人あたしの夢に出てくるの」
【渉】「はぁ？」
【明日香】「とにかくあの外国人探しに行こうよ」
【渉】「そうだな」
すぐにさっきの場所に戻ったけど、外国人も不良ＡＢＣの姿もなかった。
【明日香】「いないみたい」
【渉】「あの外国人出店とか出してないのかな？」
【明日香】「探してみる？」
【渉】「でもさ、さっき回って歩いた時、そんな店なかったよな？」
【明日香】「一通り回ったもんね」
【渉】「でも探してみるか」
【明日香】「そだね」
桜井と一緒にあの外国人を探し回ったけど、結局見つからずに疲れただけで終わってしまった。
ひゅるるるるぅ～～～～ど～ん！
空を見上げると綺麗な花火が夜空に散っていた。
【渉】「はじまちゃったな」
【明日香】「もっとよく見えるとこに行こ」
【渉】「肩車してやろうか？」
【明日香】「却下」
【渉】「あ、思い出したベストスポット」
【明日香】「ホントに？」
【渉】「花火が終わる前に走んぞ！」

俺は桜井の手を握り締め、俺はあの場所に向かって走り出した。
【雪乃】「あら、やっぱり来たのね」
そう言って雪乃は静かに微笑んだ。
俺が桜井を連れてきたのは雪乃の家。
この場所が一番花火がよく見える場所なんだよな。
【明日香】「ここなの？」
【渉】「ああ、ここが一番よく見える場所なんだ」
【雪乃】「早くしないと花火終わっちゃうわよ。ハシゴは立てかけて置いたから早く行きなさい」
【明日香】「ハシゴ？」
【渉】「いいから早く」
壁に立てかけてあったハシゴに桜井を登らせる。
【渉】「ほら、さっさと登れよ」
【明日香】「ヤダ、渉が先に登ってよ」
……チッ。
桜井を先に登らせてベストアングルを確保しようと思ってたのに。
俺はさっさとハシゴを登り、雪乃の家の屋根に登る。
すぐに桜井がハシゴを登って屋根の上にやって来る。
【渉】「ここが一番見えるだろ？」
【明日香】「ホントだぁ！」
色取り取りの花火が空を彩る。
屋根の上に腰を下ろして二人っきりで花火を眺める。
【明日香】「キレイ」
【渉】「いい眺めだろ？」
【明日香】「うん」
俺の手がなにか暖かい温もりに包まれた。
それは桜井の手だった。
横を見ると桜井の嬉しそうな横顔が俺の目に映った。
俺の視線に気づいたのか、桜井が俺の方に顔を向けた。

目と目が合ってしまって、桜井が微妙にはにかんだ表情をする。
きっと、俺もそんな表情をしてると思う。
まだ花火は終わってないのに、俺と桜井は顔を合わせたまま二人の時間を止めてしまった。
桜井の顔を見ていると、思わず視線が唇に行ってしまって、そのまま唇に吸い込まれそうなる。
このシチエーションは行くべきなのか、行かざるべきか。
すぐそこには桜井の柔らかそうな唇が……。
思わず俺は生唾をゴクンと呑んでしまった。
桜井も俺の顔見てるし、これはキス待ちと考えるべきなのか……？
心臓がバクバクして、自分でも呼吸が荒くなってるのがわかる。
よし、行け！
【明日香】「あっ」
俺が行こうとしたその時、桜井が再び夜空を見上げて呟いた。
【明日香】「終わちゃったみたい」
そう言って立ち上がった桜井は、さっさとハシゴに向かって屋根を下りてしまった。
……屋根にポツンと残された俺。
し、しまった！
チャンスを逃してしまった！！
【渉】「……ふ、ふふ、俺ってへたれだな」

【雪乃】「どうだった、よく見れたでしょ？」
【明日香】「うん、雪乃も登ってくればよかったのに」
【雪乃】「私はいいのよ、昔思う存分見たから」
……俺は男になれなかった。
【雪乃】「あら、麻生君ったら浮かない顔してどうしたの？」
【渉】「なんでもない……」
雪乃は桜井の顔を見て不思議な顔をした。
【雪乃】「上でなにかあったの？」

【明日香】「別になにもなかったよ。普通に花火見てただけ」
【雪乃】「それじゃあ、なんで麻生君はこんなに沈んでいるのかしら？」
【渉】「男にはこんな時もあるんだよ」
【明日香】「意味わかんない」
【雪乃】「ホントになにもなかったの？」
【明日香】「ぜんぜん」
俺的にはいろいろあったんだよ。
【雪乃】「まあいいわ。ウチに美味しいスイカあるんだけど、食べていく？」
【明日香】「う～ん、どうしようかな。渉はどうする？」

1．食べていく――※１へ
2．そんな気分じゃないから帰る――※００５へ

明日香編（１２・未編集）

雪乃の家に上がらせてもらい、縁側に連れて行かれると、そこでは彰人と真央が仲良くスイカを食べていた。
【真央】「花火見ましたかぁ？　綺麗だったですよねぇ」
【彰人】「渉と桜井さんは二人で見たの？」
【渉】「まあな」
と答え瞬間、桜井は俺にガン飛ばした。
そんなに二人っきりでいたってことを人に知られるのが嫌なのか？
そうなのか？
そうなんだろ！
【彰人】「俺と真央ちゃんはここで見てたんだ」
【真央】「あ、あの、そのぉ」
真央は恥ずかしそうな顔をしてなにかを言おうとしてるみたいだけど、言葉になってない。
ふ～ん。
つまり、俺らが屋根にいた頃、二人はこの縁側で花火を見てたわけか。
俺が屋根の上で決断を迫られてた頃、下ではいい感じだったみたいだな……ふっ。
いいさ、腹壊すまでスイカ食ってやる。
【渉】「そこに置いてるスイカ食っていいの？」
【雪乃】「ええ、どうぞ。そこにある分で足りなかったら、まだ冷えたスイカがあるから言ってね」
【渉】「どんどん持って来い、食って食って食いまくってやる」
【明日香】「ばかじゃないの」
【真央】「麻生さんどうしたんですかぁ？」
【彰人】「ヤケ食いか？」
【渉】「スイカを腹いっぱい食いたい気分なだけだ」

【雪乃】「お腹お壊しちゃうわよ」
【渉】「いいからどんどん持って来い！」
と最初の頃は意気込んでいたが、数分後――スイカを食いはじめて時間が経つにつれて腹の調子が……。
【真央】「麻生さんの顔青いですよぉ」
【彰人】「スイカの食いすぎだろ」
【明日香】「ホントばか」
【雪乃】「どうする麻生君？　あと一玉あるけど？」
すでに5個は食ったと思う。
スイカを食った今までの新記録だと思う。
でも、あと一個は……いや、俺は男になんるんだ！
【渉】「あと一個くらい軽い軽い、早く持って……うぅ」
ぎゅるるるるぅ。
腹が奇妙な音を立てはじめた。
【渉】「ううっ」
ヤヴァイ、胃から上ってきたみたいだ……。
【彰人】「死ぬなこいつ」
限界だ……。
【渉】「ううぅ」
ぎゅるるるるぅ。
限界に達した俺は急いでトイレに駆け込んだ。

――ふぅ、スッキリした。
【雪乃】「もう大丈夫になった？」
【渉】「まあ、なんとか」
まだ少し気持ち悪いけど、腹の方はだいじょぶそうだ。
【彰人】「ったく自業自得だよな」
【渉】「スイカが俺を呼んでいたんだ」
……あれ？
【渉】「桜井は？」

【真央】「帰っちゃいましたよぉ」
【彰人】「おまえがトイレに行ってる間にな」
【雪乃】「今ならまだ間に合うかもね」
ここで桜井を追いかけなきゃ俺って最後まで駄目な男で終わっちまうもんな。
【渉】「俺も帰るわ、うんじゃまたな」
【彰人】「またな」
【真央】「さよならぁ」
【雪乃】「じゃあね麻生君」
3人に見送られながら俺は急いで桜井を追った。

明日香編（１３・未編集）

【明日香】「なんで一緒に帰んなきゃいけないの？」
【渉】「まあ、いいじゃん途中まで」
【明日香】「途中までだかんね」
ちょっと前までだったら、絶対途中まででも駄目とか言われそうだな。
なんか、俺と桜井っていい関係になりつつあるのか？
もしかしたら、いい関係なのか！？
【渉】「あのさ、デートごっこはもう終わっちゃったわけ？」
急に桜井は足を止めて俺の顔を見た。
【明日香】「まだごっこ遊びしたいの？」
なんだか桜井の表情は怒ってるようだった。
どこだ、どこで俺は桜井の地雷原に足を踏み入れた？
ぜんぜん思い当たる節がないんだけど……？
もしかして……もうテメェとなんか遊んでられねぇよ、所詮はテメェなんかアタシの遊び道具なんだよ！！
ってことなのか？
【渉】「もしかして怒ってる？」
【明日香】「……別に」
【渉】「俺がなんか気に触ることしたか？」
【明日香】「……別に」
うわっ、絶対機嫌悪いよ。
絶対なんかで怒ってるよ。
【渉】「俺のせいで怒ってるのかよ？」
【明日香】「存在自体がウザイ」
……撃沈。
なぜだ、なぜなんだーっ！！
だってさ、祭りの時さ、手まで繋いでさ、花火見てさ、桜井だっ

て楽しそうだったじゃん？
何度目だ、いったいこれで何度目なんだ……いい関係になれたと思ったら、突き放される永遠リピート状態。
毎回毎回いい感じになれたと思ったら、桜井の方から突き放してきてさ。
【渉】「ホントおまえの気持ちわかんねぇよ」
【明日香】「別にわかってくれなくてもいい」
【渉】「俺のこと弄んでるのかよ？」
【明日香】「別にそうじゃないけど……」
【渉】「祭りの時だってさ、俺と手繋いで楽しそうにしてただろ？」
【明日香】「あれはごっこ遊び」
【渉】「俺はごっこ遊びだろうと、桜井と手繋げて恋人同士みたいで楽しかったよ」
【明日香】「じゃあ、ごっこ遊び続ける？　延長料金取るけど？」
鋭い目つきで桜井が俺のことを睨みつけた。
……俺は挑発されてるのか、誘惑されてるのか？
ごっこ遊びでもいいから俺としては桜井と恋人気分に浸りたいけど、今のシチエーション的に断った方がいいような気がする。
だってさ、桜井の機嫌明らかに悪そうだしさ。
だけど、誘惑が……。
【渉】「えっと……あのさ……」
【明日香】「ごっこ遊び続けるならウチ寄ってもいいよ」
【渉】「行きます！」
……あはは、俺ってサイテーかも。
俺は桜井に負けた。
人として、男として桜井という女に負けた。
【明日香】「じゃ行こ、今日はあたしの部屋に入れてあげる」
そう言って桜井は俺の腕に抱きついて来た。
桜井の表情はもう怒ってない。
つーか、わかんねぇ！

さっきまで怒ってて、今はもうケロッとしてやがる。
突き放されては引っ張られ、魔性の女だ！？
つーか、仔悪魔だ！
そんなことじゃなくって、根本的に桜井の考えてることがわかんねぇ。
桜井が突き放しては引っ張ってててのは、別に俺のことを弄んでるとかそういうんじゃなくって、なんか引っかかる感じがするんだよな。
……だからそれを魔性の女っていうんじゃ？
ってわけでもないんだな。
つーか、桜井が男を弄ぶ女じゃないって思いたいだけかもしんないけど。

桜井宅へ2度目の侵入成功！
しかも、桜井の部屋にも進入！
つ、ついに俺は桜井のプライベートルームに侵入してしまったのだ！！
部屋の色合いは柔らかい感じで女の子の部屋のような気がするけど、部屋が広いせいかもしんないけど、殺伐としてる感じもあるな。
つーか、そんなことよりも、あのベッドで桜井は寝てるのかぁ。
俺もベッドになりてぇ！！
とモーソーはここらへんで留めて置かないと大変なことになるな。
そんなわけで現実に戻ったところで、さっきから気になっていたことがひとつ。
【渉】「あのさ、ひとつ聞いてもいいか？」
【明日香】「なに？」
【渉】「この音なに？」
さっきから部屋中に流れているＢＧＭはなに？
アップテンポなハードな曲がガンガンにかかってるんだけど。
【明日香】「たぶん奈央が音楽でも聴いてるんでしょ」

【渉】「奈央って誰だよ？」
【明日香】「あたしの兄」
【渉】「女みたいな名前だな」
【明日香】「ホントは女の子が欲しかったんだって。だから兄に女の子の名前つけたらしい」
桜井の兄貴で名前は奈央……どんな野郎か気になる。
つーか、桜井と同じ屋根の下で暮らしてるなんて、将来のお兄様だとしても許せん。
【渉】「桜井の兄貴に会ってみたいんだけど？」
【明日香】「ダメ、絶対にダメ」
【渉】「どうして？」
【明日香】「あんまり家族とかに会わせたくない」
【渉】「写真とかないの？」
【明日香】「写真？」
【渉】「とにかく顔見てみたいんだけど」
【明日香】「……しょーがないなぁ」
部屋の引き出しを開けてガサゴソやりはじめた桜井は、しばらくして一冊のアルバムらしきものを取り出した。
【明日香】「この中にあると思う」
【渉】「どれどれ」
桜井から受け取ったアルバムの1ページ目を開いた。
するとそこには今より少し若い制服姿の桜井が写っていた。
【渉】「これって中学ん時の写真だよな？」
【明日香】「うん」
【渉】「あ、ここに桜井と写ってるの雪乃だろ。見た目も髪型もぜんぜん変わってねぇなあいつは」
俺の知らない頃の桜井を見れるのが楽しくて、俺はどんどんページを捲っていった。
【渉】「これって修学旅行っぽいな？」
【明日香】「うん、修学旅行で京都・奈良に行った時の写真」

【渉】「俺んとこも京都・奈良だっただぜ」
【明日香】「そうなんだ」
【渉】「でさ、奈良で鹿をからかったら鹿の群れに襲われちゃって大変だったんだよ」
【明日香】「ばかじゃないの」
【渉】「どーせ俺は生まれつきバカだよ」
【明日香】「知ってる」
と言って桜井が笑って、俺も桜井につられて笑った。
この雰囲気はいい感じだぞ、頑張れ俺。
【渉】「つーかさ、雪乃と写ってる写真多いよな」
【明日香】「友達って言えるの雪乃くらいしかいなかったから」
……地雷を踏んだ。
しまった、いい雰囲気を壊すようなことを言ってしまった。
俺のバカバカバカーっ。
【渉】「ほら、こっちに雪乃とかと写ってる写真あるけど、この二人って友達だろ？」
【明日香】「雪乃は結構友達多かった。でも、あたしはこの人たち、別に友達とは思ってなかった」
……地雷爆発。
俺のバカバカバカーっ。
どうして過ちの二度塗りをするんだよ。
でもさ、普通、同じ写真に楽しそうに写ってたら友達だと思うだろ。
つーか、雪乃の友達なら桜井の友達でもあるだろ普通。
【渉】「でもさ、高校じゃ雪乃以外にも刹那とか真央ちゃんとか、男友達では彰人とか、あと……俺とかさ。まさかこいつらのことは友達じゃないって言わないよな？　一緒に旅行まで行って友達じゃないとは言わないよな？」
【明日香】「たぶん友達。あたし友達ってよくわかんない」
【渉】「は？」

【明日香】「どうしたら友達って呼べるのかわかんない」
【渉】「雪乃は友達だろ？」
【明日香】「友達っていうよりはとっても大切な人。親友って言ったらいいのかもしれないけど、そういうのってなんか恥ずかしいから」
少し顔を赤くした桜井は、はにかんだ顔をして顔を伏せた。
めっちゃ今の桜井って可愛いぞ。
俺に理性という鎖がなかったら押し倒してたところだ。
【渉】「あのさ、桜井にとって俺って友達なのか？」
柄にもなくちょっと真剣な顔をして聞いて見た。
別に桜井に“友達”って言って欲しいわけじゃない。
桜井にとって俺っていったいなんなのか知りたかった。
【明日香】「さあ？」
悪戯な笑みを浮かべて桜井はそう一言だけ言った。
完全にはぐらかされた。
ま、いいか。
友達とか言われたらそれはそれでショックだっただろうし。
それよりもアルバムの続き見よっと。
どんどんページを捲っていくと、若干今までと雰囲気の違うページに行き着いてしまった。
【渉】「……なにこの人たち。つーか、雪乃の格好も変だぞ」
そこに写っていたのは奇々怪々な俺には理解できい人たち。
【渉】「えっと、こういう人たちってゴスロリっていうんだっけ？」
【明日香】「うん」
【渉】「……雪乃の黒しドレス姿……異様に似合ってるっていうか、悪女だ。つーか、そんなことよりも、桜井だけ普通の格好なんだな」
みんながゴスロリしてる中で桜井だけは普通の服で浮きに浮きまくっていた。
【明日香】「こんな格好恥ずかしくってできるわけないじゃん」
一瞬、俺の頭に過ぎる桜井のメイド姿……可愛い。

【渉】「じゃさ、なんでこんなところに桜井がいるわけ？　雪乃に誘われとか？」
つーか、雪乃にこんな趣味があったとは……。
【明日香】「雪乃はこういうの好きには好きなんだけど、あたしがここにいるのは奈央に来いって言われたから」
【渉】「桜井の兄貴に？」
【明日香】「こっちの写真見て、ここに写ってるバンドのメンバーの中にいるのがあたしの兄」
雪乃と桜井と写ってるカッコイイ男たち。
その中で桜井の指を差している人物……これが桜井の兄貴か！！
【渉】「……カッコイイな」
いや、この写真を見る限り、若干化粧をしていると思われる。
つーか、こういうバンドの人たちって厚い薄いいろいろあるけどメイクしてるからな。
そう、実はブサイクってこともあり得る！
桜井がアルバムの次のページを捲った。
【明日香】「ライブのあとに奈央のバンドのメンバーとファミレスに食事に行った時の写真。これが普段の奈央ね」
桜井の指差したとこにいる男。
【渉】「やっぱカッコイイな」
……なんか男として負けた感じだ。
確かに桜井がこれだけ美形なら兄貴だって美形だよな。
ってことは桜井の両親も美形ってことだよね。
でも、両親の話は触れない方がいいっぽいな。
【渉】「桜井の兄貴ってカッコイイんだな」
【明日香】「そんなでもない。性格ちょー最悪だし」
【渉】「つーかさ、雪乃が常に桜井の兄貴の横をキープして写ってんだけど」
【明日香】「奈央のこと好きみたい」
【渉】「雪乃ってこういうのがタイプなのか……」

【明日香】「観賞用には持ってこいって言ってた」
だんだん俺の中で雪乃ってやつが謎の女になっていく……。
【明日香】「なんだか喉渇いた。渉もジュース飲む？」
【渉】「ああ、もらう」
今日は意地悪されずに飲み物を出してもらえそうだ。
なんか進展って感じ。
【明日香】「ちょっと待ってて……」
部屋を出て行こうとしてドアノブに手を掛けた桜井が急に振り返る。
【明日香】「勝手に部屋いじったら殺すから」
そう言い残して桜井は部屋を出て行った。
……でも、そんなことを言われると逆に部屋を漁りたくなる。
この部屋のどこかに桜井の下着があると思うだけで、俺の心はトキメク。
でも、さすがに下着を探したりするのはマズイよな。
つーか、そもそも部屋を漁るのはよくない。
人としていけない行為だ……けど、いろんな引き出し開けてみてぇ！
でもダメだ。
でも気になる。
でもダメだ。
でも手が勝手にタンスに伸びていくぅ……。
ガチャ！
部屋を開けて入って来た桜井と視線が合う。
ちなみに俺の手はタンスの取っ手にかかっている。
この状況で言い逃れをしようっていうのが無理な話だ。
【渉】「いや、その、ちょっと身体を伸ばしてただけ……」
俺の無理な言い訳を聞いた桜井は、すぐにツカツカと歩いて俺のまん前まで来た。
ヤヴァイ、蹴られる！

【明日香】「はい、ジュース」
あれ、怒られない。
桜井は少し機嫌悪そうな顔をしてるものの、普通に俺にジュースを手渡した。
【渉】「あ、ありがと」
桜井のこの対応が逆に怖かったりして、ジュースを受け取った手がブルブル震える。
【明日香】「男の子だもんね。今回は特別に許したげる。でも、次に不審な行動したら絶交だから」
【渉】「はい、わかりました」
よかった、命の危機はどうにか去ってくれたようだ。
それから俺と桜井は雑談を交わし、どうにか関係は徐々に近づいたように思える。
桜井との会話の最中、俺の視線はあっちこっちを忙しなく動き回り、桜井の部屋を片っ端からチェックしていた。
【明日香】「あたしの話聞いてる？」
なんてことを言われたのもしばしば。
【渉】「ああ、うん、聞いてる聞いてる」
【明日香】「ウソばっか」
【渉】「それよりもさ、浴衣着替えないの？」
【明日香】「あ、忘れてた」
祭りから帰って来てからも桜井はずっと浴衣姿のままだった。
まあ、着替えるヒマがなかったと言えば、俺とずっといたからなかったんだけど。
【明日香】「着替えるから部屋出てて」
【渉】「あ、うん、すぐ出る」
桜井の浴衣姿ともこれでお別れか……着替えないのなんて聞くんじゃなかったかも。
うなじ最高だったんだけどな。
俺は心残りを感じながら桜井に背中を押されて部屋を出された。

廊下の方がやっぱし桜井の兄貴の部屋からガンガンに音漏れしてんな。
つーか、こんなに音出てたら隣の部屋とか上下の階の部屋にも聞こえてるよな。
すんげえ近所迷惑。
廊下に座り込んでしばらく待っていると、桜井の部屋のドアが開いて、桜井が顔だけ出して俺に声を掛けた。
【明日香】「もう入っていいよ」
部屋に入ると当然だけど、桜井はすでに着替えを済ませていた。
しかも、パジャマ姿！
……ヤバイ、いろんなモーソーが頭を駆け巡る。
桜井から目線を外さないと血圧が上がりそうだ。
急いで桜井から目線を逸らした俺の目に飛び込んできたのは、綺麗にたたまれて部屋の隅に置いてる脱ぎたての浴衣だった。
しかも、その浴衣の上にはなにやら他の物体も乗っている？
【明日香】「あ、見ちゃダメ！　隠すの忘れてた！！」
浴衣の上に置いてあったのは桜井の脱ぎたてブラだった。
俺を目にしかと桜井のブラジャーを焼き付けた。
あのブラの映像は決して忘れない。
ブラジャーをすぐさま隠した桜井は少し顔を赤くして恥ずかしそうな表情をした。
【明日香】「渉のえっち」
【渉】「あんな見えるとこに置いとくのが悪いんだろ」
【明日香】「だって……」
って待てよ。
……ブラがあそこに置いてあったってことは、ノーブラか！！
ヤバイ、今なら透視ができそうな気がする（モーソー）。
ああ、桜井の小さな膨らみが……。
【明日香】「さっきからどこ見てんの？」

【渉】「……桜井のこと好きなんだよ」
【明日香】「は？」
我慢の限界だった。
今までだって何度も我慢した。
全部モーソーの中だけで留めてた。
でも、二人っきりのこの部屋で我慢できなかった。
【明日香】「えっ！？」
桜井が目を丸くした次の瞬間、俺の腕は桜井の小さな身体を包み込んでいた。
やっと桜井を俺の胸の中に抱きしめられた。
大きな夢が叶った瞬間だった。
【明日香】「……渉？」
耳元で囁くような桜井の小さな声が胸に突き刺さる。
桜井に殴られたり蹴られたりするかと思ったけど、そんなことはなかった。
桜井は俺の腕の中でじっとしていた。
鼓動が高まり、抱きしめてるのは自分なのに、息が詰まって死にそうだった。
もうここからは歯止めが利かなかった。
頭よりも本能が先走って、身体が勝手に動いちまって、気づいた時には桜井をベッドの上に押し倒していた。
桜井と目が合った……。
そして、桜井の唇に吸い込まれるようにして、俺の顔が桜井の顔と重なる瞬間！
ドゴッ！！
マックス状態だった股間への膝蹴り……ぐぐっ……ううっ……。
あまりの衝撃の俺は声すら出せずに、股間を押えて床の上に寝転んで動きを止めた。
【明日香】「……」
すぐ横に立って俺を見下す桜井の表情は怒りではなかった。

桜井は哀しそうな顔をして俺を見ていた。
けれどそんな桜井の表情もすぐに怒りへと変わって怒鳴り声を上げられた。
【明日香】「出てって……早く出てってよ！」
部屋のドアを指差す桜井。
俺は命じられるままにドアの外に出るしかなかった。
桜井の部屋を走って出て、さよならも言わずにマンションの部屋を後にした。
祭りの後だってのに、とても静かな夜を走って俺は家に帰った……。

あの祭りのあった夜以来、俺の気分は沈みっぱなしで夏休みだっていうのに、ずっと部屋に引きこもっていた。
なんであんなことしちまったんだろうと思っても、後悔先に立たずとはよく言ったもんだと思う。
どこで俺は選択肢を間違えたのか？
桜井はごっこ遊びとか言ってたけど、祭りはいい感じだった。
花火見てる時もいつの間にか手を握っててい感じだった。
問題は帰り道からか？
いや、桜井の部屋に入ってからか？
そう言えば、帰り道の時点で桜井の機嫌が悪かったような……。
でも、そのあとすぐに機嫌なおったよな……なんで？
よ～し、回想モードに突入して、あの帰り道の時のことを思い出すんだ自分。
【渉】「あのさ、デートごっこはもう終わっちゃったわけ？」
ってところから桜井の機嫌が悪くなったような気がする。
【明日香】「まだごっこ遊びしたいの？」
【渉】「もしかして怒ってる？」
【明日香】「……別に」

【渉】「俺がなんか気に触ることしたか？」
【明日香】「……別に」
ここで桜井の表情って怒ってたような気もしたけど、うつむいてなにかを考えるような素振りも見せてたよな。
【渉】「俺のせいで怒ってるのかよ？」
【明日香】「存在自体がウザイ」
ここで桜井キレモードで俺が撃沈したわけで……。
【渉】「ホントおまえの気持ちわかんねぇよ」
【明日香】「別にわかってくれなくてもいい」
今になって思うと、関係が深くなりそうになると桜井って自分の周りに壁を造るんだよな。
ある一定のラインに到達すると相手を突き放す態度取ってさ。
【渉】「俺のこと弄んでるのかよ？」
【明日香】「別にそうじゃないけど……」
【渉】「祭りの時だってさ、俺と手繋いで楽しそうにしてただろ？」
【明日香】「あれはごっこ遊び」
【渉】「俺はごっこ遊びだろうと、桜井と手繋げて恋人同士みたいで楽しかったよ」
【明日香】「じゃあ、ごっこ遊び続ける？　延長料金取るけど？」
ここで桜井が俺のこと睨み付けたんだよな。
【渉】「えっと……あのさ……」
【明日香】「ごっこ遊び続けるならウチ寄ってもいいよ」
【渉】「行きます！」
ここか！！
ここの選択肢が間違ってたのか！？
いや、でもここからいきなり桜井の態度がケロッとした態度になって、怒ってた桜井なんてどこ行ったんだよって感じだったよな。
【明日香】「じゃ行こ、今日はあたしの部屋に入れてあげる」
そう言って桜井は俺の腕に抱きついて来て……。
……やっぱわかんねぇ！！

これと同じ回想を何度したことか……。
それでもやっぱわかんねぇ！
よし、次の回想に行くぞ。

桜井の部屋でアルバム見たり、雑談したりしてた時は和やかな感じでよかったと思う。
でも、やっぱあそこだよな。
【明日香】「さっきからどこ見てんの？」
【渉】「……桜井のこと好きなんだよ」
この時点で俺の頭ん中は桜井のカラダのことだけだったかもしれない。
【明日香】「は？」
とにかく桜井を自分のモノにしたくて、気づいたら桜井のこと抱きしめてて……。
【明日香】「えっ！？」
すごく心地よかった。
【明日香】「……渉？」
……ここで桜井の声質って驚いた声だったのかもしれない。
でも、あの時は耳元で囁かれて、下半身が押えられなくて、好きな女とエッチしたいってことばっかりで、理性なんて吹っ飛んで……。

で、キスを迫って股間蹴られた。
あとになってみれば、とんでもないことしたと思う。
だってさ、よく考えるまでもなく俺たちって付き合ってたわけでもないし、桜井の気持ちを直接聞いたわけじゃなかった。
順序が間違ってたよな。
互いが好きだってこと確認して、付き合って、キスしてエッチして……。
ってその最終目標がエッチしてってのがそもそも間違いなのかも。
桜井のカラダばっかり求めて、カラダの繋がりを求めようとして

たのがダメだったのかな。
でも、結局のとこは俺の頭ん中だけのシミュレーションだけで、桜井の意見なんてぜんぜん聞いてないもんな。
もう、わかんねぇよ！！

……はぁ、ダメだ。
なんど回想しても答えがでない。
つーか、やっぱ桜井に会って話した方がいいのか……？
チャンスは今日なんだよな。
学校で実行委員の集まりがあるんだけど、桜井が来るのか来ないのか？
俺と顔合わせたくないよな普通は。
来ないよな、普通は来ないよ。
ベッドに横になって天井を見上げた。
この繰り返しが何度続けば終わるんだろう。
ふと、枕元に置いてあったケータイに目が行く。
実は桜井の番号だけ聞けてない。
彰人の番号は知ってて当然だし、雪乃は雪乃から教えてもらったし、真央の番号は俺から聞いて、嬢王様は担任だから知ってるし、刹那はもともとケータイ持ってない。
……桜井だけ知らないだよな。
こういう時ケータイがあれば連絡付くし、メールって手もあるし。
でも、やっぱメールとかよりも直接会って話した方がいいんだろうな。
雪乃にヘルプを出すって手もあるけど、そういう姑息な手段で桜井に嫌われるって可能性もあるしな。
いくら考えてもダメな時は行動あるのみ！！
って気力も今はもうない。
ケータイの着信音が鳴った。
ディスプレーを見ると神楽雪乃って表示してあって、すぐに俺は

電話に出た。
【雪乃】《ちゃんと起きてたかしら？》
【渉】「ちゃんと起きてたよ」
【雪乃】《夏休みだからって昼過ぎまで寝てるかなって思ったんだけど。でも、それにしては眠そうな声してるけど？》
眠いんじゃなくって沈んでるんだよ。
【渉】「ちょっと疲れてるだけ」
【雪乃】《夜更かししてたんでしょ？　夜更かしなんてよくないわよ》
だから違うって。
【渉】「そんなこと別にどうでもいいだろ。つーか、なんで電話かけてきたんだよ？」
【雪乃】《今日、実行委員の集まりがあるの覚えてる？》
【渉】「そんなこと覚えてるよ」
【雪乃】《覚えてなかったら教えてあげないといけないし、寝たたら起こしてあげないといけないから》
【渉】「それだけの用かよ」
【雪乃】《いちよう私がみんなの連絡役だから。じゃあ、今日は遅刻しないで来るのよ》
【渉】「ちょっと待った、聞きたいことがある」
聞きたいことっていうのはもちろん桜井のことだ。
俺と桜井を繋ぐものとして雪乃の存在は大きい。
【雪乃】《なにかしら？》
【渉】「桜井のことなんだけど」
【雪乃】「明日香のこと？」
【渉】「俺のことなんか言ってなかったか？」
【雪乃】「別になにも聞いていないけど、明日香となにかあったの？」
【渉】「いや、いいんだなにも聞いてなかったら」
【雪乃】《明日香となにかあったのね。昨日明日香と会ったけど、

いつもと変わらないような気がしたけど……あの子は演技をすれば演技も上手いから》
【渉】「いいんだよ別に……。今日は遅刻しないで行くから、じゃあな」
【雪乃】《私はいつでも麻生君の味方よ。じゃあ、遅刻しないで来るのよ》
通話を切ってケータイをベッドの上に放り投げる。
ケータイがベッドの上で一回ジャンプして床に落ちた。
……落ちやがった。
ついてない感じだな。
【渉】「よし！」
俺はベッドから跳ね起きてケータイを拾った。
まあとにかく着替えて学校行くとすっか。

電車に揺られながら学校に向かう。
気分はかなりウツ。
桜井と顔を合わせたくないのは俺の方かもしれない。
つーか、どんな面下げて桜井に会えばいんだよ。
窓の外を眺めてもちっとも気分は晴れない。
しかも、追い討ちをかけるように曇りだし。
途中の駅で電車が停車しようとする。
【渉】「……あっ！」
思わず口に出してしまった。
ホームに立ってるの桜井じゃんか！！
ヤバイ、実にヤバイ。
電車が止まり、桜井は俺の乗ってる一つ前の車両に乗った。
危なかった、同じ車両に乗り合わせたらヤバかったよな。
平日のこんな時間じゃ車内ガラガラで絶対顔合わせるもんな。
ここで俺は選択をしなければならない、桜井の乗ってる車両にわざわざ行くか、それともこのまま知らん振りするか……。

行くべきか行かざるべきか。
ここで桜井のとこ行ったらある意味二人っきりで気まずいよな。
周りに彰人とか雪乃とかいてくれれば少しは状況が楽なんだが……。
よし、決めた！
1．やっぱ行けねぇ！――※005_1へ
2．桜井のところに行く――※005_2へ

明日香編（１４・未編集）

俺には無理だ。
そんな勇気ねぇ！
結局俺はへたれだよ。
どこまで行ってもへたれなんだよ。
どうせ学校行ったら顔合わせるんだし、学校行けばみんなもいるだろうし。
焦るな自分。
焦っていいことなんて一つもない。
果報は寝て待てってことわざもあるくらいだ。
――電車が駅について電車から降りる。
桜井が前を歩いてるのを見て、すぐに俺は物陰に隠れた。
完全に怪しい人だ。
だが、そんな周りの目よりも、今は桜井の目の方が大事。
桜井に見つかったら困る！
でも、こんな風に桜井のあとをコソコソついてくなんてストーカーみたいだよな。
改札口を出て、駅前のアーケード街を抜けて、学校までの道のりをハラハラドキドキで歩く。
かつてこんなにも学校の道のりをハラハラドキドキしたことがあっただろうか？
いや、ない！
そんなことを考えながら歩いてるうちに学校に着いてしまった。
桜井が昇降口に入って上履きに履き替えてから、階段を登っていくのを確認してから俺も上履きに履き替えて教室に向かう。
大丈夫だ、教室に行けばみんないるから桜井と何気な～く会話もできる。
俺は教室のドアを開けた中に入った。

……桜井しかいねぇ！！
教室には桜井がひとりがいるだけ、他のやつらが来てねぇ！！
しかも、席についていた桜井を俺の顔を見たとたん、なにも言わずに机に突っ伏して寝たふりしやがった。
仕方なく俺も席に座るが、桜井とは少し距離を置いた。

明日香編（１５・未編集）

空気が重い。
桜井と二人っきりの教室はシーンと静まり返り、空気が重い。
寝たふりしてる相手にわざわざ話しかけるのもなんだし、俺はどうしたらいいんだ！
そもそも遅刻しないで来たのがマズかった。
いつも通り遅刻してればみんなが先に来てて、桜井と二人っきりなんて悪夢な状況にはならなかったはずだ。
つーか、雪乃はどうした！
待ち合わせの時間の１５分前に来るのは当然みたいなこと言ってただろ！
時計の針はちょうど集合の時間の１５分前を指していた。
ガラガラと教室のドアが開いて誰かが教室に入って来た。
【雪乃】「あら、麻生君が遅刻しないで来るなんて」
ありがとう雪乃！
【雪乃】「こんにちは明日香」
雪乃に声を掛けられて顔を上げる桜井。
【明日香】「うん」
よかった、マジで雪乃が来てくれてよかった。
教室のドアが再び鳴って刹那が入って来た。
【刹那】「みんな久しぶり、元気にしてたかい。もちろんボクは元気だよ。あっ、マイハニーっ！」
桜井を発見した刹那がいきなり猛ダッシュで桜井に抱きついた。
【刹那】「明日香に会えなくて寂しかったよ。来る日も来る日も明日香のことでボクの頭はいっぱいさ」
【明日香】「苦しいから離れてよぉ」
【刹那】「もう君のことは決して放さない」
ガラガラとドアが開いて、今度は彰人と真央が教室に入って来た。

【彰人】「みんな久しぶり」
【真央】「こんにちわぁ！」
よかった、場の空気が軽くなってきたぞ。
適当な雑談がはじまり場の雰囲気が明るくなっていく。
けど、桜井と俺は直接会話を交わすことはなかった。
だいぶ時間が経ってから嬢王様が教室に入って来た。
【沙羅】「ハ～イ、エブリバディ！　元気にしてたかしらぁん。アタシに会えなくて泣いてたなんてないわよね」
てなことで会議にもならない会議がはじまったわけだが、俺はほとんど話した内容を覚えてない。
ずっと桜井のことが気になっててそれどころじゃなかった。
桜井に気づかれないようにずっと桜井のようすを探って、桜井と目が合いそうになると逸らしての繰り返し。
【彰人】「渉、話聞いてるのか？」
【渉】「ああ、聞いてる聞いてる」
【刹那】「う～ん、さっきから渉クンは上の空って感じだねェ」
【雪乃】「明日香もなんだかちょっと変よ」
【明日香】「……別に」
なぜか全員の視線が俺に向いた。
……なんで俺のこと見るんだよ。
確かに原因は俺にあると思うけど……。
【明日香】「もう決めること決めたんだから終わりにしよ」
【沙羅】「ダメよ、まだ終わってないわぁん！」
【彰人】「だから、さっきから言ってますけどスクール水着は無理です」
【沙羅】「スクール水着は外せないわぁん！」
【渉】「えっと、ナースにメイドに巫女にチャイナに……あとなんだっけ？」
【真央】「猫耳ですぅ」
【雪乃】「それとゴスロリよ」

【沙羅】「あとスク水もよ！」
【彰人】「だからダメですって」
【刹那】「でも、スクール水着の発注しちゃったよ」
【渉】「なんでももう発注してんだよ」
【沙羅】「アタシが刹那に発注させたからに決まってるじゃない」
今回のウチのクラスの出し物の経費の大部分は刹那のポケットマネーから出ていて、その財布の紐を握っているのは嬢王様だった。
【彰人】「メニューも衣装も大方決まったし、あとは誰がどの衣装着るかクラス全員で話し合えばいんじゃないですか？」
【沙羅】「そうねぇん、とりあえず実行委員の仕事はひと段落かしら。でも、スク水は絶対に入れるわよ」
【渉】「じゃ、解散ってことだな」
みんな席を立ちはじめて還る準備をする。
【真央】「あ、あのぉ、高瀬さん、お昼一緒に食べて帰りませんか」
【彰人】「うん、いいよ」
彰人は真央の手を握り、二人はさっさと教室を出て行った。
あの二人の関係はどこまで進展してんだ。
つーか、彰人のヤロウ、ぜんぜん真央との関係俺に話してくんないし。
【雪乃】「明日香、一緒に帰りましょう」
【明日香】「ううん、ひとりで帰る」
そう言って桜井は教室を出て行った。
【刹那】「今日の明日香なんか変だったね。ボクとしては心配で心配で堪らないよ。ちょっと明日香のこと追って来るよ」
【沙羅】「待ちなさい刹那。あなたが行っても意味ないわ」
嬢王様が俺の顔を見つめる。
【沙羅】「なにかあったのかしら？」
【渉】「なんで俺に聞くんでスか」
【雪乃】「麻生君、明日香を傷つけることしたら、私が許さないわよ」

そう言って雪乃は静かに微笑んだ。
怖い、その笑みは怖い……裏に殺意を感じる。
はぁ、追うしかないよな。
俺が桜井のとこ行かなきゃいけないよな。
やっぱ行動あるのみなんだな。
俺は教室を飛び出して桜井を追った。

桜井に追いついたのは歩道橋の上だった。
そして、そこで桜井の方から俺に声をかけてきた。
【明日香】「なんでついて来るの“麻生”？」
……微妙な言葉の変化だった。
けれど、俺にとってそれはとても大きなことだった。
そう、桜井は俺のことを“麻生”と呼んだのだ。
【渉】「話したいことがある」
【明日香】「あたしはない」
――会話終了――
……ダメだ、ここでひと押しするんだ自分。
【渉】「……あのさ」
【明日香】「なに？」
桜井の相手を威圧する鋭い瞳にも怯むことなく、俺は話を続けた。
【渉】「こないだはゴメン、俺が悪かった」
【明日香】「なにが？」
強い口調で桜井は返してきた。
なにがって、絶対にわかってて聞いてるよな。
つーか、あの時の状況を口にしろってことかよ。
【渉】「祭りのあった日のことだよ。あの日の桜井の部屋で俺がしたこと謝ってんだよ」
【明日香】「ふ～ん、なんで謝るの？」
【渉】「そんなの悪かったって思ってるからに決まってるだろ」
【明日香】「じゃ、最初からしなきゃよかったのに、なんであんな

こととしたの！」
明らかな怒りを示す桜井を前に俺は少し身構えた。
完全に落ち度は俺にある。
責められても言い訳できないし、責められるのは当然だと思う。
けど、俺は思う――俺をあんな行動に走らせたのは、桜井の態度にも問題あると思う。
【渉】「……俺は桜井のこと好きだって言ったし、付き合ってくれとも頼んだことあんのに、桜井の態度がいつまで経ってもハッキリしないのが悪いんだろ！」
【明日香】「……だって」
急にしゅんとなりうつむく桜井。
最近はなんとなく桜井のことがわかってきた。
桜井と距離が近くなって、ある一定のラインを超えると、桜井は壁を造って相手を突き放す。
それが桜井の俺に対する思わせぶりな態度に繋がってる。
【渉】「おまえは逃げてんだよ。人と深く関わり合うことから逃げてんだよ！」
【明日香】「……」
桜井はなにも言わない。
【渉】「今から俺が言う言葉にちゃんと答えろよ」
不安な顔をした桜井がゆっくりと顔を上げ、俺の事を見るが視線は下を向いている。
目を閉じ、深く息を吐いて呼吸を整えた俺は、目を開けると同時に腹から声を出した。
【渉】「俺と付き合ってくれ！」
【明日香】「……」
【渉】「……」
長い沈黙が二人を包み込んだ。
自分の息を呑む音が鳴り響く。
桜井は自分の襟元からあのハートペンダントを出すと、泣き叫ぶ

ような声を張り上げた。
【明日香】「もう全部終わったの！」
そして桜井はペンダントを歩道橋の上から投げ捨てた。
【渉】「あっ！？」
俺はすぐさま歩道橋の下を見たが、ペンダントはちょうど下を走っていたトラックの荷台に乗り、手の届かない遠くに運ばれてしまった。
泣きながら走っていく桜井の背中を追うことできず、俺はただそこに立ち尽くすだけだった。
そう、桜井との大きな繋がりが切れてしまった。
あのペンダントは俺と桜井を結びつけるとってもとても大きな存在だった。
どんよりとした空から大きな雨粒が落ちはじめ、やがて当たりは土砂降りの雨に見舞われた。

次の日、俺は風邪で寝込んだ。
その次の日も次の日も――。
そして、始業式の日も休んだ。
家に引きこもってベッドでひたすら寝てるだけだった。
ずっと寝込んでいた間は、ケータイの電源をオフにして誰とも連絡を取らなかった。
そして、始業式の次の日も学校を休み、その日、久しぶりにケータイの電源を入れた。
メールをチェックするとなんかスゴイことになってた。
一番新しいメールは雪乃のからだった。
――今日行くから。
って本文に一言書いてあった。
【渉】「はっ？」
これよりも過去に受信したメールを見ればわかるかも。
――このメールは見てくれてるかしら？　今日はちゃんと明日香

は学校に来たけど、ようすが可笑しいのよね。麻生君、なにか知ってるかしら？

――始業式の日に二人揃って休むなんてどうしたの？　明日香は数日前から連絡つかないし、麻生君なにか知ってるかしら？

過去の受信メールを読んでいくうちになんとなく状況がつかめてきた。

ピンポーンと家のチャイムが鳴った。

玄関に出たいとも思わないし、ここから動きたいとも思わなかった。

ベッドの上で寝転びながらやり過ごす。

ピンポーン♪

ピンポーン♪

ピンポーン♪

ウザイ！！

つーか、家のヤツ誰かいないのかよ……って、たぶん俺だけか。

ピンポーン♪

ピンポーン♪

ピンポーン♪

いったい誰だよ！

つーか、悪意を感じる。

仕方なく俺は玄関に向かってドアを開けた。

【渉】「誰だよ！」

【雪乃】「訪問者に対していきなり怒鳴りつけるなんて信じられないわ」

【渉】「……なんだ雪乃か」

【雪乃】「なんだって、もしかして私が今日送ったメールも見てないの？」

【渉】「今さっき見た」

【雪乃】「それじゃあ家の中に上がらせてもらうわね」

【渉】「ちょっと待て！」

俺はドアを閉めようとしたが、雪乃がドアの隙間に足を滑り込ませ、ドア閉めさせようとしない。
【雪乃】「どうして追い出そうとするのかしら？　なにか不都合なことでもあるの？」
【渉】「いや……ない」
【雪乃】「じゃあ上がらせてもらうわね」
雪乃は笑みを浮かべていたが、ドアを無理やり開けようとする手にはスゴイ力がこもっていた。
無駄な抵抗をする気力もなかった俺は、しかたなく雪乃を家の中に上がらせ、2階の俺の部屋まで案内した。
【雪乃】「あら、案外綺麗な部屋なのね」
【渉】「案外は余計だ。つーか、なにしに来たっていうか、どうして俺の家を知ってんだよ？」
【雪乃】「家くらい上條先生に聞けばわかるじゃない。でも、少し迷ったかしら」
【渉】「で、なにしに来た？」
【雪乃】「なにって、麻生君が風邪を引いたって聞いたからお見舞いに来たんじゃない」
……ウソだな。
風邪くらいで見舞いに来るヤツがいるか普通。
【渉】「俺が風邪だって知ってんなら、あんまし近づくなよ、うつるから」
そう言って俺は雪乃に構うことなくベッドの中に潜り込んだ。
【雪乃】「あら、本当に風邪なの？」
【渉】「そうだよ」
ベッドに潜る俺のおでこに冷たい手が乗った。
【渉】「冷てっ！」
【雪乃】「あら、本当に熱があるのね。私はてっきり仮病かと思ってたのに」
風邪で学校休んだのは本当だけど、病は気からって言うし、学校

を休みたかった理由は別にある。
【雪乃】「すごい熱ね」
【渉】「だからマジで風邪なんだって」
俺のおでこから手を放した雪乃は、今度はもう片方の手を俺のおでこに乗せてきた。
【雪乃】「私の手って冷たくて気持ちいいでしょ？」
確かに雪乃の手は冷たくていい感じだった。
それとおでこに手を乗っけてもらってるとなんか落ち着く。
つーか、夏なのになんでそんな手冷てぇんだよ。
【渉】「雪乃って冷え性なのか？」
【雪乃】「ええ、夏でも長袖しか着ないわね」
【渉】「へぇ」
雪乃の手が俺の体温で少しずつ温かくなっていき、やがて雪乃は俺のおでこから手を放した。
【雪乃】「お昼なにか食べた？」
【渉】「食ってない」
【雪乃】「本当はおかゆの方がいいかもしれないけど、私のお弁当でよかったら食べる？」
そう言って雪乃は自分の通学バッグの中から弁当を出した。
【渉】「なんで弁当なんて持ってんだよ。つーか、食いかけとかじゃないだろうな？」
【雪乃】「今日の授業って午前中までだったんだけど、間違ってお弁当作って持てちゃって……」
【渉】「アホだな」
【雪乃】「アホって失礼よ」
そう言って弁当を再びバッグの中にしまおうとした雪乃を止めた。
【渉】「食うからしまうなよ」
【雪乃】「人のことアホって言っておいて少し自分勝手だと思わないの？」
【渉】「それは謝るから弁当くれ。朝も食ってないから腹減ってん

だよ」
【雪乃】「あ、私の箸しかないわ。私の箸でもいい？」
【渉】「別にそーゆーの気にしないから」
雪乃の弁当は普通だった。
普通ってのは悪い意味じゃなくて、見た目・食材のバランスが良くて、豪華なわけじゃないんだけど『これぞお弁当の代表です』みたいな弁当だった。
【渉】「美味そう」
【雪乃】「味は私が保証するわ」
【渉】「これって雪乃が作ったのか？」
【雪乃】「ええ、自分のお弁当は自分で作ってるから」
【渉】「家の家事とかもやったりするのか？」
【雪乃】「ええ、掃除洗濯……でも、料理は母の方が上手かしら」
雪乃の母親ってスゴイ美人だったような気がする。
そーいえば、雪乃も美人系だもんな。
【雪乃】「私の顔じっと見てどうしたの？」
【渉】「いや、なんでもない」
雪乃の弁当は想像を裏切らない美味さだった。
家事もこなせて料理も美味い、嫁さんにしたいタイプって感じだな。
【雪乃】「ところで麻生君、明日香となにかあったの？」
【渉】「ゲホッ、ゲホッ……」
いきなり直球で質問。
思わず俺はご飯を喉に詰まらせた。
【渉】「は！？　なにが？」
【雪乃】「とぼけないで。そうね、最初になにかがあったとしたらお祭りのあとで、その後に酷くなったのは、こないだの実行委員の集まりの後かしら？」
……ズバリ的中だ。
【渉】「別に話すことない」

【雪乃】「どうしても話してくれないの？」
【渉】「話すもなにも、なにもないんだから話す内容がない」
【雪乃】「そうやってウソをつくのね。私のとって明日香も麻生君も大切だから、本当に心配してるのよ。だから、言いなさい」
にこやかに微笑む雪乃。
この笑みは脅迫の笑みだ。
【渉】「だから……」
【雪乃】「明日香と麻生君のことじゃなかったら、こんなに深く立ち入ろうとしないわ。でもね、問題の根底を抱えているのは二人かもしれないけど、周りの人たちも心配して問題を抱えることになるのよ」
【渉】「他人のことなんて心配しなきゃいいだろ」
【雪乃】「そんなことできないわ。明日香も麻生君も私にとってもどちらも同じくらい大切なのよ」
【渉】「……」
【雪乃】「こないだの実行委員の集まりの後から明日香と連絡が付かなかったの。明日香の家にも行ったけど、居留守を使われたわ。あの時は凄くショックで、明日香と距離を感じて悲しかったわ。その明日香が今日、学校に来たの。とても普通だったし、みんな普段どおりの明日香に見えたと思う。けどね、私には違って見えたの。今日の明日香は私にも大きな壁を造っていたのよ」
雪乃は泣きそうな顔をして俺のことをじっと見つめていた。
【渉】「……話すよ、祭りの後のことから話すから……」
俺は雪乃にこと細かく桜井とのことを話して聞かせた。
祭りの後に桜井の家に行く道での出来事。
桜井の部屋で俺が桜井にしたこと。
そして、雨が降った日の歩道橋での出来事。
雪乃は俺が話してる間、一回も口を挟まずに真剣な顔つきで俺の話を聞いていた。
俺が全てを話し終えると、雪乃は深く息をついて、難しそうな顔

をした。
【雪乃】「……明日香のバカ」
てっきりと俺が雪乃に責められるものだとばかり思っていた。
桜井の部屋で俺がしたことを考えれば、責められるの当然だと思っていたのに……？
【渉】「桜井がバカって……？」
【雪乃】「もちろん麻生君もバカよ。でもね、明日香の方がもっと大ばか者よ」
【渉】「どうしてだよ、桜井を押し倒してキスしようとしたんだから、俺が嫌われるのは同然だし、俺が一方的に悪いだろ」
【雪乃】「もういいわ、麻生君はいくら考えてもわからないみたいだから、私の口から全部言うわよ、いいわね？」
【渉】「え、あ、言うって？」
【雪乃】「明日香の気持ちよ。こんなこと私が言うべきことじゃないのはわかってるけど、もう言うわよ」
雪乃の口調は今まで溜りに溜まっていたモノを吐き出すようだった。
【雪乃】「明日香は麻生君のこと好きよ」
【渉】「えっ！？」
【雪乃】「驚くことないでしょ、麻生君だってそこまで鈍感じゃないでしょ？」
【渉】「でも、そうかと思うと突き放される感じもあって……」
【雪乃】「明日香は人と深く付き合うのが苦手なのよ。だから、麻生君のことが好きで、自分に近づいてきて欲しいと思うけど、いざ本当に相手が近づいてくると怖くなるのよ。あの子はすごく臆病なのよ」
【渉】「近づいたら逃げるなんて、だったら俺にはどうしようもないだろ」
【雪乃】「そうね、明日香が変わらないといけないのよね……」
雪乃は黙って考え込んでしまった。

俺は明日香に自分の気持ちを伝えたけど、桜井は俺から離れていく。
どうやったら桜井に俺のこと好きって言わせるかなんかわかるわけないだろ。
やっぱし、桜井が変わらないと俺にはどうしようもないのか……。
【雪乃】「そうね、きっと明日香はいつでも麻生君から告白されるの待ってたんだと思うわ」
【渉】「告白ならしたぜ」
【雪乃】「でも、明日香はいざ告白されると、どうしていいのかわからないんでしょうね。だから麻生君のことを自分から遠ざけようとする。そう言えば、さっきの麻生君の話の中で気になる明日香の言葉があったわ」
【渉】「どんな？」
【雪乃】「“ごっこ遊び”」
【渉】「ごっこ遊び？」
【雪乃】「そう、ごっこ遊び。明日香はごっこ遊びの関係じゃ嫌だったのよ、だから麻生君に押し倒されてキスされそうになった時、すごく反発したのね、きっと。そう言うことは、お祭りの時だったら明日香も心の準備ができたていたのかもしれないわね」
【渉】「つまり？」
【雪乃】「お祭りの日だったら告白されても素直になれたんじゃないかしら？」
……あの時か、花火の時だな絶対に。
つーか、桜井ってなんつー気まぐれっていうか、タイミングが難しいっていうか……。
【渉】「でも全部終わったよな。もう桜井は俺から完全に離れちまった」
あのペンダントを桜井が投げ捨てた瞬間に、俺にとって桜井は遠い存在になった。
【雪乃】「時間が解決してくれるのを待つしかないわね。きっと麻

生君にまたチャンスが巡ってくるから、その時は絶対に逃しちゃダメよ」
【渉】「雪乃っていいヤツだな。ホントにいい友達だよ」
【雪乃】「そうね、いい友達でよかったわ……」
雪乃は静かに微笑むと身支度をはじめて帰る準備をしだした。
【渉】「帰るのか？」
【雪乃】「ええ、それともまだ私にいて欲しい？」
【渉】「いや、別に。それよか、弁当まだ食い終わってないから、明日か明後日にも洗って弁当箱返す」
【雪乃】「うん、わかったわ。それじゃあ、麻生君お大事にね」
優しい笑みを浮かべながら、雪乃は小さく手を振って俺の部屋を出て行った。

日々は過ぎていく。
学校は学園祭の準備で忙しくなく、俺もその中でただ流されるだけだった。
桜井とは口を聞いていない。
俺が桜井の近くに行くと、桜井の方から立ち去ってしまう。
だから俺もいつの間にか桜井から距離を置くようになった。
時間が解決してるくるっていうけど、俺の時間は無限じゃないんだ。
いつかなんて待っていられない。
だから、俺は今でできることを精一杯やった。
そして、運命を賭けた学園祭が来た。

ウチのクラスの出し物はコスプレカフェ……こんな出し物がＯＫになったのは嬢王様の権限以外のなにものでもないと思う。
嬢王様が最後まで粘ったスクール水着は結局ナシということで落ち着いた。
でも、女子全員コスプレは強制的に実行された。

ちなみに嬢王様がスク水をあきらめた最終的な理由は『季節が違う』の一言だった。
コスプレカフェは大盛況でカメラを持った客が異様に多く、撮影会が有料で行われたりもしてる。
たぶん、このカフェの売り上げは嬢王様の財布に入るんだろうなと思うと、ちょっと悔しい気がする。
今のところで回るとこのない俺は、カフェの中をうろちょろしながら時間を潰していた。
すると、彰人が少し慌てたようすでやって来て俺に声をかけてきた。
【彰人】「よぉ、渉」
【渉】「あれ、彰人。真央ちゃんといっしょじゃなかったのかよ？」
【彰人】「それがはぐれちゃってな」
【渉】「ケータイは？」
【彰人】「繋がらない。メールも送ったんだけど返ってこない」
【渉】「ふ～ん」
彰人の話を聞きながら『友情より愛を取りやがって』とちょっと思う。
まあ、単純に嫉妬なんだけどさ。
彰人と真央の仲は見てて、ほんわかしてる感じでいい感じだと思うから、影ながら応援してるぜ！
【彰人】「真央のこと見たら教えてくれよな、じゃ」
彰人は俺に手を振ると足早に去っていった。
……はぁ、彰人のやつはいいよなぁ。
つーか、俺はこんなとこでブラブラ時間潰してなにやってんだよ。
【雪乃】「麻生君、さっきからヒマそうね」
【渉】「あ、雪乃」
巫女服雪乃見参！！
【渉】「やっぱ巫女服似合ってるな」
【雪乃】「そうかしら？　でも、別に私の場合はコスプレじゃない

んだけど。本当はゴスロリがしたかったわ」
【渉】「俺は巫女服の方が好きだけど」
【雪乃】「あら、そう、ちょっと嬉しいわね。ところで麻生君ヒマしてるなら私と一緒に回らない？」
【渉】「カフェの仕事は？」
【雪乃】「シフト交代で今はヒマなのよ」
【渉】「俺なんかじゃなくて他のヤツと回ったら？」
【雪乃】「明日香と回ろうと思ってたんだけど、明日香の姿が見当たらなくて」
俺は代役か。
そんなことより、そう言えば桜井の姿って朝見たっきりだな。
【雪乃】「グラウンドでライヴやってるの見たいのよ。だから早く行きましょう」
そう言えば、今年はインディーズのいろんなジャンルのバンドが来てるらしい。
……雪乃の目当てはなんとなくわかるな。
【渉】「俺はあんまし興味ないんだけど」
【雪乃】「そんなこと言わずに、ね？」
雪乃に腕を引っ張られた俺は強引に歩かされた。
【渉】「つーか、巫女服のまま行くのかよ？」
【雪乃】「着替えるのめんどくさいし、早くしないと奈央様を見逃すわ！」
……雪乃の目がいつもと違う。
なんか爛々と輝いてる。
あれ、奈央って？
【渉】「奈央ってもしかして？」
【雪乃】「明日香のお兄様よ」
【渉】「マジか！？　それは見逃す事なかれだ！」
桜井兄の実物は見なくちゃいけない。
見ないと俺はこの先、一生後悔することになる……っていうのは

言いすぎか。
でも、とにかく見たい！
【雪乃】「早く行くわよ」
【渉】「おう！」
いつの間にか俺も目を爛々と輝かせて雪乃と一緒に走っていた。

ライヴを見終わって恍惚とした表情をしてる雪乃を横目で見る俺。
完全に今の雪乃は夢の世界に没入してる。
【雪乃】「嗚呼、奈央様はいつ見ても最高ね」
生桜井兄はカッコよかった。
なんか男としてすんげえ敗北感を感じた。
【渉】「でも、歌ってる曲はよくわからなかった」
【雪乃】「なに言ってるの？　奈央様の描く世界観は最高じゃない！」
……目が、目がいつもの雪乃と違う。
あんまり雪乃に反発しない方がよさそうだ。
雪乃と一緒にグラウンドでやってる屋台を見て回った。
グランドでは飲食系の出し物が多くて、校舎内は文化部とかの展示とかが多い。
毎年なぜかお腹いっぱいになる学園祭っていうのは有名な話。
ちなみに校舎内は今日だけ土足ＯＫなんだけど、毎年次の日の清掃で死ぬ思いをする。
俺は毎年学園祭の片付けはサボってんだけど。
【渉】「……なんか騒がしいぞ？」
【雪乃】「なにかしら？」
辺りがなんだか騒がしい。
騒がしいって言うか、叫び声とかが聞こえてくるんだけど？
【渉】「あれか！！」
人の間を掻き分けて失踪する物体とそれに跨る人影。
【雪乃】「まあ、刹那君みたいね」

【渉】「なんでグラウンドに馬！？」
白馬（暴れ馬）に跨りグラウンドを駆け回ってる刹那の姿が目に入った。
……意味わかんねぇ！
お好み焼き屋に突っ込みながらなおも爆走する刹那を乗せた馬。
【雪乃】「こっち、来るわね」
刹那を乗せた馬がどんどんスピードを上げながらこっちに走ってくる。
【渉】「つーか、来るな」
哀れな犠牲者（男子）を跳ね飛ばした馬は、ようやく俺たちの目の前まで来て足を止めた。
【刹那】「やあ、渉クンに雪乃クン！」
【渉】「爽やかに『やあ』じゃないだろ。思いっきり人はねただろ」
【刹那】「大丈夫だよ、死んでもすぐだったら蘇生できるから」
ぜんぜん大丈夫な話じゃないと思うの俺だけか。
つーか、ぜんぜんダメだろ。
【雪乃】「ところで刹那君、その馬なにかしら？」
【刹那】「舞台で本物の馬を使おうと思ってね」
舞台って、確か刹那って演劇部の部長だったよな。
いや、そんなことより、こんな暴れ馬を舞台で使えんのか本当に？
【刹那】「そうそう、すっかり忘れるところだったよォ。渉クンにお届け物だよ」
そう言って刹那はポケットの中から小包を出して俺に手渡した。
【渉】「あれが見つかったのか！？」
【刹那】「うん、サハラ砂漠で鳥取砂丘の砂を見つけるよりぜんぜん楽勝だったよ」
【渉】「サンキュ刹那！　マジで助かった。このお礼はそのうちするから！」
【刹那】「お礼なんて別にいらないよ。それよりも頑張ってね、応援してるよ」

刹那はそう言って手を振りながら豪快に馬をかっ飛ばして消えた。
【雪乃】「その小包は？」
【渉】「桜井と俺を繋ぐ絆って感じかな」
これがないと桜井といくら話してもダメだと思ってた。
本当は自分の力で探したかったけど、それは無理な話で刹那に頼んで探してもらった。
これさえあれば桜井とちゃんと話せる気がする。
【雪乃】「……私はいつでも渉の味方だから、頑張りなさい」
【渉】「ありがとな。そんじゃ、桜井のこと探してくる！」
これでどうにもなんなかったら桜井のことはあきらめるしかないかな……。
当たって砕けろ、玉砕覚悟。
とにかくやるだけやってみっか。
俺は想いを胸に桜井を探しに向かった。

――学校中を探し回った。
桜井を探して、とにかく学校を隈なく探したと思う。
……バックレて帰ったとか？
桜井ならありえる。
コスプレカフェが嫌で嫌で帰った可能性もあるよな。
つーか、帰っただろ。
それしか考えられない。
【沙羅】「ハ～イ、渉。また会ったわね」
【渉】「あ、また会いましたね」
桜井を探してから、すでに嬢王様に会ったのがこれで3回目。
【沙羅】「さっきからひとりで行動してるみたいだけど、もしかして友達いないの！？」
【渉】「違いますって」
【沙羅】「冗談よ。ところで、さっきからなにかを探してるみたいだけど？」

【渉】「さっき言いそびれたんですけど、桜井のこと探してるんですよ」
【沙羅】「あらぁん、それはちょうどよかったわ。あの娘ったら交代時間になっても来ないのよね……絶対スクール水着を着させてやるわ」
やっぱコスプレが嫌でバックレたのか。
【沙羅】「明日香のこと見つけたら、アタシがキレてるって伝えて置いてねぇん。じゃ、アタシは奈央クンに会いに行くから、じゃあねぇん♪」
ここにも桜井兄ファンがいたのか。
つーか、あんなウキウキ気分の嬢王様を見ての初めてかも。
じゃなくって、俺は桜井を探さなきゃいけなかったんだ。
でも、学校いないとなると自宅に押し掛けるしかないのか……。
仕方ない、ここで切り札を使うしかないな。
俺はケータイを取り出した。
もちろん桜井と連絡を取るため……なんだけど、桜井からメアドも電話番号も教えてもらってなかったりする。
実を言うと雪乃から桜井の番号を教えてもらった。
本当は他人から聞くなんてよくないと思うし、それで連絡取ったら桜井が不愉快に思うかもしれないけど、そんな場合じゃない。
俺は桜井のケータイに電話を掛けてみることにした。
プルルルルルルルゥ……。
プルルルルルルルゥ……。
プルルルルルルルゥ……。
【明日香】「……麻生？」
【渉】「え、あ、うん」
……ちょっと待て、なぜ俺だとわかった？
【明日香】「……なんであたしの番号知ってんの？」
【渉】「雪乃に教えてもらった」
【明日香】「ふ～ん」

久しぶりの桜井との会話だってのに、桜井の声がなんだかケンカ越し。
いや、大丈夫だ。
最初の頃の俺と桜井の関係はこんなんだった。
【明日香】「もう掛けて来ないでね、じゃ」
【渉】「ちょっと待て切るな」
【明日香】「……」
【渉】「今どこにいるんだよ」
――ブチッ。
切られた。
慌てるな俺。
桜井が電話に出てくれた時点で希望アリだ。
本当に俺の顔なんて見たくもないし話したくもないなら電話に出ないはずだ。
つーか、桜井どこにいんだよ！！
学校にいるのかいないのか……？
そう言えば、電話の向こうから微かだけど騒がしい曲が聞こえてたような気がする。
グラウンドでやってるライヴか？
となると、まだ桜井は学校にいるってことか。
俺はすぐにグラウンドのライヴ会場に向かったが、やっぱり桜井の姿はなく俺は途方に暮れた。
再び校舎内を探そうとしていた俺に誰かが声を掛けてきた。
【雪乃】「麻生君、明日香は見つかった？」
【渉】「雪乃か……いや、見つかんねぇ」
【雪乃】「私も上條先生に頼まれて探してるんだけど、ケータイの電源切っちゃってるみたいなのよね」
俺が掛けたあとに電源切ったんだな。
【雪乃】「でも、もしかしたらさっき見たの明日香だったかも……？」

【渉】「どこでだよ！？」
【雪乃】「今見て追いかけようとしたところで麻生君にバッタリ会って……」
【渉】「だからどこで？」
【雪乃】「校舎に入って行くのを見たわ」
【渉】「サンキュ！」
すぐに俺は雪乃に背を向けて校舎内に走った。
下駄箱を抜けて、階段を登るべきか、１階を探すべきか？
迷っていると、俺の目に嬢王様の姿が目に入った。
【渉】「嬢王様、桜井見ませんでしたか？」
【沙羅】「あら、また会ったわね。明日香だったら今会って話したけど？」
【渉】「どっち行きましたか？」
【沙羅】「そんなことよりも聞いてちょうだい。あの子ったら、アタシがちゃんとコスして店に出なさいって言ったら、うなずきはしたんだけど絶対あの目はサボる気よ」
【渉】「そんなことはどうでもいいから、桜井はどこ行ったんですか？」
【沙羅】「上の階に行ったけど」
【渉】「ありがとうございました！」
俺はすぐさま2階に上った。
だが、ここからどうする？
２階を探すべきか、３階に行くか？
３階は今日は使われてなくて封鎖になってる。
と、そんな3階から2人の人影が降りてきた。
【渉】「彰人なにやってんだよ？」
階段から下りて来たのは真央と手を繋いだ彰人だった。
【彰人】「上の方が静かだからな」
【渉】「真央ちゃんと二人っきりでなにしてかって聞いてんだよ？」
【真央】「そ、そんなぁ、なにもしてませんってば！」

【渉】「そんなことより、桜井見なかったか？」
【真央】「明日香さんなら今すれ違いましたけど」
【彰人】「俺らが４階から降りた階段ですれ違ったぞ」
【渉】「ってことは４階にいるってことだな。サンキュ２人とも！」
俺は彰人と真央に礼を言うと、階段を猛ダッシュで駆け上った。
４階についた俺は辺りを見回した。
この階段はここで終わりで、屋上に通じる階段は別の場所にある。
まずは４階の捜索でもするか。
桜井は近い、きっと俺は桜井に近づいている。
【刹那】「危ない、退いて退いて」
白馬に乗った刹那がこっちに向かってくる。
退けというのは明らかに俺に個人に対して言葉だろう。
【刹那】「退かないと跳ね飛ばすよォ」
【渉】「おまえが来るなよ！」
間一髪のところで俺は馬を避け、刹那を乗せた馬は俺の近くで足を止めた。
つーか、馬で４階まで登ってきたのかよ。
【刹那】「なかなか根性ひん曲がった馬で困ったよォ」
【渉】「そんなことより桜井見なかったか？」
【刹那】「明日香なら屋上にいける階段の方で見たよ。ボクが馬に乗ってくって聞いたら断られてしまってねェ……あはは」
【渉】「とにかくサンキュ」
俺は馬にひき殺される前にさっさと刹那と分かれて屋上に通じる階段に向かった。
そして、屋上に通じる階段まで辿り着いた俺は、ここで足を止めてひと呼吸入れた。
屋上に通じる階段を前にして俺は考えた。
桜井は屋上に向かったのか？
それと裏をかいて下に行ったとか？

1. 絶対に桜井は屋上にいる！！――※００６―１へ（ハッピー）
2. いや、下の階から桜井のオーラを感じる、命賭けてもいい。――※００６―２へ（バッド）

明日香編（１６・未編集）

屋上のドアを開けた瞬間、振り返った桜井と目が合ってしまった。
……ちょっと不意打ちで心の準備ができてなかった。
目が合ったのはいいけど、言葉が口から出ない。
しばらく二人は相手の顔を見合わせてるだけだった。
そして、桜井が口を開く。
【明日香】「……何しに来たの？」
【渉】「桜井に会いに」
【明日香】「……っそ」
桜井は俺に背を向けてフェンス越しに空を眺めた。
俺は桜井の横に行こうとしたけど、なぜか足がすくんで前にいけない。
まるで、桜井と俺との間に壁があるようだ。
でも、俺は勇気を振り絞ってその壁をぶっ壊した。
そして、桜井のすぐ横に立って、俺も空を眺めながら話をはじめた。
【渉】「……なんか久しぶりだな」
【明日香】「そだね」
桜井は俺の顔を見ようとしなかった。
でも、この場を立ち去ろうともしない。
【渉】「俺やっぱ桜井のことが好きなんだよ」
【明日香】「……ふ～ん」
桜井の態度は俺を茶化しているようだった。
【渉】「俺がなんか焦ってたんだよな。最近やっと桜井のことがわかってきた。とにかく桜井のこと信じて気長に付き合ってればいいんだよな」
【明日香】「話はそれだけ？」
鋭い目つきで桜井が俺の顔を見据えた。

攻略失敗！？

【明日香】「あたしたちは、もう終わったの！」

【渉】「なにが終わったんだよ、はじまってもないだろ！」

【明日香】「あたしの中じゃ終わったの」

【渉】「じゃあ最初からはじめる」

【明日香】「……しつこい男って嫌われるよ」

【渉】「桜井だけに嫌われなきゃいいよ」

【明日香】「……ばか」

そう小さく呟いた桜井は俺を置いて歩き去ろうとした。

でも、もう放さない、放したくない。

俺は桜井の腕をぎゅっと掴んで自分に引き寄せた。

1. 渡したい物がある。――※006_3へ（ハッピー）
2. そのまま桜井の身体を抱き寄せてキスする。――※006_4へ（バッド）

明日香編（17完・未編集）

【渉】「渡したい物があるから、とりあえず受け取れよ」
【明日香】「……」
桜井は無言のまま俺を見つめている。
俺はポケットの中から小包を出して桜井に手渡した。
【明日香】「なにこれ？」
【渉】「本当は俺の力で探したかったんだけど、刹那の力を借りて探してもらった」
自分バカ正直だな。
ここはカッコよく俺が探したとか言えばいいのに。
【明日香】「……これって？」
小包を開けて驚いた顔をする桜井の手のひらの上で、ハートペンダントが美しく輝いていた。
【渉】「桜井が歩道橋の上から投げたやつ」
【明日香】「……探してたんだ」
【渉】「は？」
【明日香】「あのあと歩道橋の下を探したんだけど見つからなかったの……よかった本当に……」
【渉】「まあ、感謝するなら俺じゃなくって刹那にだけどな」
俺が笑って見せると、桜井も笑った。
【明日香】「渉のやつ出して、持ってないとか言ったら殺すから」
【渉】「はぁ？」
【明日香】「早く渉のペンダント出して、早くしないとあたしの気が変わっちゃうぞ」
【渉】「ちょっと待て、すぐ出すから」
俺はよくわからないまま、桜井の言うとおり自分のペンダントを首から外して桜井に渡した。
【明日香】「もう絶対に離れないから」

そう言って桜井はペンダントについているハート型の知恵の輪をひとつにした。
【明日香】「1つにしたら奇跡が起こるんじゃなかった？　……ウソばっかり」
その時、俺に奇跡が起きた。
爪先立ちする桜井の唇が俺の頬に少し触れた。
ついに俺はやったぞ、とにかくやった！！
やっと桜井の気持ちを実感できた。
……ぎゅるるるるるぅ～。
【渉】「……すまん腹が鳴った」
【明日香】「はぁ、ホント渉ってサイテー」
【渉】「だってさ、緊張が解れたらなんかさ」
【明日香】「こんなヤツを好きになったあたしがバカみたい」
【渉】「今俺のこと好きって言ったよな！？」
【明日香】「はぁ？　耳悪くなったんじゃないの？」
【渉】「っまいっか。そんなことより飯食いに行こうぜ」
【明日香】「渉のおごりね」
【渉】「また俺かよ」
【明日香】「おごってくれてら、いいことしたげる」
【渉】「マジで！？」
【明日香】「……やっぱバカ」
クスクスと笑う桜井につられて俺も笑う。
そして、いつの間にか手を繋ぎ、屋上を後にしていた……。

刹那編（００１・未編集）

■■■ｂ００６　青空（背景ＣＧ）
眩しいくらいの青い空に轟音が鳴り響き渡る。
■■■Ｇ５０４　その他（空を飛ぶ核ミサイル）
●●●ＳＥ０３４　ミサイル（ゴオォォォォ！轟音を鳴らすミサイル）〈リピート〉
雲を切りながら上空を飛ぶミサイル。
ミサイルはもう間じかまで迫っていた。
もう駄目だ、俺たちは一巻の終わりなんだ。
短いジンセーで幕を閉じなきゃいけないのかよ。
まだ死にたくねえ！
だって、俺はまだあいつに――。
●●●ＳＥ０３４　ミサイル（ゴオォォォォ！轟音を鳴らすミサイル）〈ストップ〉
■■■ｂ００６　青空（背景ＣＧ）
■■■〈背景消去・画面を白く〉
●●●ＳＥ０２４　爆発音（ドカーン！）

■■■ｂ０００　教室（背景ＣＧ）
●●●ＳＥ０１１　風を切る音（ビュン！チョークを投げる）
●●●ＳＥ０００　衝突音１（パコーン！とチョークが頭に当たる音）
【渉】「痛ぇっ！」
▲▲▲ＢＧＭ０００　（スタート）
……教室？
【渉】「夢かよ！」
【沙羅】「大声なんて出して、まだ寝ぼけているのかしら？」
――あったまマジ痛ぇ。

まるでなんかに刺されたみたいだ。
例えて言うなら、拳法の達人に人差し指で脳天を突かれた感じに似ている。まあ、拳法の達人にそんな攻撃受けた経験のない俺の例え話だから、信用性に欠ける例え話だけどな。って、それって例え話になってないじゃん！
だめだ、まともな例え話もできないんて、俺の脳ミソはまだ寝てるらしい。
俺は痛む頭を抑えながら、自分の机に落ちている白い物体Ｘを見た。
眠りから機能回復してない頭をフル回転で、白い物体Ｘについて分析解読してみよう。
ピピピピピピ……。
解析に出るときの電子音を俺的に表現してみたけど、どうよ？
まず、色は白だ。
形は長細い円柱形をしている。
そして、先っぽが砕けたように割れている。
わかったぞ！
俺はわかってしまったぞ！
これは白いチョークだ！！
【渉】「……って、ヤヴァイ」
俺は恐る恐る視線を上げた。
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（表示）
教壇に立っているグラマーボディの白衣と眼が合ってしまった。
あの眼は肉食獣が小動物を見る眼だ。しかも、殺る時の眼。
獲物を品定めするように沙羅先生は唇を舌で舐めた。
【沙羅】「あたくしの授業で眠るなんて、いい度胸してるわね」
【渉】「あはは、やだなぁ、沙羅先生の授業でなるハズないじゃないですか」
【沙羅】「それなら、あなたが寝ていないということを証明してくれる証人を召喚して、あなたの無実を証明してみなさい！」

【渉】「はっ？」
【沙羅】「証人がいないのであれば、あなたは有罪確定よ……ふふっ」
【渉】「わかりました、今すぐ探しますから！」
これは非常にマズイ状況だ。
突拍子もない展開だが、かな～りヤバイ。
早く証人を探さなければ、きっと俺は沙羅先生にお仕置きされてしまう。そんな恐ろしい目には絶対遭ってなるものか！
教壇に立つグラマーボディが売りの科学教師――上條沙羅先生はこの学校一の変わり者で有名だ。
変わり者で科学教師ときたら、マッドサイエンティスト！！
すんげえ王道だ。
しかも、性格は『上條沙羅を中心に世界は回っている』って感じの嬢王様タイプ。逆らったら最期、謎の実験台にされてしまうと、もっぱらの噂だ。
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（消去）
つーわけで、俺は証人を探さなければならない！
■■■Ａ０００　明日香・制服（表示）
まずは、俺の片想いの仔猫ちゃんだ！
■■■Ｇ０００　イベント明日香（机に座る明日香が頬杖を付ながら、上目遣いでこちらを見る）
■■■Ｇ００１　イベント明日香（目の部分だけ差し替えて、視線を逸らす）
■■■ｂ０００　教室（背景ＣＧ）
■■■Ａ０００　明日香・制服（表示）
――ぐあっ！
俺と視線が合ったとたんにガン飛ばされたし。
しかも、すぐ視線を逸らされた。
ふっ……でもいいのさ、瞬間だったが視線が合ったんだから……
俺はそれだけで１日ハッピーデイさ。

でも、今の上目遣いは悩殺されちまうほど可愛かった。
あの桜井のガン飛ばしは心のメモリーにしまって置くぜ。
■■■Ａ０００　明日香・制服（消去）
桜井にはずっとあんな態度されっぱなしだ。
もしかして俺ってあいつに嫌われてるのか？
いや、あいつは男子に対してはみんなあんな態度だ。
ってことは、俺も数多くのオオカミの１人ってことかよ！
たしかに、あの仔悪魔チックなつり上がった瞳に見つめられたら、小柄でキュートボディを押し倒したくなる衝動には駆られるけどさ。俺は断じて身体が目的……じゃない……とは言い切れないな。
●●●ＳＥ００８　トキメキ（ポワワワァン♪トキメキ。）
だって男の子だもん♪
そんなことよりも次の証人を探さねば！
よし、ここは幼馴染のよしみってことで、
【渉】「雪乃、助けてくれ！」
■■■Ａ０２０　雪乃・制服（表示）
【雪乃】「私に頼られても困るわ、これでも神主の娘ですもの。真実を証言するけど、それでもいいの麻生君？」
静かに淡々とした口調で、証言拒否されたし。しかも、なぜか微笑で言われた。
■■■Ａ０２０　雪乃・制服（消去）
だめだ、こんなとき女は当てにならない。すぐに裏切られる。となれば、あいつしかいない！
■■■Ａ０４０　彰人・制服（表示）
【渉】「助けてくれ！」
【彰人】「それはできないな。人をすぐ頼ろうとするのはおまえの悪い癖だぞ」
【渉】「つーか、俺を助けてくれないのは、沙羅先生が怖いだけだろ」
【彰人】「そんなはずないだろ。友人として、時には鬼にならなき

ゃいけないこともあるんだ」
俺はおまえのこと親友だと思ってたのに……。ふっ、友に裏切られるなんてな、人間なんてしょせん薄情な生き物さ。
【渉】「ふっ、やってやるさ、俺はおまえに頼らなくても強く生きてみせる！」
●●●ＳＥ００１　決めポーズ（シャキーン！）
■■■Ａ０４０　彰人・制服（消去）
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（表示）
【沙羅】「感動の場面は演出しなくてもいいから、早く証人を見つけなさい」
沙羅先生が俺を見て嘲笑ってる。すでに勝利を確信されてるみたいだ。ヤヴァイ、早く証人を見つけなければ。
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（消去）
――証人が見つからない。これじゃあ有罪が確定してしまう。
俺は必死で教室中を見回して、ある人物と目が合った。
■■■Ａ０１０　刹那・制服（表示）
【渉】「刹那！　生徒会長としての権限で俺を救ってくれ！」
俺が声をかけたのは、この学園の生徒会長である夕凪刹那だった。
【刹那】「どうしたんだい渉クン？　ボクに用かなァ？」
ううっ、眩しい……刹那の白い歯が人口太陽と化して俺の目に直撃！
この刹那の必殺爽やか笑顔に何人の戦士たちが敗れていったことか……俺は無念でならない。
実を言うと、こいつには頼りたくなかった。なぜって、こいつは俺のライバルなのだ！
この野郎は金持ちで美形で才色兼備の生徒会長で、変人で、変人で、変人で、しかも俺の愛しのベイビー桜井を狙ってやがるんだ。
つーか、俺が思うに刹那ほど白い学ランの似合う奴はいない。うちの学校ブレザーなのに、刹那だけ白い学ラン……真夏でも。
【渉】「俺が寝てなかったと証言してくれ。おまえの言葉だったら

沙羅先生も納得するだろ」
【刹那】「う～ん、それは難しいなァ。だって、渉クン寝てたよ。そもそも沙羅先生に叛旗を覆すなんて、渉クンもばかだなァ」
【渉】「ばかとか言うなよ」
【刹那】「ごめん、言い直すよ。ＩＱ猿以下」
▲▲▲ＢＧＭ０００　（一時停止）
●●●ＳＥ００７　ガ～ン！（ガ～ン！ショック。）
▲▲▲ＢＧＭ０００　（スタート）
さらっと爽やか笑顔で言いやがった。ムカツク。
【渉】「……おまえが女じゃなかったら、俺は速攻でおまえを殴り飛ばしてたぞ」
【刹那】「わァ、暴力反対」
今のセリフを抑揚のない感情ゼロの棒読みで言いやがった。
そーゆー言い方されるとよけいに腹が立つ。
俺は拳をぎゅっと握り締めて、モーソーの中で刹那にあ～んなことや、こ～んなことをしてやったぜ……ニヤリ。
ったく女子のクセして男子の制服着やがって……萌えるだろ！！
しまった、俺自身がよからぬモーソーをして話を本題からずらしてしまうところだった。
恐るべし刹那マジック！！
って俺が勝手にモーソーしただけか。
■■■Ａ０１０　刹那・制服（消去）
もう、だめだ……俺には打つ手がない。将棋で言うと、『待った』って言いたい状況だ。もしくは、将棋の駒台をひっくり返して逃亡！！
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（表示）
【沙羅】「さぁ～て、ミスター麻生。判決の時が来たようよぉん♪」
判決っていうか死の宣告。
【渉】「沙羅先生、優秀な弁護人を呼びたいのですが？」
【沙羅】「だめよ」

【渉】「どうして？」
【沙羅】「あ～らだって、あたくしが裁判官であり、検事であり、弁護士ですもの」
つまり沙羅先生には逆らえないってことですね。さすが、嬢王様！
って関心してどうする。
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（消去）
俺の脳ミソよ、今こそ覚醒める時だ！！
●●●ＳＥ００２　覚醒めるとき（キュイン！×４ゴゴゴゴゴゴォォォォ！）
脳ミソネバーエンディングに回転して、この状況を打開してくれ！
……なにも起こらない。
今の音は幻聴だったようだ。
むしろ、他人の力でもいいから俺を助けれくれ！
神様仏様でもいいから！
ここは妥協して悪魔でもいいからさ。
●●●ＳＥ００３　警報音（ウゥーン！ウゥーン！）
▲▲▲ＢＧＭ０００　（消去）
▲▲▲ＢＧＭ００１　（スタート）
な、なんだこのサイレンは！？
いつもの避難訓練の時のサイレンとは違うぞ？
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（表示）
【沙羅】「緊急事態よ」
【渉】「はっ？」
教壇の上に置かれたノートパソコンと沙羅先生は睨めっこしていた。
【沙羅】「正面ゲートを敵が突破したみたいだわ」
【渉】「意味不明です、先生」
【沙羅】「それはあなたが凡人だからよ」
▲▲▲ＢＧＭ０００　（一時停止）
●●●ＳＥ００７　ガ～ン！（ガ～ン！ショック。）

▲▲▲ＢＧＭ０００　（スタート）
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（消去）
■■■Ａ０１０　刹那・制服（表示）
【刹那】「あはは、やっぱり渉クンっておばかさんだなァ」
【渉】「二人そろって、俺をいじめて楽しいか？」
■■■Ａ０２０　雪乃・制服（表示）〈刹那と並べて表示〉
【雪乃】「それよりも先生、なにが起きているのでしょうか？」
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（表示）〈刹那と雪乃間に割って入るようにして表示〉
【沙羅】「つまり敵襲よ」
【渉】「はぁ？」
この先生はあふぉか。
敵襲ってありえねぇよ。
やっぱり、あふぉと天才は紙一重なんだな。
【沙羅】「正面ゲート――正門の厳重なセキュリティーを突破するなんて、敵もなかなかやるわね」
【刹那】「あそこには対戦車ロケット砲もあったのにねェ」
つーか、そんなセキュリティーシステムがあったなんて、初耳だぞ！
しかも、なんで刹那まで知ってるんだよ。
【雪乃】「先生、非難しなくてもよろしいのでしょうか？」
【沙羅】「そぉねぇん、そろそろ緊急放送が入ってもいい頃だけど。連絡本部はすでにやられてしまったのかしら？」
■■■Ａ０１０・Ａ０２０・Ａ０３０　刹那・雪乃・沙羅（全キャラ消去）
――その時だった。
●●●ＳＥ００４　校内放送（ピンポンパンポ～ン♪）
うわっ、臨場感に欠ける音だ。情けねぇ。
【放送】「教師に指示に従い、速やかに非難せよ。教師に指示に従い、速やかに非難せよ。これは演習ではない、実践である。繰り返

す、これは演習ではない、実践である！」
●●●ＳＥ００５　校内放送（ポンパンポンピ～ン♪）
【渉】「はぁ！？」
　意味不明だ。いつからここは軍隊になったんだ。
　つーか、俺のマイハニーが心配だ！
■■■Ｇ０００　イベント明日香（机に座る明日香が頬杖を付ながら、上目遣いでこちらを見る）
■■■Ｇ００１　イベント明日香（目の部分だけ差し替えて、視線を逸らす）
■■■ｂ０００　教室（背景ＣＧ）
　また、ガン飛ばされたし！
　やっぱ、俺、嫌われてるのか？
■■■Ａ０４０　彰人・制服（表示）
【彰人】「なんだか大変なことになってきたな」
【渉】「いや、俺はな～んちゃって、今のは嘘ですってオチもあると思うんだが」
【彰人】「こんな壮大なドッキリあるわけないだろう」
【渉】「つーか、マジだったらヤバイだろ」
【彰人】「それもそうだな」
■■■Ａ０４０　彰人・制服（消去）
■■■Ａ０２０　雪乃・制服（表示）
【雪乃】「先生、教師に指示に従い、非難するように放送がありましたけれど？」
■■■Ａ０２０　雪乃・制服（消去）
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（表示）
【沙羅】「エブリバディ、よく聴くのよ。今から学園の地下にある核シェルターに非難するわよ」
【渉】「マジかよ！」
　核シェルターまであるのか、この学校は……嘘だろ。
【沙羅】「早く起立なさい！」

■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（消去）
夢なら早く覚めてくれって感じだな。また沙羅先生の授業中に覚めるのはイヤだけど。
●●●ＳＥ００６　扉を開ける１（ガラガラガラ。教室のドアを開ける音）
【？？？】「たのも～～～っ！」
な、なんだ、いかにも道場破りをしに来ましたみたいな掛け声は！？
■■■Ｇ１００　刹那（教室のドアに堂々と立つＢ刹那全身）〈足元からパーンして顔を映す〉
●●●ＳＥ００１　決めポーズ（シャキーン！）〈Ｂ刹那の顔が表示されたところで〉
■■■ｂ０００　教室（背景ＣＧ）
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）
【？？？】「たのも～～～っ！」
【渉】「刹那じゃんか！？」
あれはどっから、見ても刹那だ。違いを述べるとしたら、服に色くらいか？
格闘ゲーで言うところの２Ｐキャラ。
本家刹那がホワイトなら、あいつはブラック刹那だ。
ま、まさか、刹那って一卵性双生児だったのか！？
驚愕の新事実発覚、明日の新聞記事の一面を……飾れはしなけどな。
【Ｂ刹那】「上條沙羅博士の命を貰い受けに参上仕った」
命を貰い受けるってつまり殺しに来ましたってことかよ！
っーか、先生、どんなヤヴァイ事に手を染めてんだよ。
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（表示）〈Ｂ刹那と並べて表示〉
【沙羅】「あたくし、他人に命を習われる筋合いなくってよ！」
【Ｂ刹那】「あなたになくとも、こちらにはあるのですよ」
【沙羅】「そもそもあなた何者よ？」

【B刹那】「冥土の土産に覚えておくがいい、オレの名前は刹那」
【沙羅】「ま、まさか！？」
なんか、本家刹那よりこっちのブラック刹那の方がクールでカッコいいぞ。本家はただの変人だからな。つーか、刹那と名前同じかよ！
やっぱ、こいつの呼び名はブラック刹那で決定だな。
【B刹那】「いざ、覚悟！」
床を蹴り沙羅先生に飛び掛るB刹那！
しかし、B刹那の視線が標的の沙羅先生から外れた。
【B刹那】「……な、なんと！？」
B刹那の視線の先にいたのは、なんと！？
●●●SE008　トキメキ（ポワワファン♪トキメキ。）
■■■G002　明日香（G000の背景を乙女チックなモーソー100パーセントに入れ替え）
【B刹那】「なんて可愛らしい人なんだ」
B刹那悩殺！！
奴の視線の先にいたのは、俺の恋人（予定）である桜井だったのだ！
あの野郎、刹那と一緒で桜井のこと狙うつもりか！
許さん！
とは言っても、俺は自分の席で呆然と一部始終を見ているだけだった。だって、関わらないほうがいい雰囲気が出てるから。頭のイカレてる奴らと関わったらロクなことがない。
【B刹那】「嗚呼、オレの愛しの人よ。お名前をお聞かせ願えませんか？」
【明日香】「イヤ」
きっぱりはっきり即答したぞ。偉いぞ桜井！
それでこそ、クールな女ナンバーワンの桜井だ！！
言葉を変えれば『冷たい女』とも言えるが、ここはあえてクールと呼ぶさ。だってカッコイイじゃん。

■■■ｂ０００　教室（背景ＣＧ）
■■■Ａ０００　明日香・制服（表示）
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）〈明日香と並べて表示〉
【Ｂ刹那】「あはは、イヤだなんて心にもないことを。そんな恥らうキミも素敵だァ！」
恥らってねえよ！
【明日香】「……こいつ、ばかぁ？」
困惑の表情を浮かべる桜井。
このＢ刹那って野郎、桜井に対しても刹那と同じ態度取りやがる。
普段の刹那は天然なのかワザとやってるのか微妙な性格してるくせに、桜井を前にすると『王子様スイッチ』がオンされるのだ。
どうやら、こっちのＢ刹那も同じらしい。
【Ｂ刹那】「さあ、オレと一緒に、この学校という牢獄を飛び出して、外の世界に行こうじゃないか！」
【明日香】「相手にしてらんない」
【Ｂ刹那】「大丈夫、オレがついてるから、心配することはなにひとつない」
心配事ありすぎのような気がするが……。
【明日香】「……だから」
桜井は溜息を吐いて目を伏せた。
会話継続不可能と判断したのだ。やはり人間と宇宙人のコミュニケーションは成功しないと見える。
自分ワールドに浸ってしまっているＢ刹那になにを言っても無駄だろう。
あ、そう言えばさ、Ｂ刹那って沙羅先生を殺しに来たんじゃなかったっけ？
その話はもうどうでもいいわけ？
■■■Ａ０００　明日香・制服（消去）
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（消去）
■■■Ａ０１０　刹那・制服（表示）

【刹那】「ちょっと待ちたまえ！」
●●●ＳＥ００１　決めポーズ（シャキーン！）
おお、ついに本家刹那もスイッチオンか！
【刹那】「明日香クンはボクのものだ」
【渉】「ちょっと待て、いつからおまえのもんになったんだよ？」
ついうっかり、声に出して聞いちゃったよ。
自ら渦中に飛び込んでしまった……俺ってバカ？
【刹那】「生まれたときから赤い糸で繋がっているのさ」
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）〈刹那と並べて表示〉
【Ｂ刹那】「甘いな、オレは前世からだ」
なんか子供同士の言い争いだぞ。レベル低っ！
■■■Ａ０１０　刹那・制服（消去）
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（消去）
●●●ＳＥ００９　席を立つ音（ガタン。座席を立つ音）
■■■Ａ０００　明日香・制服（表示）
【明日香】「先生、気分が悪いので保健室に行ってきます」
席を立った桜井は沙羅先生の答えを聞く前にさっさと教室を出ようとした。逃げるが勝ちだ。
だが、桜井の前に立ちはだかる黒い影。
●●●ＳＥ０１０　移動１（サッ！人が瞬間的に場所移動）
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）〈明日香と並べて右側に表示〉
【Ｂ刹那】「やっとオレと外の世界に旅立つ決意をしてくれたのだね」
【明日香】「どういう思考回路してるの……ったく」
【刹那】「そうはさせないよ」
床を蹴り上げ、刹那が飛んだ。幅跳び世界記録にも勝るとも劣らない、つーか助走なしで普通の人間はあんな飛べねぇ！
つーか、体育の授業を毎回見学してる刹那があんな芸当をするとは驚きだ。

■■■Ｇ５００　イベントＣＧ（上段の回し蹴りを放つ刹那。それを肘下で受けるＢ刹那）
●●●ＳＥ０１１　風を切る音（ビュン！回し蹴りや剣で風を切る）
刹那が上段の回し蹴りを放った！
●●●ＳＥ０１２　叩く１（バシッ！叩いたのを受ける音）
が、しかし、それはあっさりとＢ刹那に受け止められてしまった。
すかさずＢ刹那の右フックだ！
●●●ＳＥ０１３　叩く２（強く殴る）
●●●ＳＥ０１０　移動１（サッ！人が瞬間的に場所移動）
相手の攻撃をかわした刹那は爽やか笑顔１２０パーセントを浮かべた。
【刹那】「困ったなァ、戦闘能力が互角だよ」
【Ｂ刹那】「確かにそのようだな」
【刹那】「でも、美しさはボクの方が上だけどね、あはは」
いや、俺の目には同一人物に見えるのだが……。
【沙羅】「なんだか、おもしろい展開になって来たわね。どっちが勝つか賭けしましょうか？」
そうじゃなくって、誰か止めろよ……俺は無力でか弱いから無理だけど。
【沙羅】「みんな学生だから、一口１０００円にしようかしら？」
【渉】「沙羅先生、校内で賭け事をするのはマズイと思うんですけど？」
【沙羅】「心配しなくても大丈夫よ。今はあたくしの授業中だから、治外法権が成立するわ」
【渉】「はぁ？」
治外法権って、つまりこの教室内での出来事はこの国の法律で裁けないってことかよ。
■■■ｂ０００　教室（背景ＣＧ）
■■■Ａ０００　明日香・制服（表示）
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）

【明日香】「は、離してよ！」
【B刹那】「さあ、オレと一緒に逃げよう！」
ああっ！
いつの間にか桜井がB刹那の人質になってるし！
【明日香】「アタシどこにも行きたくない。だから、離してよ」
【B刹那】「よし、行こう」
桜井の話ちゃんと聞けよ！
小柄な桜井の身体はひょいと持ち上げられて、お姫様だっこ状態でB刹那の胸に抱かれた。
【刹那】「マイハニーを降ろすんだ」
【B刹那】「じゃあな、さばらだ！」
助走を付けたB刹那は桜井を抱きかかえたまま開いていた窓の外に飛んだ。
■■■A000　明日香・制服（消去）
■■■A011　B刹那・制服（消去）
飛んだ？
飛んだ！？
ここ4階だぞ！！
【彰人】「見事に着地して、フェンスを越えて校外に出てったな」
身を乗り出して窓の下を眺めていた彰人がこちらを向いた。
■■■A040　彰人・制服（表示）
【彰人】「先生、どうするんですか？」
■■■A030　沙羅・白衣（表示）〈彰人と並べて表示〉
【沙羅】「さ～て、授業再開するわよぉん♪」
▲▲▲BGM000　（スタート）
再開かよ！
【渉】「ちょっと待ってくださいよ。桜井がさらわれたんスよ？」
【沙羅】「そうね、犠牲の元に危機は去ったわ。はい、授業はじめるわよ！」
【彰人】「警察に連絡したほうがいいんじゃないんですか？」

【沙羅】「仕方ないわね。刹那、あいつを追跡して桜井を保護なさい。命令よ！」
【刹那】「イエス・マスター」
●●●ＳＥ０１４　走る１（タタタタッ！走る）
駆け足で刹那は教室を出て行った。
■■■Ａ０４０　彰人・制服（消去）
■■■Ａ０２０　雪乃・制服（表示）〈沙羅と並べて表示〉
【雪乃】「先生、私も明日香を探しに行っていいでしょうか？」
【沙羅】「いいわ、行ってらっしゃい」
【雪乃】「ありがとうございます」
■■■Ａ０２０　雪乃・制服（消去）
●●●ＳＥ０１４　走る１（タタタタッ！走る）
沙羅先生にお礼を言った雪乃は、静かに微笑んでから教室を駆け出して言った。
俺も行きたい。
つーか、行かなければ！
【彰人】「渉、おまえも行くんだろ？」
【渉】「おぅ、当ったり前よ！」
【彰人】「先生、俺も探しに行ってきます」
【渉】「俺も俺も、俺も行ってきます！」
【沙羅】「はいはい、行ってきなさい。あとで一度、学校に帰って来ないと科学は赤点するわよ」
【渉】「行くぜ、彰人」
【彰人】「ああ」
●●●ＳＥ０１４　走る１（タタタタッ！走る）
■■■ｂ００１　学校・廊下（背景ＣＧ）
俺たちは廊下を走って、急いで校門に向かった。
●●●ＳＥ０１４　走る１（タタタタッ！走る）
▲▲▲ＢＧＭ００２　（スタート）

■■■Ｇ５０１　イベントＣＧその他（Ｂ刹那に抱きかかえられながら、町を疾走するＢ刹那）
　校内から脱出したＢ刹那は明日香を抱きかかえたまま町を疾走していた。
【明日香】「どこまで行く気なの？」
【Ｂ刹那】「キミが望むならば、どこまでも行こう」
【明日香】「……行かなくていいから」
　明日香は溜息を吐いてから、上目遣いでＢ刹那を睨み付けた。
【明日香】「あのさぁ、あなた上條先生を殺しに来たんじゃなかった？」
【Ｂ刹那】「え？」
【明日香】「だからぁ、上條先生を殺りに来たんでしょ？」
●●●ＳＥ００７　ガ～ン！（ガ～ン！ショック。）
「Ｂ刹那」「……！！」
【明日香】「目的忘れるなんて、ばっかみたい」
●●●ＳＥ００７　ガ～ン！（ガ～ン！ショック。）
【Ｂ刹那】「……あはは、気にしない気にしない。俺は愛のために任務を捨てたのさ」
　ロマンチックと馬鹿らしいは紙一重。それは受け取る側による。
【明日香】「ばかみたい」
　明日香にはロマンの欠片もなかった。
【明日香】「ねえ、そろそろ降ろしてくれない？　抱っこされてるの恥ずかしいんだけど？」
【Ｂ刹那】「ふむ、すぐに降ろそう」
■■■ｂ００３　住宅街（背景ＣＧ）
●●●ＳＥ０１０　着地（スタッ！人が着地する音）
■■■Ａ０００　明日香・制服
【明日香】「ふぅ……」
　地面に立った明日香はＢ刹那を置いて勝手に歩きはじめた。
【Ｂ刹那】「ちょっと待ってくれ」

【明日香】「なに？」
振り返った明日香はＢ刹那を上目遣いで睨みつける。
【明日香】「なにか用？」
【Ｂ刹那】「どこに行くんだい？」
【明日香】「別に、学校フケたんだし、どこか遊びに」
【Ｂ刹那】「俺も行く」
【明日香】「君は上條先生を殺しに行くんでしょ？」
【Ｂ刹那】「それは……」
【明日香】「ねえ、どうして上條先生の命を狙ってるの？」
【Ｂ刹那】「マスターの命令だからだ」
【明日香】「マスター？」
【Ｂ刹那】「俺の親のような存在だ」
【明日香】「ふ～ん」
Ｂ刹那との会話に興味を失った明日香は、再びＢ刹那を置いて歩きはじめた。
【Ｂ刹那】「おい、ちょっと待ってくれ」
【明日香】「ヤダ」
いつの間にか、人質のはずだった明日香の立場が変わったようだ。
【明日香】「ねえ、お金持ってる？」
【Ｂ刹那】「ああ、マスターから必要経費を頂いてる」
【明日香】「じゃあ、それ使ってどっかで遊ぼ」
悪戯な小悪魔チックな笑みを向けられたＢ刹那の脳内回路はショートした。
【Ｂ刹那】「キミが望むならば、どこまでも行こう」
【明日香】「じゃあ、あっち行こ」

▲▲▲ＢＧＭ００２　（スタート）
■■■ｂ００２　学校・校門（背景ＣＧ）
校門まで走ってきたが、すでに刹那と雪乃の姿もなかった。
つーか、探すって言っても、どこ行けばいいんだよ。

逃げる場所は無限大、探す場所は無限大だ。
あはは、地球の表面積ってどのくらいあるんだ？
この国……この町だけでも結構あるよな。
■■■Ａ０４０　彰人・制服（表示）
【彰人】「どうする？」
【渉】「二手に分かれるか？」
【彰人】「そうだな。たぶん桜井を抱えたニセモノ刹那は目立つから、目撃者さえ見つかればどうにかなると思うぞ」
【渉】「おぅ、まずは目撃者探しからだな」
よし、まずはどこを探そう。

1. 住宅街――※００２へ
2. アーケード街――※００３へ
3. 駅前――※００４へ

刹那編（００２・未編集）

【渉】「そんじゃ俺は住宅街を探してみるわ」
【彰人】「俺はアーケード街を探してくる」
【渉】「じゃあな」
【彰人】「ああ」
俺は彰人を分かれて住宅街に向かうことにした。
■■■ｂ００３　住宅街（背景ＣＧ）
のどかな住宅街だ。
とくに変わった様子はないけど、もしかしたら二人がここを通ったかもしれない。
平凡な場所にこそ狂気と犯罪が潜んでいるのだ。俺はそう思ってる。
よし、目撃者を探そう！！
俺は住宅街中を駆け回り、放浪中の爺さんから犬の散歩をしてるおじさんまで、いろんな人に声をかけてみた。
が、結果は惨敗。
目撃情報ゼロ。
う～ん、あいつらここには来てないみたいだな。
他のところ探してみるか。

２．アーケード街――※００３へ
３．駅前――※００４―※※※００１へ

刹那編（００３・未編集）

【渉】「そんじゃ俺はアーケード街を探してみるわ」
【彰人】「俺は駅前を探してくる」
【渉】「じゃあな」
【彰人】「ああ」
俺は彰人を分かれてアーケード街に向かうことにした。

■■■ｂ００４　アーケード街（背景ＣＧ）
●●●ＳＥ０５５　アーケード街（ざわめき）〈リピート〉
ふぅ、アーケード街に来たぞ。
アーケード街はそれなりに人も多いし、店も結構あるから潜伏場所としてはイケてると思う。となると、桜井たちがここにいる可能性は大だな。
――ん？
あそこにいるのって雪乃じゃないか？
しかも、なんか数人の男に取り囲まれてるし。
よし、行ってみよう。
■■■Ａ０２０　雪乃・制服（表示）
【雪乃】「もうあなた方に用はありませんの。そこを退いてくださる？」
淡々とした口調で言う雪乃の前に男が三人立ちはだかった。
■■■Ａ１１０・Ａ１００・Ａ１２０　不良ＢＡＣ（表示）〈Ａを真ん中に表示〉
【不良Ａ】「だから、俺たちがその二人組みのところに連れてってやるよ」
【雪乃】「顔に嘘って書いてあるわ」
■■■Ａ１００・Ａ１１０・Ａ１２０　不良ＡＢＣ（表示）〈Ｂを

真ん中に表示〉
【不良B】「嘘じゃねーって、俺たちその二人の居場所知ってんぜ」
■■■Ａ１００・Ａ１２０・Ａ１１０　不良ＡＣＢ（表示）〈Ｃを真ん中に表示〉
【不良C】「知ってる知ってる」
■■■Ａ１１０・Ａ１００・Ａ１２０　不良ＢＡＣ（表示）〈Ａを真ん中に表示〉
【渉】「おい雪乃、なにやってんだよ？」
【雪乃】「あら、麻生君も明日香たちを探しに来たの？」
【渉】「おぅ」
【雪乃】「明日香へのポイント稼ぎかしら、うふふ」
【渉】「ち、ちげーよ！」
【雪乃】「ジョーダンよ」
雪乃は顎に手を当てて、静かに微笑んだ。この表情を見てると、なんだか魂が吸い込まれそうになる。
いつも物腰が静かな雪乃に俺は魔力めいた雰囲気を感じている。
いつよーこいつとは幼馴染なんだけど、なんか得体の知れないモノを感じるんだよな。
【不良A】「おいテメェら、俺たちのこと無視して話してんじゃねぇよ」
【雪乃】「あら、またあなた方いらっしゃったの。もう用がないって、聞こえなかったのかしら？」
静かに微笑みながら、雪乃は深い黒瞳で不良たちを見据えた。
これって微妙に喧嘩売ってないか？
微妙つーか、普通に喧嘩売ってる？
雪乃に見つめられた不良たちは一歩後退った。俺も雪乃から少し離れたい気分だ。なんだか知らないが、雪乃から底知れぬ怖さを感じる。
怖い、俺は正直、雪乃が怖い。
確かに普段の雪乃は怒鳴ることもないし、比較的ひとに優しいし、

物静かな才女って感じだ。でも、俺にはなんか厳しかったりするけど。
まあ、でも、とにかく、普段の雪乃からは『怖い』なんてイメージ思いもしない。
でも、俺は雪乃が怖い。
【不良A】「お、俺たちに喧嘩売ってんのか？」
【雪乃】「そう思われてしまったのなら謝るわ。ごめんなさい」
【不良A】「ごめんじゃねぇだろ、他のことで償ってもらおうじゃねぇか」
と口では言ってるが、不良たちは雪乃に近づこうともしない。
■■■A100・A110・A120　不良ABC（表示）〈Bを真ん中に表示〉
【不良B】「俺たちと、俺たちと、その、とにかく俺たちに付き合えや」
■■■A100・A120・A110　不良ACB（表示）〈Cを真ん中に表示〉
【不良C】「そうだそうだ」
■■■A110・A100・A120　不良BAC（表示）〈Aを真ん中に表示〉
【雪乃】「あら、困ったわ。それってデートのお誘いかしら。麻生君、どうしたらいいと思う？」
【渉】「デートの誘いのわけねぇだろ！」
【雪乃】「そう、それではお断りするわ」
【不良A】「そうは行かねぇ。おい、一緒に行こうぜ！」
ゴツゴツした不良Aの手が雪乃の腕を強く掴んだ。
【雪乃】「離してくださらない？」
深みを湛えた黒瞳が不良Aを見据えた。
次の瞬間、不良Aは雪乃から手を離していた。別に睨まれたわけでもなく、ただ静かに見つめられただけなのに。
熱いわけでもないのに、不良Aは顔全体に汗をかき、蒼ざめた表

情で叫んだ。
【不良A】「やれ、この女をやっちまえ！」
【雪乃】「あら……」
溜息を吐いた雪乃に襲い掛かる者はいなかった。
不良BとCは顔を見合わせて動こうとしない。
【不良B】「兄貴、本当にやるんですかい？」
【不良A】「やれったら、やれ！」
【不良B】「だって、相手は女ですぜ」
【不良A】「かまうもんか、その女をやんねぇんなら、俺がお前らをぶっ飛ばすぞ！！」
【不良C】「ひぇ～～～っ」
兄貴に逆らえない子分二人は、しぶしぶ雪乃の前に立ちはだかった。
【不良B】「兄貴の命令だ、悪く思うなよ」
【不良C】「思うなよ」
【雪乃】「あら、女の子に暴力を振るうなんて、最低ね。ね、麻生君？」
▲▲▲BGM002　柊町（フェードアウト）
【渉】「あ、ああ」
このとき俺は、すでに雪乃から5メートルは離れていた。
普通、男だったら雪乃を助けるべきだろう。男として女を見捨てるのはよくない。でも、身体が勝手に雪乃から離れちまったんだからしょうがない。
なんだか気温が一気に下がったような気がする。背筋がなんだかゾクゾクするんだけど。
この異様な雰囲気を感じているのは俺だけではあるまい。
▲▲▲BGM001　大混乱（スタート）
■■■A100　不良A（消去）
■■■A120　不良C（消去）
■■■A110　不良B（表示）〈真ん中に表示〉

【不良B】「おりゃ！」
意を決してついに不良Bは雪乃に殴りかかった。
●●●SE046　ボディブロー（腹に重いパンチ）
■■■A110　不良B（消去）
●●●SE013　倒れる（人が倒れる）
と思った次の瞬間には不良Bは俺の視界から消えていた。
【渉】「ありえねえ」
俺の視界から消えたと思った不良Bは、地面に横たわり白目をむいて口から大量の泡を吐いていた。
■■■A120　不良C（表示）
【不良C】「よくもよくも！！」
太い巨体に似合わないスピードで、不良Cはイノシシのように雪乃に頭から突っ込んだ。猪突猛進ってこういうことを言うんだろうな。
●●●SE049　叩く（パンチ！）
【不良C】「うぐっ」
胃の中身を吐き出しそうな声を出した不良Cは、腹を両手で押さえながら倒れることもなくその場で動かなくなった。
そこにすかさず雪乃の手が伸びた。
【不良C】「ぐあっ！？」
伸ばされた雪乃の手は、なんと相手の顔面を鷲掴みにしたのだ！
そして、そのまま全身の力と体重を込めて、不良Cの後頭部をコンクリの地面に叩きつけるように押し倒した。
●●●SE026　重いものがぶつかる（ドン！）
■■■A120　不良C（消去）
ヤバイぞ、明らかにヤバイ音したぞ。
地面に膝を付く雪乃が残った不良Aを見た。
その表情を見た不良Aは思わず凍りつく。
そこにいたのは雪乃であって雪乃じゃなかった。普段の雪乃だったら、あんな狂気じみた表情なんてしない。今そこにいるのは血に

飢えた悪魔だ。
すっと立ち上がった雪乃が舌なめずりをして獲物を見定めた。
【雪乃】「オイ、テメェ！！」
雪乃の怒鳴り声が辺りにに沈黙を呼んだ。
今の雪乃の声を聞いただけで、俺の股間はスーっとしちまった。
ヤバイぞ、これはすごいヤバイ状況だ。
なにがヤバイって、あの不良が殺されるかも。
【雪乃】「子分二人がやられて、黙ってるわけネェよな？」
不良Ａが唾を呑み込んだのが俺のとこまで聞こえたような気がする。
■■■Ａ１００　不良Ａ（表示）
【不良Ａ】「あ、あったりめぇだ。よくもかわいい子分を甚振ってくれたな！！」
【雪乃】「だったら、来いよ。さっさとかかって来いや！！」
【不良Ａ】「……」
可哀想に、あれだけ挑発されてんのに動けねぇでやんの。
不良Ａの脚はそこだけ局地地震に見舞われたみたいに激しく震えている。あんな状態じゃ喧嘩もできないな。
だが、不良Ａの目にある物が飛び込んできた。
それは長くて硬くて手で持つにはちょうどいい物体。
鉄パイプだ！！
すごい偶然とも言うべきか、近くのお店で看板を設置するための鉄パイプやらが落ちていたのだ。不良Ａ絶好のチャ～ンス到来！！
迷うことなく不良Ａは鉄パイプを拾い上げ、そのまま雪乃に殴りかかった。
【不良Ａ】「し、死ねーっ！！」
【雪乃】「アタイに喧嘩売ろうなんざ、１００年早いよ！」
踏み込んできた巨漢の懐に素早く入り込み、雪乃は腕を振り上げて不良Ａの顎に裏拳をかました！
●●●ＳＥ０１３　叩く２（強く殴る）

【不良A】「あがっ！」
あ～あ、歯か顎の骨いったっぽいな。
【雪乃】「坊やはお寝んねの時間よ！」
怯んだ相手から雪乃は鉄パイプを奪い取った！
■■■Ｇ２００　雪乃（華月流――流し斬り。鉄パイプで技を決めた後）
●●●ＳＥ０４４　剣の煌き（シャキン！）
【雪乃】「華月流、流し斬り！」
●●●ＳＥ０４０　斬る（ズバッ！人が斬られる）
●●●ＳＥ０１３　人が倒れる（バタっ！）
一瞬の出来事でなにがなんだかよくわからんかった……。
ただ言えることは、病院送りだなってことだ。
▲▲▲ＢＧＭ００１　大混乱（ストップ）
■■■ｂ００４　アーケード街（背景ＣＧ）
３人を倒し終えた雪乃の身体からスッと力が抜け、倒れそうになった雪乃の身体を急いで俺が支えた。
【渉】「大丈夫か、雪乃？」
目を閉じていた雪乃が目をぱりくりさせて俺のこと見つめた。
【雪乃】「あら、ええと、なにがあったのかしら？」
【渉】「えーと、その……」
俺は辺りに転がる３人の男たちに目をやった。
辺りで気を失っている男たちを見て、雪乃はハッとした表情をして俺を見つめた。
【雪乃】「あらやだ。私、もしかしてまたやっちゃった？」
苦笑いを浮かべながら、雪乃は自分が握っていた鉄パイプは投げ捨てた。
●●●ＳＥ０４１　金属音１（カラン！鉄パイプを投げる）
さっきの裏雪乃の記憶は雪乃本人はまったくないらしい。つまり二重人格とか、そんな感じなんだと思う。どっちが本物の雪乃なのかは考えたくないけど。

▲▲▲ＢＧＭ００２　柊町（スタート）
■■■Ａ０２０　雪乃・制服（表示）
俺の腕から雪乃は離れ、静かに微笑んだ。
【雪乃】「ありがとう、麻生君」
【渉】「いや、別に……」
別に俺はなにもしてない。やったの全部雪乃だ。そう、俺は無罪潔白だ！
【渉】「早く逃げよう、この場にいるとヤバイ」
【雪乃】「そうね」
警察とかが呼ばれる前に俺たちはさっさとこの場から逃げることにした。
■■■Ａ０２０　雪乃・制服（消去）
だが、逃げようとしている俺たちの前に男が立ちふさがった。
■■■Ａ１１０　不良Ｂ（表示）
【不良Ｂ】「よくもさっきは、殺してやる！」
クソッ、気失ってたんじゃねえのかよ。
不良Ｂは手に鉄パイプを持って殴りかかってきた。
【渉】「危ない雪乃！」
●●●ＳＥ０２６　重いものがぶつかる（ドン！）
【雪乃】「麻生君！」
●●●ＳＥ０２７　人が倒れる（バタっ！）
■■■ｂ００４　アーケード街（背景ＣＧ）〈背景ＣＧを消して画面を黒〉
●●●ＳＥ０４２　救急車（ピーポーピーポー！）
救急車のサイレンが微かに聞こえた。
そして、俺は決して覚めぬ眠りに落ちたのだった。

ＢＡＤ　ＥＮＤ１

刹那編（００４・未編集）

【渉】「そんじゃ俺は駅前を探してみるわ」
【彰人】「俺はアーケード街を探してくる」
【渉】「じゃあな」
【彰人】「ああ」
俺は彰人を分かれて駅前に向かうことにした。

※※※００１

■■■ｂ００５　駅前（表示）〈リピート〉
●●●ＳＥ０５４　駅前（ざわめき）
駅ビルの前まで来たけど、いつもどおりにしか見えない。平凡すぎる。
ショッピングを楽しむ人々や往来するバスやタクシーに、炎上する車かぁ。
なんら変わらない日常の風景だ。
……ん？
今、非日常的な風景を見たような気がしたんだけど。
●●●ＳＥ００７　ガ～ン！（ガ～ン！ショック。）
あぁぁぁぁぁっっっ！！
車が炎上してるし！
しかも、近くにＢ刹那と桜井いるし！
なんてこったい！！
ダッシュで駆け寄らなければ！
■■■Ａ０００　明日香・制服（表示）
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）〈明日香と並べて表示〉
【Ｂ刹那】「猫の救出に成功した」
【明日香】「それはいいけど……」

桜井は横目ちらりと炎上する車体を見て、B刹那の抱いている仔猫に視線を向ける。
●●●SE016　猫の鳴き声（にゃ～ん♪）
【明日香】「この子が助かったのはいいけど」
難しい表情をして、顔を上げた桜井と俺の視線が合った。
【明日香】「あ、麻生」
【渉】「あ、じゃねえよ、なんで車が燃え上がっちゃってるんだよ？」
【明日香】「この刹那が車にひかれそうになったこの子を助けたら……」
助けたら……で、なんで車が炎上すんだよ。
だって、ちょっと待てよ、燃えてる車はビルとかに突っ込んでるわけでもなく、横断歩道のど真ん中で燃えてるぞ。
フロントがひしゃげてるけど、なにぶつかって燃えたんだよ？
俺は視線をゆっくりと仔猫を抱いているB刹那に向けた。
――んわけないな。
荒唐無稽な発想をするところだった。
いや、でも、こいつ……学校の4階から……あはは、まさか。
●●●SE016　猫の鳴き声（にゃ～ん♪）
【明日香】「この猫、首輪付けてないから野良猫かな？」
【B刹那】「俺の分析によると、雑種ではなくロシアンブルーという種の猫のようだ」
ブルーがかった毛色を持つ仔猫はどこか上品さを兼ね備えていたが、見た目はゲッソリと痩せてしまっていて、餓死寸前って感じだ。
【明日香】「ウチで飼ってあげたいけど、ウチのマンションペット禁制だから」
【B刹那】「俺も答えはノーだ。マスターが極度の猫アレルギーを持っている」
明日香の瞳が俺のことを見つめた。
ヤヴァイ、その瞳可愛すぎる……悩殺せれそうだ。これで何百回

目の悩殺だろうか。
【明日香】「じゃあ、麻生が飼ってあげて」
【渉】「はっ、俺？」
【Ｂ刹那】「可愛がってあげるといい」
　Ｂ刹那から仔猫を渡され、反射的に俺は受け取ってしまった。くれるものはなんでも貰うという反射神経が働いてしまった。貧乏人の悪いクセだ。
●●●ＳＥ０１６　猫の鳴き声（にゃ～ん♪）
【明日香】「その子も麻生のこと気に入ったみたい。よかったね」
【渉】「よか、ねーよ」
【明日香】「その子を見捨てる気？　麻生って血も涙もないサイテーな人なんだ」
【渉】「そーゆー問題じゃなくてだな、俺がどうして？」
【明日香】「どーしても、こーしてもじゃなくて、飼うの飼わないの？」
　上目遣いで桜井が俺に迫る。
　ＹＥＳかＮＯか、その他の選択肢もあるような気がするが、桜井の気迫はたった一つの答えを言うように強要している。
【渉】「い、イエスです。飼わせて頂きます」
　ってなんで敬語で答えてるんだよ。
■■■Ｇ００３　イベントＣＧ明日香（無邪気な笑みを浮かべながら仔猫を撫でる明日香）
●●●ＳＥ００８　トキメキ（ポワワファン♪トキメキ）
【明日香】「よかったね」
　桜井が仔猫の頭を撫でてやると、
●●●ＳＥ０１６　猫の鳴き声（にゃ～ん♪）
　にゃ～んと鳴いた。
　そのとき俺の視線は無邪気に微笑む桜井に釘付けだった。
　なんだよ、こんな表情もできるのかよ。
　いつもクールな刺すような眼してると思ったら、ちゃんと笑うこ

ともできるじゃん。
この桜井の笑顔は俺の心のメモリーに深く刻まれた。
■■■ｂ００５　駅前（表示）
■■■Ａ０００　明日香・制服（表示）
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）〈明日香と並べて表示〉
【渉】「ところでさ、桜井ってこのＢ刹那にさらわれたんじゃないのかよ？」
今の二人を見ていると、犯人と人質って感じがしない。例えていうなら、デートしてるみたい……だ？
●●●ＳＥ００１　決めポーズ（シャキーン！）
【渉】「許さんＢ刹那！！」
俺は一人勝手にモーソーして先走りしてＢ刹那を怒鳴りつけた。
Ｂ刹那はきょっとんとした表情をしている。
桜井は異常者を見るような目つきで俺を見ている。
【明日香】「なに叫んでるの？」
【渉】「いや、発声練習」
我ながら苦しいいい訳だ。
しかし、危ないところだった。
モーソーと現実がごっちゃになって、人間として危ないゾーンに足を踏み入れるとこだったぜ。もうちょっとでＢ刹那に殴りかかるところだったな。
●●●ＳＥ０１７　ヘリコプターの羽音（羽の回転音）〈リピート〉
【渉】「な、なんだ？」
ヘリコプターの羽音だ。
こんな駅前通に！？
▲▲▲ＢＧＭ００３　Ａｍｂｕｓｈ（スタート）
■■■Ｇ５０２　その他（上空を飛ぶヘリコプター）
【明日香】「なんでヘリが？」
ヘリが空を飛ぶこともあるだろう。ヘリが空を飛ぶのは当たり前だ。飛ばないヘリはただの鉄クズだ。

でも、あのヘリは明らかにおかしい。
上空を旋回しながら、地上の様子を伺っているように見える。
それに低空飛行すぎる。今にも着陸してきそうだ。
【渉】「あ、ヘリからなんか落ちてくるぞ」
【B刹那】「上空に生体反応を確認した」
ヘリから投下された物体Aは上空でパラシュートを開いた。
あれは人か、人が降りてくるのか！？
パラシュートがどんどんこちらに向かって落ちてくる。
まるで俺たちのいる場所に……。
あっ！？
あいつは！？
▲▲▲BGM000　喧噪（スタート）
■■■b005　駅前（表示）
■■■A010　刹那・制服（表示）
●●●SE010　着地（スタッ！人が着地する音）
【刹那】「あはは、道に迷って大変だったよォ」
上空から降りてきたのは刹那だった。
【刹那】「明日香クン、麻生クン、こんなところで出会うなんて奇遇だね」
【渉】「おまえ、どうしてヘリから降りて来るんだよ」
【刹那】「う～ん、それがね、そこの彼を追って学校の外に出たまではよかったんだけどォ。道に迷ってしまって、結局ボクんちの特殊班に頼んでここまで運んで来てもらったんだよ」
特殊班ってなんだよ。
いつも学校にリムジンで来てる刹那が大富豪の娘っていうのは知ってるけど、特殊班って、特殊班って言い方が気がかりだ。
【刹那】「え～と、それで、ボクは……ここになにしに来たんだっけ？」
●●●SE018　オチ1（パフ！おもちゃのラッパがパフッって鳴るやつ）

【渉】「そんなこと忘れるなよ」
【刹那】「あはは、嘘に決まってるじゃないか、忘れてないよ。キミのスペックの低い脳とボクの脳を一緒にしないでよ」
【渉】「おまえなぁ～」
【刹那】「怒らない怒らない、すぐ怒る人はねカルシウムが不足してるんだよ」
【渉】「……」
ここで怒ったら刹那の思う壺だ。我慢だ、我慢しろ俺。
【渉】「俺はぜんぜん怒ってないぞ。そうそう、それより、俺は桜井を探しに来たんだ」
【刹那】「奇遇だね、ボクもだよ」
【渉】「奇遇って、おまえなぁ～」
【刹那】「そういうことで、そこのキミ、明日香クンを解放したまえ！」
うおっ、唐突過ぎる話の運び方だ！
■■■Ａ０１０　刹那・制服（消去）
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）
【Ｂ刹那】「残念ながら、それはできないな」
■■■Ａ０００　明日香・制服（表示）〈Ｂ刹那と並べて表示〉
【明日香】「だってアタシたちデート中だから」
●●●ＳＥ００７　ガ～ン！（ガ～ン！ショック。）
【渉】「マ、マジか桜井？」
【明日香】「うん」
●●●ＳＥ００７　ガ～ン！（ガ～ン！ショック。）
だめだ、ショックで立ち直れねぇ。
真っ白に燃え尽きて放心状態の俺を残して、話はどんどん進んでいく。
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（消去）
■■■Ａ０００　明日香・制服（消去）
■■■Ａ０１０　刹那・制服（表示）

【刹那】「ボクの許可なしに明日香クンとデートするなんて」
おまえの許可は関係ないだろ。
【刹那】「よし、明日香クンを賭けて決闘しよう。キミに決闘を申し込む！」
●●●ＳＥ０１９　紙などを置く（バサッ！）
▲▲▲ＢＧＭ００４　迎撃（スタート）
刹那はどこからか白い手袋を取り出して、Ｂ刹那に投げつけた。
おお、これは西洋の決闘の申し込み方だ！
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）〈刹那と並べて表示〉
【Ｂ刹那】「その決闘、受けて立とうではないか」
Ｂ刹那が決闘の申し込みを受けたぞ！
つーか、刹那は普段から白い手袋持ち歩いてんのかよ。
そんなことより、手袋投げつけた程度で命を懸けた決闘がはじまっていいのかよ。
否！
やっぱり、『命賭けてもこいつぶっコロス！』くらいの挑発をしてこそ、決闘の申し込みだろ。俺はそう思う。
とか思ってる間に決闘はじまってるし！
■■■Ｇ５００　その他（上段の回し蹴りを放つ刹那。それを肘上で受けるＢ刹那）
●●●ＳＥ０１０　移動１（サッ！人が瞬間的に場所移動）
●●●ＳＥ０１３　叩く２（強く殴る）
●●●ＳＥ０１２　叩く１（バシッ！叩いたのを受ける音）
●●●ＳＥ０１１　風を切る音（ビュン！回し蹴りや剣で風を切る）
●●●ＳＥ０１２　叩く１（バシッ！叩いたのを受ける音）
●●●ＳＥ０１０　着地（スタッ！人が着地する音）
すげえ、アクション映画を見てるみたいだ。
肉弾戦を繰り広げる二人を見ながら俺は圧巻した。
つーか、刹那ってやっぱり運動神経いいんだな。
体育の授業とか毎回見学してるみたいだけど、実は運動神経いい

だな。
●●●ＳＥ０１１　風を切る音（ビュン！回し蹴りや剣で風を切る）
●●●ＳＥ０１２　叩く１（バシッ！叩いたのを受ける音）
目の前で繰り広げられる戦いは運動神経がどうこうってレベルを超えてるけどさ。
じゃあ、なんで刹那は毎回体育の授業見学してんだ？
Ｂ刹那と間合いを取った刹那が急に動きを止めた。
【刹那】「……ダルい」
それか！！
それが理由か……体育を休む理由も。
【Ｂ刹那】「明日香は俺が貰う！」
●●●ＳＥ０１０　移動１（サッ！人が瞬間的に場所移動）
●●●ＳＥ０１３　叩く２（強く殴る）
ああっ！
Ｂ刹那の攻撃をもろに受けた刹那の身体が吹っ飛んだ。
しかも、尋常な吹っ飛び方じゃない。
１０メートルは飛んだぞ！？
■■■ｂ００５　駅前（表示）
●●●ＳＥ０２０　フロントにぶつかる（ドングシャ！）
吹き飛ばされた刹那は近くに止めてあった車のフロントガラスに衝突した。
なんてこったい。
死ぬぞ、あんなの。
【刹那】「イタタ、腰打っちゃったよ」
■■■Ａ０１０　刹那・制服（表示）
なんと、刹那は腰を擦りながら立ち上がったのだ。
しかも、腰打っちゃったよって……そーゆー問題か？
【刹那】「ふむ、なかなかやるね」
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）〈刹那と並べて表示〉
【Ｂ刹那】「ふっ、おまえもな」

二人の刹那は向かい合って微笑した。
もしや、これは！？
敵同士が戦いによって相手の実力を認め、友情が芽生えちゃったりする展開か！？
【刹那】「でも、美しさはボクのほうが上だね、あはは」
【Ｂ刹那】「いや、オレのほうが上だ、ふっ」
友情は芽生えそうにないな。
【刹那】＆【Ｂ刹那】「――ん？」
二人の刹那が息を合わせたように、ある方向に顔を向けた。
■■■Ａ０１０　刹那・制服（消去）
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（消去）
▲▲▲ＢＧＭ００３　Ａｍｂｕｓｈ（スタート）
●●●ＳＥ０２１　バイク１（ブゥゥゥン！バイクの走る音）
一台の赤い大型バイクがこちらに向かって走ってくる。
しかも、乗ってる人……白衣着てるし。
白衣でバイク乗る人なんて、あの人しかいない。
●●●ＳＥ０２２　バイク２（キキィィィッ！バイクの止まる音）
【沙羅】「まだ、決着はついてないようね」
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（表示）
この場に姿を現したのはウチの担任――上條沙羅先生だった。
【沙羅】「さてと、どっちが勝つか賭けましょうか。渉と明日香はどっちに賭けるかしら？」
【渉】「はっ？」
まだこの教師は賭け事をする気だったのか。そのためにここまで来たのかよ！
【沙羅】「あたくしは刹那に賭けるわよ」
【渉】「先生、そうじゃなくて、ここになにしに来たんですか？」
【沙羅】「おほほ、刹那と刹那のニセモノのどっちが勝つか賭けをするためよ」
【渉】「マジかよ」

【沙羅】「嘘よ」
【渉】「嘘かよ！」
【沙羅】「刹那とあのニセモノ、どちらが勝つか見定めるためよ。これはあいつとの勝負なの、負けるわけにはいかないわ」
沙羅先生の瞳の奥で炎が燃え上がり、先生は拳を強く握り締めていた。
【渉】「あいつって誰っスか？」
【沙羅】「あいつはあいつよ」
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）〈沙羅と並べて表示〉
【Ｂ刹那】「偉大なるマスターをあいつ呼ばわりしないでもらおう」
【沙羅】「ふん、あいつはあいつよ」
【渉】「だからあいつって誰？」
【Ｂ刹那】「そこにいる上條沙羅の妹であらせられるお方だ」
【渉】「マジか！？」
この先生に妹なんているのか。きっと沙羅先生に似てトンデモ系の人なんだろうな。
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（消去）
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（表示）〈Ｂ刹那を消して真ん中に表示〉
【沙羅】「あたくしと妹は世界の覇権を賭けて争っているのよ！」
【渉】「はぁ？」
なんですとーっ？
【明日香】「やっぱりウチの担任、頭イカレてるんだ」
明日香がボソッと毒を吐いた。けれど、沙羅先生は気にすることなく話を続ける。
【沙羅】「あたくしと妹の戦いの歴史が長いわ。ソ連とアメリカの宇宙開発競争を裏で糸を引いていたのも、あたくしたちよ」
って、その話ってうん十年前の話じゃないですか？
沙羅先生って歳いくつなんですか、って聞きたいとこだけど、レディーに歳を聞くのは止めておこう。つーか、その話題には触れな

いほうが身のためのような気がする。
【明日香】「つまり、この騒ぎは姉妹喧嘩が発端ってことね」
このとき初めて俺は気がついた。
周り人いないじゃん……みたいな。
この辺り一帯に人の気配はなく、あったとしても建物の中で、遥か遠くでは交通規制が行われているようだった。
つまり？
【渉】「つまりどういうことよ？」
【沙羅】「刹那、思う存分戦いなさい。そして、そのニセモノを完膚なきまでにスクラップにしてあげなさい！」
【刹那】「イエス・マスター！」
■■■Ｇ５００　その他（上段の回し蹴りを放つ刹那。それを肘上で受けるＢ刹那）
●●●ＳＥ０１０　移動１（サッ！人が瞬間的に場所移動）
●●●ＳＥ０１３　叩く２（強く殴る）
●●●ＳＥ０１２　叩く１（バシッ！叩いたのを受ける音）
●●●ＳＥ０１１　風を切る音（ビュン！回し蹴りや剣で風を切る）
●●●ＳＥ０１２　叩く１（バシッ！叩いたのを受ける音）
●●●ＳＥ０４９　叩く（パンチ！）
また戦いがはじまちゃったよ。しかも、さっきより心なしか激しいし。
二人の刹那の戦いは五分五分のようにも見えるけど、気のせいかもしれないけど、刹那のほうが押されてるような気がする。
【沙羅】「カスタムしてない通常モードでは、やはり刹那は不利だわ」
カスタムとか通常モードとか、なんですかそれ？
【沙羅】「刹那、１００万馬力よ！」
そこっ！！　意味わかんない応援しない！
交わされる拳と拳。男らしい戦いだ。って刹那って女だった。てか、あっちのＢ刹那もやっぱ女なのか？

●●●ＳＥ０１１　風を切る音（ビュン！回し蹴りや剣で風を切る）
　刹那に向かって踏み込んだＢ刹那がバク宙をしながら蹴りを放った――ムーンサルトキックだ！！
●●●ＳＥ０１３　叩く２（強く殴る）
　ムーンサルトキックをくらって足を地面から浮かせた刹那の足首をＢ刹那が掴んだ。
　そして、そのまま状態を捻りながら刹那の身体を横にぶん投げた！！
　再び宙を舞う刹那の身体。
■■■ｂ００５　駅前（表示）
●●●ＳＥ０１３　地面に落ちる（ドスッ！刹那が地面に叩きつけられる）
　背中からアスファルトに衝突したぞ。痛そうだ。
　つーか、この戦いって、どっちを応援するべきなんだ？
　元はと言えば、桜井をめぐってはじまった戦いだけど、どうやら本当は沙羅先生と妹の戦いらしい。
　ここはやっぱり知り合いである刹那を応援したほうがいいのか？
【渉】「刹那立つんだ！」
【明日香】「ふ～ん、麻生は刹那に勝って欲しいんだ」
　皮肉のこもったような言い方されたぞ。
【渉】「なんだよ、桜井はあっちの刹那に勝ってほしいのかよ？」
【明日香】「そういうわけじゃないけど」
　意味不明だ。
【沙羅】「刹那、しっかりしなさい！」
　地面に横たわる刹那に沙羅先生が駆け寄った。
●●●ＳＥ０４７　走る２（ハイヒール）
【沙羅】「しっかりするのよ、あなたはあたくしの最高傑作なのよ」
　最高傑作ってなんだよ！
【沙羅】「防護スーツを着ていたのに、こんなダメージを受けるなんて……」

防護スーツって、もしかしてその白い学ラン？
その学ランって防護スーツだったの？
つーか、なんでそんなもん着てるわけ？
【渉】「あの、沙羅先生に質問が……」
【沙羅】「うるさい黙ってなさい！　パーツを取り替えて防御力及び攻撃の力の強化……回転数も上げて……」
考え深げな表情をしている沙羅先生は、なにかを思いついたように手を叩いて、刹那の身体を軽かると担ぎ上げて走り去って行った。
【渉】「あ、沙羅先生！」
【明日香】「……疑問点がいくつかあるんだけど、麻生わかる？」
【渉】「俺に聞くな」
そう、謎は謎のままの方がいいってこともあるのさ。
つーか、刹那が気を失って沙羅先生が持ち去ったってことは、Ｂ刹那の勝利ってことかよ？
●●●ＳＥ０２７　ゴング終了（カンカンカンカン！）
Ｗｉｎｎｅｒ、２Ｐブラック刹那！！
●●●ＳＥ０３７　拍手喝さい（パチパチ、ワァー！）
▲▲▲ＢＧＭ００５　忍び寄る不安（スタート）
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）
【Ｂ刹那】「俺の勝ちのようだな、マスターもさぞお喜びになるだろう」
ちょっと待てよ、刹那が敗れたってことは……？
【Ｂ刹那】「明日香はオレのものだな」
Ｂ刹那の腕が伸び、明日香の腕をガッシリ掴んだ。
■■■Ａ０００　明日香・制服（表示）〈Ｂ刹那に少しかぶさるように表示〉
【明日香】「離してよ」
強引に明日香の身体は引き寄せられた。
【Ｂ刹那】「もうキミのことは死んでも離さないよ」
【明日香】「イヤだってば！」

逃げようと明日香はするが、B刹那の力は強く、相手の手を振り払うことができない。
怒った表情をしてB刹那の手を振り払おうとしている明日香の顔が俺に向けられた。
もしかして俺に助けを求めてるのか？
だとしたら、早く助けねば、男として名が廃る！！
【渉】「おい、桜井のこと離せよ！」
【B刹那】「なんだい？」
【渉】「桜井嫌がってるだろ、離してやれよ」
【B刹那】「それはできないな。これからオレ達は海の見える丘に建つ教会で式を挙げるんだ」
【渉】「なにぃ～～～っ！？」
なんか、スゴイとこまで人生設計が進んでるぞ。
ヤバイ、このままじゃ本当に桜井を持っていかれそうだ。
【B刹那】「オレに決闘を申し込むかい、明日香を賭けて？」
【渉】「……」
桜井が俺のことを真剣な眼差しで見てる。
決闘をして勝たなければ桜井が……。
でもさ、よく考えろよ俺。
さっきの戦いを見てたとおり、あんなすげえ戦いをする奴に、果たして俺は勝てるのか？
いや、勝てない。
絶対無理。
命いくらあっても無理。
つーか、無理。
でも、やらなきゃ……。
俺は歯を食いしばりながら、ぎゅっと拳を握った。
【B刹那】「さあ、やるのかやらないのか？」
【渉】「……くっ」
桜井が俺のことを見てる。

【B刹那】「やるなら白い手袋をオレに投げるんだ」
【渉】「投げるのかよ！」
白い手袋投げないと決闘の申し込みできないのかよ。
つーか普通、白い手袋なんて持ち歩いてないだろ！
俺が今持ってるものっていったら？
●●●SE016　猫の鳴き声（にゃ～ん♪）
この猫ぐらいだな。
俺の腕に抱かれて気持ちよさそうだな。
この猫見てると、気持ちが安らぐよな。
って、そんなこと考えてる場合じゃなかった。
【B刹那】「オレに決闘を申し込む勇気もないのか？」
【渉】「ちげーよ、白い手袋なんて持ち歩いてねぇんだよ！」
【明日香】「手袋なら、そこに落ちてるじゃん」
【渉】「あっ」
さっき刹那が決闘を申し込んだときに投げた手袋が地面に落ちていた。
よし、あれを拾って……。
いや、やっぱり決闘を申し込んだところで俺の敗北は決まってるようなもんじゃないか。
でも、でも、桜井をあきらめろっていうのかよ。
俺の桜井に対する気持ちってそんなもんかよ。
違う、俺は桜井のためなら！
決心した俺は手袋を拾おうと手を伸ばした――その瞬間！？
■■■A000　明日香・制服（消去）
■■■A011　B刹那・制服（消去）
●●●SE024　爆発音（ドカーン！車が爆発）
俺に抱かれていた仔猫が驚いて逃げ出してしまった。
【渉】「なんだ！？」
俺はすぐさま爆発音がした方向に目をやった。
近くで炎上し続けていた車がついに爆発を起こしたのだ。

【明日香】「だめ！」
なにが？
爆発した車から飛ばされたタイヤのホイールが、俺の腕から逃げ出した仔猫に向かって放物線を描いている。
【渉】「逃げろ！」
なにもできないでいる俺を差し置いて、B刹那が地面を蹴り上げた。
●●●SE010　移動1（サッ！人が瞬間的に場所移動）
B刹那が仔猫を助けようと走り出したのだ。
▲▲▲BGM005　忍び寄る不安（ストップ）
●●●SE043　飛来衝突（ヒュ～ン、ドン！アニメ風）
●●●SE013　人が倒れる（バタっ！）
（ミニキャラでアニメーション、B刹那の頭にホールクラッシュ）
【渉】「あ〝っ」
▲▲▲BGM001　大混乱（スタート）
タイヤのホールは見事B刹那頭をクラッシュした！
【渉】「大丈夫か、死んだか？」
【明日香】「……まさかぁ」
俺と桜井はすぐさま倒れるB刹那のもとに駆け寄った。
●●●SE014　走る1（タタタタッ！走る）
【渉】「大丈夫か？」
【B刹那】「……」
返事がない、ただの屍のようだ。
マジか！
マジで死んだか！？
桜井はすぐ近くにいた仔猫を抱き上げた。
【明日香】「この子は無事だったけど」
【渉】「尊い犠牲でその猫は助かったんだ。大事にしてやらないとな……じゃないだろ！」
とりあえず、脈があるか調べないと！

俺はすぐさまB刹那の服の袖を捲り上げて脈を取った。
大丈夫だ、脈はあるらしい。
呼吸も調べたが、こっちも大丈夫だ。
なのに目を覚ます気配がない。
【明日香】「麻生、人工呼吸してみたら？」
【渉】「できねーよ、んなこと」
【明日香】「アタシだってできない。女の子同士でキスするような趣味ないもん」
■■■Ｇ１０１　イベントＣＧ刹那（気を失うＢ刹那の唇が呼んでいる）
目をつぶり、意識を失っているＢ刹那の唇がそこにある。
●●●ＳＥ０２８　心臓の鼓動（ドキドキ）
こうやってまじまじ刹那の顔を見ると、やっぱ刹那って美形だよなって再確認する。こいつはＢ刹那だけど、顔はまったく同じだからな。
ずっと見てるとキスしたくなる。
ダメだ、やめるんだ俺！
たしかに、たしかにさ、俺は桜井以外の女にも手を出したことはあるさ……モーソーの中で。でもよ、リアルでは桜井一筋で、行かなきゃダメだろ！
でも……Ｂ刹那の唇が俺を呼んでいる。
●●●ＳＥ０２８　心臓の鼓動（ドキドキ）
俺は生唾をゴクリと呑み込んだ。
【渉】「人命救助のためだ！」
▲▲▲ＢＧＭ００１　大混乱（ストップ）
●●●ＳＥ０２９　キス１（ブチュ～♪食らいつくようなキス）
一気に俺はＢ刹那の唇に飛び込んだ、つーか、半ば食らいついた。
Ｂ刹那の肺の中に空気を入れ、俺は唇を離した。
と、ここで桜井の一言。
【明日香】「その刹那、男の人だよ」

●●●ＳＥ００７　ガ〜ン！（ガ〜ン！ショック。）
【渉】「なんですとーっ！？」
【明日香】「さっき聞いたんだけど、彼、男だって」
【渉】「桜井、謀ったな桜井！」
今ならガ〇ダムでシ〇アに謀られたガ〇マの気持ちがわかるかもしれない。
でも、この顔だったら、キスしても悔いは残らないような気がする。って、危ない危ない、そっちの趣味に目覚めることだった。
■■■ｂ００５　駅前（背景ＣＧ）
●●●ＳＥ０３０　まばたき（パチパチ♪目を覚まして目をパチパチ）
【Ｂ刹那】「……ううっ」
【渉】「気がついたか」
【Ｂ刹那】「……ふふふっ」
【渉】「ん？」
なんか様子が変だぞ？
▲▲▲ＢＧＭ００１　大混乱（スタート）
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）
【Ｂ刹那】「あはははは、あ〜ははははっ！」
突然立ち上がったＢ刹那が高笑いをはじめた。
頭ぶつけて壊れたか？
【Ｂ刹那】「俺様は神だ！」
●●●ＳＥ００１　決めポーズ（シャキーン！）
……ヤヴァイ、この感じは、あれだ。
俺は知っている、これは本家刹那特異発作〈暴走〉に似ている。
ま、まさか、こいつも〈暴走〉するのかよ！？
逃げないと巻き込まれる！
【渉】「桜井逃げるぞ！」
【明日香】「えっ？」
【渉】「刹那の〈暴走〉だ！」

【明日香】「えぇ～っ！」
〈暴走〉と聞いてすぐに理解したらしい。俺と桜井は急いでトンズラした。
すると、俺たちに向かって一台のバイクが近づいてくる。
●●●ＳＥ０２１　バイク１（ブゥゥゥン！バイクの走る音）
【渉】「あれは！」
白衣でバイクに跨る女性と二台に跨る美形。あれはまさしく沙羅先生と刹那だ。しかも二人ともノーヘルだし。
●●●ＳＥ０２２　バイク２（キキィィィッ！バイクの止まる音）
●●●ＳＥ０１０　着地（スタッ！人が着地する音）
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（表示）
●●●ＳＥ０１０　着地（スタッ！人が着地する音）
■■■Ａ０１０　刹那・制服（表示）〈沙羅と少し時間差で並べて表示〉
【沙羅】「待たせたわね」
いや、別に待ってたわけじゃないけど、来てくれて助かったかも。
【沙羅】「チューンアップした刹那の力を見せてあげなさい」
【刹那】「イエス・マスター！」
ってチューンアップってなんだよ。
人ってそんなに短期間で強くなれるものなのか？
【渉】「あのＢ刹那、〈暴走〉モードなんですけど、勝てるんスか？」
【沙羅】「刹那には有りとあらゆる戦闘術を叩き込んで置いたわ」
■■■Ａ０１０　刹那・制服（消去）
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（消去）
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）
【Ｂ刹那】「あははは！」
●●●ＳＥ０５０　ガラスが割れる１（ガシャン！）
●●●ＳＥ０５１　ガラスが割れる２（ガシャン！）
●●●ＳＥ０５２　ガラスが割れる３（ガシャン！）

辺りの窓ガラスが突如割れはじめた。
本家刹那も〈暴走〉すると超能力みたいの発揮して窓ガラスを割ったりすることがある。きっと、B刹那も同じ力を有している違いない。
そして、あの力もきっと持ってるハズだ。
【渉】「ヤバイ、桜井逃げろ！」
俺は桜井を抱きかかえてダッシュした。
●●●SE024　爆発音（ドカーン！）
【明日香】「ごほっごほっ……」
【渉】「大丈夫か桜井？」
後ろを振り返ると、地面にフロントから突っ込んだ車が炎上していた。今、空中をぶっ飛んできた車だ。
そう、〈暴走〉時の刹那の能力には、念動力――つまり物を動かす力もあるのだ。
【B刹那】「あははは、人類よ、神の力を思い知るがいい」
●●●SE050　ガラスが割れる1（ガシャン！）
●●●SE051　ガラスが割れる2（ガシャン！）
●●●SE052　ガラスが割れる3（ガシャン！）
ヤバイぞ、本格的にヤバイ。
【沙羅】「刹那、殺るのよ！」
【刹那】「イエス・マスター！」
刹那が地面を駆ける。そのスピードはオリンピック選手顔負けのスピードで、足にジェットエンジンでも積んでるんじゃないかと疑うほどだ。
■■■G500　イベントCGその他（上段の回し蹴りを放つ刹那。それを肘上で受けるB刹那）
●●●SE011　風を切る音（ビュン！回し蹴りや剣で風を切る）
●●●SE046　叩く5（ボディブロー）
刹那の蹴りが決まった！
●●●SE013　重い物体が地面に落ちる（ドスッ！）

だが、すぐにB刹那は立ち上がり、速攻でパンチを放つ。
●●●SE012　叩く1（バシッ！叩いたのを受ける音）
●●●SE013　叩く2（強く殴る）
●●●SE012　叩く1（バシッ！叩いたのを受ける音）
●●●SE011　風を切る音（ビュン！回し蹴りや剣で風を切る）
●●●SE013　叩く2（強く殴る）
●●●SE010　移動1（サッ！人が瞬間的に場所移動）
スゴイ、ズゴイぞ、〈暴走〉B刹那を刹那が押してる。これなら勝てるかもしれない！
●●●SE031　携帯の着信1（沙羅先生の携帯）
ん？
誰かのケータイか？
【沙羅】「もしもし――」
沙羅先生のケータイか。
【沙羅】「え？」
ケータイで話している沙羅先生の顔が見る見る蒼ざめていく。
【沙羅】「……」
ケータイを切った沙羅先生は無言のまま立ち尽くしている。いったい、どんな内容の電話だったんだ？
【渉】「沙羅先生、どうしたんスか？」
【沙羅】「中東の国からミサイルが発射されたそうよ」
【渉】「へぇ……で？」
【沙羅】「あと数分でここに落ちるそうよ」
【渉】「ふ～ん」
ミサイルが発射されて、ここに落ちるのかぁ……。
【渉】「マジでーっ！？」
【沙羅】「マジよ」
【渉】「なんでミサイルなんかが飛んでくるんスか？」
【沙羅】「あのニセモノが呼び寄せたんじゃないかしら？」
【B刹那】「あはは、神の裁きを受けるがいい！」

Ｂ刹那の頭は完全にイッちゃってるみたいだ。
【沙羅】「早く逃げたいところだけど、爆発の範囲内から抜け出せそうにないわ♪」
笑顔でサラッとかつ、グサッと言ったよ、この人。
【沙羅】「まあ、苦しまずに死ねるだけラッキーかしらね」
【明日香】「あ～あ、くだらないジンセーだった」
【渉】「おいおい、桜井まで」
【明日香】「死ぬのなんて、ここだろうと、何時だろうと同じことなんだから」
●●●ＳＥ０１６　猫の鳴き声（にゃ～ん♪）
桜井の腕の中で仔猫が鳴いた。
【渉】「俺もこの猫もまだ死ねねえよ」
【明日香】「だからって麻生になにができるってわけじゃないでしょ」
【渉】「……うっ」
痛いところつくなよ。胸にグサッと来たぜ。
【沙羅】「でも、打つ手がないわけじゃないわ」
やっぱり手があるのかよ。だから、この人こんなに落ち着いてたんだな。
沙羅先生はどこからともなくある物を取り出した。
●●●ＳＥ０３２　アイテム登場（ジャ～ン！とか、ドラえもんがアイテム出すときの音でも可）
■■■Ｇ５０３　イベントＣＧその他（テフロン加工のフライパン）
【沙羅】「これよ！」
【渉】「は？」
俺は自分の目を疑った。明日から眼鏡をかけたほうがいいかもしれない。マジでそう思った。
【沙羅】「テフロン加工でサビにも強いわ」
【渉】「それって、パンはパンでも食べれないパンですよね？」
【沙羅】「そうよ、３９８０円のフライパンよ」

沙羅先生から手渡されたフライパンを俺はまじまじ見つめた。いたって普通のフライパンにしか見えない。だが、もしかしたら、それはカモフラージュで、このフライパンには最新鋭の技術が組み込まれているのかもしれない。

【渉】「このフライパンで俺になにを？」

【沙羅】「あのニセモノの頭をぶっ叩いて正気に戻すのよ」

【渉】「ｗｈａｔ？」

【沙羅】「そうね、叩くときのコツは後頭部を躊躇わずに一発で仕留めるのよ」

最新鋭どころかアナログだ。

【沙羅】「飛んでくるミサイルの軌道を念力で変えるのには、あの二人の力が必要なのよ。わかったら、さっさと行きなさい！」

●●●ＳＥ０４９　蹴り（バシ！）

■■■ｂ００５　駅前（背景ＣＧ）

【渉】「うっ！」

ヒールの踵で背中蹴られた。

つーか行くのいいけど、本当にこんなアナログな方法で正気に戻るのか？

■■■Ｇ５００　イベントＣＧその他（上段の回し蹴りを放つ刹那。それを肘上で受けるＢ刹那）

●●●ＳＥ０１０　移動１（サッ！人が瞬間的に場所移動）

●●●ＳＥ０１１　風を切る音（ビュン！回し蹴りや剣で風を切る）

●●●ＳＥ０１２　叩く１（バシッ！叩いたのを受ける音）

●●●ＳＥ０１３　叩く２（強く殴る）

●●●ＳＥ０１４　走る１（タタタタッ！走る）

●●●ＳＥ０１５　着地（スタッ！人が着地する音）

■■■ｂ００５　駅前（背景ＣＧ）

……近づけねぇよ！！

激しさを増している二人の戦いの渦中に飛び込むのは無謀と言えた。飛び込んだらマジ死ぬ。

【沙羅】「早くしないと辺り一帯火の海よ♪」
【渉】「行きますよ、行きますってば、逝けばいいんでしょ」
だが、飛び込もうにもチャンスがない。
【明日香】「あっ？」
【渉】「なに？」
●●●ＳＥ０１６　猫の鳴き声（にゃ～ん♪）
明日香に抱かれていた仔猫が逃げ出した。
【明日香】「どこ行くの？」
仔猫はアスファルトの地面を駆け、戦いの渦中の中に！？
【渉】「行くな、危ない！」
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）
【Ｂ刹那】「……ん？」
●●●ＳＥ０１６　猫の鳴き声（にゃ～ん♪）
足元に近づいてきた仔猫を見てＢ刹那の動きが止まったぞ？
【沙羅】「今よ、チャンスよ！！」
【渉】「えっ？」
俺はフライパンを構えてＢ刹那に向かって走った。
大丈夫だ、Ｂ刹那が動きを止めている今ならいける！！

1. 躊躇わず後頭部に渾身の一発だ！！――※００５へ
2. 迷わず顔面に渾身の一発だ！！――※００６へ

刹那編（００５・未編集）

●●●ＳＥ０２６　叩く（本当は金属音が欲しい）
クリティカルヒット！！
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（消去）
●●●ＳＥ０１３　人が倒れる（バタっ！）
俺の攻撃を受けたＢ刹那は地面に沈んだ。
すぐに駆け寄ってきた沙羅先生がＢ刹那の脈を確かめ呼吸を確かめ、襟首を掴んで無理やり立たせると、
【沙羅】「起きるのよ！」
●●●ＳＥ０３３　叩く４（バシン！ビンタの音）
Ｂ刹那の頬に平手打ち炸裂！！
【Ｂ刹那】「……う、うぅ……っ」
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）
【Ｂ刹那】「……俺は……ここはどこ、私はだれ～れ？」
●●●ＳＥ０３３　叩く４（バシン！ビンタの音）
Ｂ刹那の頬にもう一発平手打ち炸裂！！
【沙羅】「寝ぼけてないで起きるのよ！」
【Ｂ刹那】「……上條沙羅！？」
目を丸くしてＢ刹那は完全に目を覚ました。
【Ｂ刹那】「お命、頂戴する！」
【沙羅】「うるさいわよ、今はそれどころじゃないのよ！」
【Ｂ刹那】「なに？」
【沙羅】「アナタが呼んだミサイルがここに向かってるのよ」
【Ｂ刹那】「ふむ、そういえば、夢の中で核ミサイルの発射コードに働きかけたような気が……」
夢の中って！
寝ぼけて核ミサイルなんて発射させんなよ！！
【沙羅】「さあ、二人の力でミサイルの軌道を変えるのよ！」

【刹那】「イエス・マスター！」
【Ｂ刹那】「ふむ、了解した」
■■■Ａ０１０　刹那・制服（表示）〈Ｂ刹那と並べて表示〉
二人の刹那は目を閉じて精神を集中しはじめた。っぽい。
なんせ、見た目的には目を瞑ってるようにしか見えないから、ホントに精神を集中させてるのかどうか？
【刹那】「Ｚｚｚｚｚ……」
ん？
いびきが聞こえる……って。
【渉】「寝るな刹那！」
●●●ＳＥ０００　衝突音１（パコーン！軽い物体が物に当たる）
俺の平手が刹那の頭にヒット！
【刹那】「ごめんごめん、寝ちゃったよ♪」
あふぉだ、こいつ絶対真症のあふぉだ。
【沙羅】「ヤバイわ、時間がないわよ」
超最新鋭高性能双眼鏡と漢字を羅列させるくらいスゴイ双眼鏡で沙羅先生はなにかを見ていた。
【渉】「ちょっと俺にも見えてください！」
俺は沙羅先生から双眼鏡を借りると、遥か上空を眺めた。
■■■Ｇ５０４　イベントＣＧその他（空を飛ぶ核ミサイル）
●●●ＳＥ０３４　ミサイル（ゴオォォォォ！轟音を鳴らすミサイル）
マジで、ミサイル飛んできてるし！
ちょっぴり沙羅先生の悪いジョーダンかなって思ってたんだけど、マジで飛んで来ちゃってるよ！！
あはは、ヤバイな。
■■■ｂ００５　駅前（背景ＣＧ）
■■■Ａ０１０　刹那・制服（表示）
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）〈刹那と並べて表示〉
【刹那】「う～ん、ぜんぜん軌道変わらないや、あはは」

【B刹那】「駄目だ、どうにもならない」
おいおい、弱音を吐くのはやめてくれよ。君たち変人だけどさ、今は君らしか頼る人いないんだから。
【沙羅】「やっぱり通常モードでは力が足りないのね。かと言って〈暴走〉させれば、こっちの言うことを聞かなくなるし」
なるほど、〈暴走〉してない刹那じゃ力不足なのか、うん納得。って納得してどうする！
【渉】「沙羅先生どうにかしてくださいよ！」
【沙羅】「あたくしの辞書に不可能の文字はないわ。そうね、あと小1時間もあれば打開策が思いつくわ」
【渉】「って、そのころにはみんな死んでますよ！」
【沙羅】「そうだわ！」
●●●ＳＥ００１　決めポーズ（シャキーン！）
沙羅先生の瞳が妖しく輝いた。
しかも、その瞳はなぜか桜井を見ている。
【明日香】「な、なんですか？」
本能的に身の危険を感じた桜井が後退りをする。
【沙羅】「……ふふふ」
肉食獣と草食動物の構図ができてるぞ！
沙羅先生が獲物を狙っている。
【沙羅】「ダブル刹那見るのよ！！」
沙羅先生の手が素早く何かを捲り上げた！！
■■■Ｇ００４　イベントＣＧ明日香（スカートが捲れてパンツが見える構図）
●●●ＳＥ００８　トキメキ（ポワワワァン♪トキメキ）
【明日香】「きゃっ！？」
脳内シャッター！！
脳内メモリー保存！！
夜のオカズにもらった！！
●●●ＳＥ００１　決めポーズ（シャキーン！）

【刹那】＆【Ｂ刹那】「！？」
【刹那】「……本気で行くよ」
刹那は不敵な笑みをＢ刹那に向けた。
【Ｂ刹那】「……行くぞ」
Ｂ刹那も笑みを浮かべた。
次の瞬間、スゴイ突風が当たりを包み込んだ。
●○ＳＥ００２　覚醒めるとき（キュイン！×４ゴゴゴゴゴゴォォォォ！）
おおっ！
アビリティーゲージを満タンにした二人の刹那がついに真の力を発揮させた！
ダブル刹那の身体をオーラが包み込む（目に見えないけど、たぶん）。
そして、二人は念波をミサイルに向けて放ったのだった！！
●●●ＳＥ０３５　波動砲（力を溜めて発射！）
（ミニキャラでアニメーション、ダブル刹那が発射した念波がミサイルから反れる）
あ〝っ！！
■■■ｂ００５　駅前（背景ＣＧ）
【刹那】「外しちゃったよ♪」
【Ｂ刹那】「ふむ、そのようだな」
●●●ＳＥ００７　ガ〜ン！（ガ〜ン！ショック。）
【渉】「マジかよ！」
【沙羅】「大変よ、もう間に合わないわ」
ミサイルはすでに肉眼でもかろうじて見える位置まで来ていた。
▲▲▲ＢＧＭ００１　大混乱（フェードアウト）
■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（表示）
【Ｂ刹那】「申し訳ない、全て俺のせいだ。責任は取ろう」
真剣な表情をしたＢ刹那は明日香に歩み寄り、静かに笑った。
▲▲▲ＢＧＭ００４　迎撃（フェードイン）

【B刹那】「キミの純白の愛はもらった」
カッコイイいい方してるけど、純白の愛ってさっきの桜井のパンツのことだろ！
【明日香】「……なにをする気？」
【B刹那】「あそこにいる、さっきの仔猫のこと頼む」
●●●SE016　猫の鳴き声（にゃ～ん♪）
【B刹那】「ありがとう」
なんか雰囲気が怪しいぞ。まるで、これから戦場にいく兵士みたいな……。
【B刹那】「とぉっ！」
■■■A011　B刹那・制服（画面の上に向かってフレームアウト）
●●●SE036　空に飛び上がる（ビュン！人が空に飛び上がる）
と、飛んだぞ！
B刹那が空を飛んだ！？
マジかよ、そんなのありかよ！？
■■■b006　青空（背景CG）
飛び上がったB刹那は上空で停止しミサイルが来るのを待ち構えた。
ミサイルはすぐそこまで来ている。
そう、B刹那は自らの肉体でミサイルの軌道を変える気なのだ！
■■■G504　イベントCGその他（空を飛ぶ核ミサイル）
●●●SE034　ミサイル（ゴオォォォォ！轟音を鳴らすミサイル）
轟音を鳴らし空を飛ぶミサイル。
身体の5倍以上ものあるミサイルをB刹那は果たしてどうやって止めようというのか？
しかも、ミサイルの移動速度は新幹線よりもジェット機よりも早い。それだけでぶつかったときの衝撃は計り知れない。普通なら即死だ。

■■■ｂ００６　青空（背景ＣＧ）
だが、それでもＢ刹那は向かい来るミサイルを待ち構えた。
【Ｂ刹那】「オレのメモリーにはしっかりと純白の愛が刻まれている！」
青空に浮かぶ巨大な影。
ついにミサイルが肉眼でもはっきりと見えたと思った次の瞬間には――。
●●●ＳＥ００１　決めポーズ（シャキーン！）
■■■Ｇ１０２　イベントＣＧ刹那（ミサイルを素手で止めているＢ刹那）
●●●ＳＥ０３４　ミサイル（ゴオォォォォ！轟音を鳴らすミサイル）
な、なんと、Ｂ刹那は素手でミサイルを止めたのだ！
ミサイルはジェット噴射を続けながらも、Ｂ刹那によって上空で止められている。
しかし、Ｂ刹那の身体が押されている。
ミサイルの推進力がＢ刹那の力を僅かながら勝っているのだ。
駄目だ、このままじゃ、ミサイルがっ！
【Ｂ刹那】「あ～ははははっ、オレは神だ！」
キターっ、Ｂ刹那の〈暴走〉だ！！
押されていたＢ刹那の身体が止まり、ミサイルも空中でピタリと静止した。
【Ｂ刹那】「うおりゃああぁぁぁっ！！」
●●●ＳＥ０３９　風を切る音（ビュン！回し蹴りや剣で風を切る）
●●●ＳＥ０３９　風を切る音（ビュン！回し蹴りや剣で風を切る）
●●●ＳＥ０３９　風を切る音（ビュン！回し蹴りや剣で風を切る）
●●●ＳＥ０３９　風を切る音（ビュン！回し蹴りや剣で風を切る）
フィニッシュはジャイアントスイングだ！！
■■■ｂ００６　青空（背景ＣＧ）
●●●ＳＥ０４５　遠ざかるミサイル（シューーーン！）

●●●ＳＥ００１　決めポーズ（シャキーン！）
ミサイルは遥か宇宙へ飛ばされたのだった。
●●●ＳＥ０２４　爆発音（ドカーン！）
そして、力を使い果たしたＢ刹那は地面に落下してしまった。
▲▲▲ＢＧＭ００４　迎撃（ストップ）
■■■ｂ００５　駅前（背景ＣＧ）
●●●ＳＥ０２５　物が飛ぶ（ヒューン！）
●●●ＳＥ０２６　重いものがぶつかる（ドン！）
地面の衝突したＢ刹那は潰れたトマトになると思いきや、原型を留めて気を失っていた。
まあ、ミサイルを素手で止めた奴が、高いとこから落ちたくらいじゃ潰れはしないよな。
俺たちはすぐさまＢ刹那の元に駆け寄った。
▲▲▲ＢＧＭ００６　雨雲（スタート）
■■■Ｇ１０１　イベントＣＧ刹那（気を失うＢ刹那の唇が呼んでいるを使いまわし）
Ｂ刹那は身動きひとつせず、その場に横たわっていた。
すぐに沙羅先生が脈と呼吸を確かめるが、少し間を置いてから首を横に振った。
【沙羅】「全機能停止だわ」
【渉】「……嘘だろ」
【明日香】「……そんな」
●●●ＳＥ０１６　猫の鳴き声（にゃ～ん♪）
悲しそうな声を上げて鳴く仔猫が、目を瞑るＢ刹那の顔に擦り寄った。しかし、Ｂ刹那はなにも反応を示さず、ただ深い眠りに落ちているだけだった。
Ｂ刹那は俺たちのため、みんなのために犠牲になったんだ……。
【渉】「クソッ」
俺はＢ刹那の傍らに膝を付き、込み上げて来るやるせなさに打ちのめされそうだった。

胸の苦しさや悲しさが、行き場もなく俺の中で渦巻く。
【刹那】「……ありがとう、キミのことは忘れないよ」
そう、俺たちは自分たちを救ってくれたB刹那に感謝しなきゃいけない。けれど、感謝したところで、B刹那が戻ってくるわけじゃないんだ。
もう、彼は……帰って来ない。
【渉】「……B刹那、B刹那ーっ！！」
▲▲▲BGM006　雨雲（フェードアウト）
●●●SE031　携帯の着信（沙羅先生と同じだけど、他の欲しい）
……ん？
なんだ、この音は？
【B刹那】「あ、俺のケータイだ」
●●●SE018　オチ1（パフ！おもちゃのラッパがパフッって鳴るやつ）
▲▲▲BGM007　わるだくみ（スタート）
【渉】「へ？」
■■■b005　駅前（背景CG）
■■■A011　B刹那・制服（表示）
【B刹那】「ごめんごめん、電源切っておくの忘れてた」
死んだと思ったB刹那が立ち上がりやがった。
【B刹那】「――はい、もしもし」
しかも、電話に出やがったぞ。
【B刹那】「えっと、リビングの――そこじゃなくて――だから――わかりました、すぐ帰ります」
ケータイを切ったB刹那は頭の後ろに手をやってワザとらしく笑いやがった。
【B刹那】「ウチのマスターがさぁ、印鑑どこにあるかわからないって喚くもんだから、俺、すぐに帰らなきゃいけなくなってさ」
俺たちに背を向けるB刹那。

【B刹那】「じゃあ、またな！」
そういい残してB刹那は走り去って行った。しかも、爽やか笑顔。
……はぁ？
……。
……。
……。
【渉】「あの野郎、ヌッコスロス！！」
●●●SE015　雷（ゴォォォォン！）
【沙羅】「午後の授業がはじまるから帰るわよ」
【刹那】「イエス・マスター」
●●●SE038　バイク3（バイクのエンジンをかける）
●●●SE021　バイク1（ブゥゥゥン！バイクの走る音）
二人乗りしたバイクが走り去っていく。
【明日香】「アタシも学校帰ろ。麻生、この子頼んだから、はい」
●●●SE016　猫の鳴き声（にゃ～ん♪）
【渉】「えっ？」
仔猫を渡された俺は遠ざかっていく桜井の背中を呆然と眺めていた。
結局、今回の騒ぎはいったいなんだったんだよ！！
【渉】「意味わかんねえよ！！」

おしまい♪

刹那編（００６・未編集）

勝利を確信しつつ、俺は迷わずＢ刹那の顔面に渾身の一発を放った！！

●●●ＳＥ０３９　風を切る音２（ブン！）

【Ｂ刹那】「正面から来るとは身の程知らずめ」

俺の一撃は軽々しくかわされてしまった。

一撃にあまりにも力を込めすぎた俺はバランスを崩し、次の行動に瞬時に移れなかった。そこをＢ刹那の攻撃が狙う。

●●●ＳＥ０４６　叩く５（ボディブロー）

【渉】「うっ」

ボディブローが……。

腹にボーリングの玉をくらったみたいな衝撃を受け、俺は膝から地面に崩れた。

だめだ、立つこともできねぇ。

Ｂ刹那のたった一撃のパンチのせいで、俺は立つことすらままならなくて、地面にうつ伏せになって倒れてることしかできなかった。

今の俺ってかなりカッコ悪い。

思いっきし敗者じゃん。

■■■Ａ０１１　Ｂ刹那・制服（消去）

■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（表示）

【沙羅】「立つんだ、立つんだジョー！！」

俺の名前……ジョーじゃないし。

【沙羅】「しまった！？」

よかった、俺の名前がジョーじゃないって気づいて――。

【沙羅】「間に合わなかったわ」

沙羅先生は双眼鏡片手に遥か上空を眺めていた。

■■■Ｇ５０４　イベントＣＧその他（空を飛ぶ核ミサイル）

●●●ＳＥ０３４　ミサイル（ゴオォォォォ！轟音を鳴らすミサイ

ル）〈リピート〉
雲を切りながら上空を飛ぶミサイル。
ミサイルはもう間じかまで迫っていた。
肉眼でその巨大さが確認できた――次の瞬間には！
●●●ＳＥ０３４　ミサイル（ゴオォォォォ！轟音を鳴らすミサイル）〈ストップ〉
■■■ｂ００５　駅前（背景ＣＧ）〈背景消去・画面を白く〉
●●●ＳＥ０２４　爆発音（ドカーン！）
閃光で辺りは白一色に染まり、全ては灰の海に沈んだ。

■■■ｂ０００　教室（背景ＣＧ）
●●●ＳＥ０１１　風を切る音（ビュン！チョークを投げる）
●●●ＳＥ０００　衝突音１（パコーン！とチョークが頭に当たる音）
【渉】「痛ぇっ！」
▲▲▲ＢＧＭ０００　喧噪（スタート）
……教室？
【渉】「夢かよ！」
【沙羅】「大声なんて出して、まだ寝ぼけているのかしら？」
――あったまマジ痛ぇ。
まるでなんかに刺されたみたいだ。
……ん？
前にもこんなことがあったような気がするぞ？
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（表示）
【沙羅】「あたくしの授業で眠るなんて、いい度胸してるわね」
【渉】「あはは、やだなぁ、沙羅先生の授業でなるハズないじゃないですか」
【沙羅】「それなら、あなたが寝ていないということを証明してくれる証人を召喚して、あなたの無実を証明してみなさい！」
【渉】「はっ？」

【沙羅】「証人がいないのであれば、あなたは有罪確定よ……ふふっ」
【渉】「わかりました、今すぐ探しますから！」
あれ、まったく同じだ。
つーか、そんなことより証人を探さねば！！
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（消去）
俺は一生懸命、証人を探した。探したさ、そう、探したよ。でも、結局見つからなかった。
もう、だめだ……俺には打つ手がない。
■■■Ａ０３０　沙羅・白衣（表示）
【沙羅】「さぁ～て、ミスター麻生。判決の時が来たようよぉん♪」
判決っていうか死の宣告。
この状況も前と同じだぞ。
なんだよ、一体全体なにが起きてるんだよ。
もしかして、ここも夢なのか？
つーか、もしかして、ここでサイレンが鳴ったりして。
●●●ＳＥ００３　警報音（ウゥーン！ウゥーン！）
▲▲▲ＢＧＭ０００　喧噪（消去）
▲▲▲ＢＧＭ００１　大混乱（スタート）
【渉】「ここも同じかよ！！」
【沙羅】「わるさいわよ、緊急事態なんだから叫ばないの！」
【渉】「あはは、やってらんねぇ～」
このあと、もちろんＢ刹那が登場し、こうして俺は再び同じ話を繰り返さねばならなかったのだ。

ＢＡＤ　ＥＮＤ２

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2999i/

至極最強

2010年10月8日23時59分発行